

40-647

山西村駿次  
山崎寬猛  
共著

最近  
調查  
滿韓之富源  
全

合資  
社  
內外興業社出版

明治  
30 5 14  
丙午

序

世人口を開けば乃ち曰く、戦後經營は我帝國焦眉の問題なり、滿韓經營は、我國民刻下の急務なりと。然り、滿韓を開發して、帝國の利權をこゝに扶殖し、仍つて以て戦後經營の實を擧ぐべきは、我帝國が大戦の美果を收め、國運を興隆せしむる所以にして、若し此問題にして、解決する能はざらんか、國勢將さに外に萎縮して、民力亦内に退嬰するに至らんとす。されば滿韓は、我國民の大飛躍を試むべき舞臺にして、此地理を解し、此人情に通じ、此習慣を知りて、始めて其活動を開始するを得ん。本書著作の意、亦恐らくこゝに存せしものならんか。

世間此種の書、敢へて尠きにあらず。されど多くは系統なく、秩序なく、或は其觀察一地方に止まり、一事業に走り、陳腐の材料と

管見の議論とを以て満たされざるもの、殆んど稀なり。本書が従  
來同種の刊行物中に於て、一頭地を抜き、最も通俗的に、系統あり  
秩序ある編纂の方法を採りしは、滿韓經營が國民的問題たる  
同じく、又國民一般に最も會得し易からしむるの意に出でたる  
ものならんか。

若し各専門の事業に就き、細心調査を要するものに至つては、  
此書に依りて先づ其輪廓を知り、而して後ち他の資料に俟つべ  
きなり。余はこゝに本書を、世上の讀者に紹介するの光榮を得た  
るを喜び、而して又此の如き刻下必要の良書が、余が同人の手に  
よりて、著はされたるを祝さずんばあらざるなり。

明治三十九年四月

鵬 雲 近 藤 賤 男

## 滿韓の富源目次

### 第一篇 新發展地の解剖

#### 第一 滿韓の面積

(一)我三倍大の面積 (二)富源の培養者

#### 第二 滿韓の人口

(一)日本人口の趨勢 (二)好箇の樹口

### 第二篇 滿洲

#### 第一部 遼東半島地方

##### 第一 大連港(我滿洲發展の基地)

(一)我手に移りし租借權 (二)大連の市街組織 (三)大連在住の日本人  
(四)大連附近の牧畜と山林 (五)近海の日清人漁業

第二 旅順口(東洋の大軍港).....二六

- (一)帝國海軍の軍鎮 (二)戦艦組念の市街 (三)商取引の状態
- (四)旅順附近の動植物 (五)旅順近海の漁業

第三 金州(我租借地内の要市).....二五

- (一)商業の區域 (二)農業及び其習慣 (三)山林と砂金地
- (四)清國貨幣の計算法

第四 貔子窩(遼東南海岸の要港).....三〇

- (一)開港候補地 (二)商業上の價值 (三)附近の産業地

第五 蓋平(亦産業の二中心).....三三

- (一)中島有数の市邑 (二)製鹽業の中心 (三)製絲法の一斑 (四)蠶絲取引の方法 (五)製鹽業の最盛地 (六)農業生産費 (七)砂金地と炭礦

第二部 遼河流域地方.....四〇

第一 營口(滿洲最大の貿易港).....四三

- (一)營口發達の原因 (二)貿易上の勢力圏 (三)滿洲最大の工業 (四)豆

第二 遼陽(産業上の大市場).....五九

- 類取引の方法 (五)金融機關の種類 (六)利子及び通貨 (七)貨物賣買の方法 (八)度量衡の種類 (九)遼河の運輸
- (一)滿漢韓の要衝 (二)販賣重要商品 (三)盛大なる燒鍋 (四)煙臺の石炭坑 (五)金融及び通貨 (六)商情一斑 (七)水陸の運輸 (八)各種の度量衡

第三 海城(亦著名の一市邑).....六九

- (一)商工業の状態 (二)耕地及び農産物

第四 奉天(清帝國の舊都).....七一

- (一)滿洲最大の市街 (二)商業上の價值 (三)製粉事業の中心 (四)奉天附近の農地 (五)重要物産の種類 (六)金融情況 (七)通貨及び取引習慣 (八)運輸交通 (九)度量衡の種類 (十)百億圓?の炭礦

第五 鐵嶺(遼河々畔の大市場).....七五

- (一)大豆の集散市場 (二)大豆の輸送費用 (三)同屋及び金融

第六 開原(古の開元城).....八九

第七 昌 圖(産業亦盛大).....九二

第三部 鴨綠江流域地方.....九三

第一 安東縣(鴨綠江畔の營口).....九三

(一)未來の一大都會 (二)日本人の勢力 (三)日本人の居住地 (四)商品の供給區域 (五)市場と商業協會 (六)金融事情 (七)鴨綠江の漁業 (八)鴨綠江附近の農業 (九)鴨綠江流域の礦業

第二 大東溝(我勢力圏の一盛邑).....九七

(一)材木の最大市場 (二)長白山伐木事業 (三)鴨綠江の筏流し (四)材木賣捌方法

第三 鳳凰城(滿韓街道の要區).....一〇四

(一)南滿洲の要鎮 (二)附近の礦産物

第四部 松花江及び嫩江流域地方.....一〇五

第一 吉 林(滿洲の代表的市府).....一一六

(一)吉林省の首府 (二)日本品の消費状態 (三)名産の麻と煙草 (四)穀物及び蠶の産況 (五)金融及び通貨 (六)取引習慣 (七)吉林營口間の交通 (八)度量衡

第二 長 春(滿蒙貿易の中心).....一二六

(一)我滿洲鐵道の終點 (二)重要輸出入品 (三)糧粟の名産地 (四)金融及び商業 (五)所謂長吉鐵道

第三 哈爾濱(露國の理想的都府).....一三〇

(一)亞細亞の莫須科 (二)哈爾濱の三大區劃 (三)集散の重要商品 (四)露人成功の第一工業 (五)所謂滿洲の穀庫 (六)家畜并に精肉の供給 (七)金融と露清銀行 (八)戦前の日本商民 (九)松花江と水運 (十)東清鐵道の中心

第四 伯都訥(沃野中の要市).....一四二

(一)松花江嫩江の會流點 (二)製造業の盛大

第五 齊々哈爾(北滿洲の要市).....一四四

目

次

五

(一)黒龍江省の首府 (二)商品の集散

第六 寧古塔(東滿洲の要市).....一四

(一)沿海州との關係 (二)吉林浦港の中継地

第五部 黒龍江流域地方.....一四

第一 愛 琿(黒龍江畔第一の盛邑).....一四

(一)對露貿易の市場 (二)商業狀態

第二 海拉爾(露國勢力圏内の一要市).....一四

(一)天惠の好牧場地 (二)獸毛皮の大市場

第三篇 韓 國.....一五

第一部 韓國南部地方.....一五

第一 釜 山(京釜鐵道の起點).....一五

(一)日本國釜山の觀 (二)日本人の商業 (三)韓人間の商業 (四)農業と

土地賣買 (五)其他の産業 (六)金融事情 (七)度量衡の種類 (八)海上の運輸機關 (九)京釜鐵道

第二 馬山浦(朝鮮海峽の要地).....一七

(一)將來の大貿易港 (二)商工業及び市場 (三)多量なる農産 (四)附近の嶺山業 (五)欲知島の漁場 (六)海陸運輸の利便 (七)本邦人の好事業

第三 統 營(漁業上の要市).....一八

(一)慶南の一要市 (二)漁船の根據地

第四 晋 州(慶南の商業地).....一八

(一)慶尙南道の首府 (二)毎年兩度の大市 (三)木綿の名産地

第五 木 浦(半島屈指の良港).....一八

(一)前途多望の地點 (二)商取引の盛大 (三)南平の木綿市場 (四)耕作地の價格 (五)小作料及び地租 (六)耕地買入上の要件 (七)棉花栽培の有様 (八)製鹽業亦た多量 (九)七山灘の漁場 (十)其他の各産業 (十一)金融及び通貨 (十二)度量衡の種類 (十三)海陸の交通運輸

第六 群 山(最も有望の貿易港).....二四

(一)全忠兩道の咽喉 (二)商業及び市場 (三)苧布の主産地 (四)農産業の前途 (五)日本人經營の農事 (六)水田の收支計算 (七)農事經營の好標準 (八)有名なる竹島漁場 (九)金融及び通貨 (十)重要なる三大河

第七 大 邱(南韓の最大市府).....二九

(一)四通八達の勝地 (二)商取引の盛大 (三)米穀の多産地 (四)通貨の種類

第八 全 州(亦重要市邑).....三五

(一)全羅道の大市府 (二)各種の産業

第九 江 景(群山日本人の勢力圏内).....三七

(一)錦江第一の良浦口 (二)日本人の實業

第十 公 州(是亦望みある市邑).....三九

(一)忠清道の盛邑 (二)重要輸出入品

第十一 濟州島(朝鮮海峽の一富源).....三一

第二部 韓國中部地方.....三五

第一 仁 川(韓中第一の開化地).....三五

(一)半島最大の開港場 (二)日本居留地の繁盛 (三)貿易上の勁敵 (四)日清商人の優勢 (五)京畿道沖の漁業 (六)金融市場と白銅貨 (七)海陸の運輸機關 (八)仁川將來の好事業

第二 永登浦(京釜京仁兩線の分岐點).....三七

(一)將來の大邑 (二)實業状態

第三 京 城(韓國第一の消費地).....三八

(一)韓帝國の首府 (二)諸外國人雜居地 (三)首府の商業 (四)商業上の三大機關 (五)副店名稱及び商習慣 (六)各種の原始産業 (七)金融及び金融機關 (八)京義鐵道及び電氣鐵道

第四 開 城(韓帝國の舊都).....三九

(一)人參の中央市場 (二)重要集散品

第五 水原(將來多望の市邑)……………二六

(一)京釜線の一要驛 (二)實業狀態

第六 春川(江原道の首府)……………二七

(一)江原道屈指の商業地 (二)米及び柚産地

第七 蔚陵島(日本海の別天地)……………二八

(一)絶海孤島の一富源 (二)本島の經濟事情 (三)港灣及び交通 (四)

附近の諸島

第三部 韓國西北部地方……………二九

第一 海州(京義沿線の一要市)……………三〇

(一)黄海道第一の都會 (二)日韓人の干係

第二 鎮南浦(發達の急激なる開港場)……………三一

(一)大同江唯一の港口 (二)取引地及び商品 (三)各種の産業狀態

(四)金融井に通貨 (五)大同江の水利

第三 平壤(北韓の最大市府)……………三二

滿韓の富源目次終

目次

第五 義州及び新義州(京義線の終點)……………三九

(一)鴨綠江畔の要市 (二)商業區域 (三)鴨綠江左岸の砂金地

第六 元山(日本海の最大港)……………四〇

(一)韓國三大港の一 (二)居留地の商業 (三)重要な農業 (四)牛馬糞

豚の飼養 (五)豊富な礦物 (六)日本海沿岸の漁業 (七)通貨及び運輸

第七 城津(北韓の要港)……………四一

(一)日本海第二の開港場 (二)重要商品 (三)農業及び山林



山西村駿次  
山崎寬猛 共著

最近滿韓之富源全  
調查

合資  
會社  
內外興業社出版

序

世人口を開けば乃ち曰く、戦後經營は我帝國焦眉の問題なり、滿韓經營は我國民刻下の急務なりと。然り、滿韓を開發して、帝國の利權をこゝに扶殖し、仍つて以て戦後經營の實を擧ぐべきは、我帝國が大戦の美果を收め、國運を興隆せしむる所以にして、若し此問題にして、解決する能はざらんか、國勢將さに外に萎縮して、民力亦内に退嬰するに至らんとす。されば滿韓は、我國民の大飛躍を試むべき舞臺にして、此地理を解し、此人情に通じ、此習慣を知りて、始めて其活動を開始するを得ん。本書著作の意、亦恐らくこゝに存せしものならんか。

世間此種の書、敢へて妙きにあらず。されど多くは系統なく、秩序なく、或は其觀察一地方に止まり、一事業に走り、陳腐の材料と

管見の議論とを以て満たされざるもの、殆んど稀なり。本書が従  
來同種の刊行物中に於て、一頭地を抜き、最も通俗的に、系統あり  
秩序ある編纂の方法を採りしは、滿韓經營が國民的問題たる  
同じく、又國民一般に最も會得し易からしむるの意に出でたる  
ものならんか。

若し各専門の事業に就き、細心調査を要するものに至つては、  
此書に依りて先づ其輪廓を知り、而して後ち他の資料に俟つべ  
きなり。余はこゝに本書を、世上の讀者に紹介するの光榮を得た  
るを喜び、而して又此の如き刻下必要の良書が、余が同人の手に  
よりて、著はされたるを祝さずんばあらざるなり。

明治三十九年四月

鵬 雲 近 藤 賤 男

# 滿韓の富源目次

## 第一篇 新發展地の解剖

### 第一 滿韓の面積

(一)我三倍大の面積 (二)富源の培養者

### 第二 滿韓の人口

(一)日本人口の趨勢 (二)好箇の掘り

## 第二篇 滿洲

### 第一部 遼東半島地方

#### 第一 大連港(我滿洲發展の基地)

(一)我手に移りし租借權 (二)大連の市街組織 (三)大連在住の日本人  
(四)大連附近の牧畜と山林 (五)近海の日清人漁業

八

八

九

第二 旅順口(東洋の大軍港).....二六

- (一)帝國海軍の重鎮 (二)戦捷記念の市街 (三)商取引の状態
- (四)旅順附近の動植物 (五)旅順近海の漁業

第三 金州(我租借地内の要市).....二五

- (一)商業の區域 (二)農業及び其習慣 (三)山林と砂金地
- (四)清國貨幣の計算法

第四 貔子窩(遼東南海岸の要港).....三〇

- (一)開港候補地 (二)商業上の價值 (三)附近の産業地

第五 蓋平(亦産業の中心).....三三

- (一)牛島有数の市邑 (二)製鹽業の中心 (三)製糖法の一斑 (四)蠶絲取引の方法 (五)製鹽業の最盛地 (六)農業生産費 (七)砂金地と炭礦

第二部 遼河流域地方.....四〇

第一 營口(滿洲最大の貿易港).....四四

- (一)營口發達の原因 (二)貿易上の勢力圏 (三)滿洲最大の工業 (四)豆

- 類取引の方法 (五)金融機關の種類 (六)利子及び通貨 (七)貨物賣買の方法 (八)度量衡の種類 (九)遼河の運輸

第二 遼陽(産業上の大市場).....五九

- (一)滿漢韓の要衝 (二)販售重要商品 (三)盛大なる燒鍋 (四)煙臺の石炭坑 (五)金融及び通貨 (六)商情一斑 (七)水陸の運輸 (八)各種の度量衡

第三 海城(亦著名の一市邑).....六九

- (一)商工業の狀態 (二)耕地及び農産物

第四 奉天(清帝國の舊都).....七一

- (一)滿洲最大の市街 (二)商業上の價值 (三)製粉事業の中心 (四)奉天附近の農地 (五)重要物産の種類 (六)金融情況 (七)通貨及び取引習慣 (八)運輸交通 (九)度量衡の種類 (十)百億圓?の炭礦

第五 鐵嶺(遼河々畔の大市場).....六五

- (一)大豆の集散市場 (二)大豆の輸送費用 (三)問屋及び金融

第六 開原(古の開元城).....六九

第七 昌 圖(産業亦盛大)……………九二

(一)盛京北陸の要市 (二)滿蒙の貿易市場

第三部 鴨綠江流域地方……………九三

第一 安東縣(鴨綠江畔の營口)……………九三

(一)未來の一大都會 (二)日本人の勢力 (三)日本人の居住地 (四)商品の供給區域 (五)市場と商業協會 (六)金融事情 (七)鴨綠江の漁業 (八)鴨綠江附近の農業 (九)鴨綠江流域の礦業

第二 大東溝(我勢力圏の一盛邑)……………一〇七

(一)材木の最大市場 (二)長白山伐木事業 (三)鴨綠江の筏流し (四)材木賣捌方法

第三 鳳凰城(滿韓街道の要區)……………一二四

(一)南滿洲の要鎮 (二)附近の礦産物

第四部 松花江及び嫩江流域地方……………一二五

第一 吉 林(滿洲の代表的市府)……………一二六

(一)吉林省の首府 (二)日本品の消費狀態 (三)名産の麻と煙草 (四)穀物及び蠶の産況 (五)金融及び通貨 (六)取引習慣 (七)吉林營口間の交通 (八)度量衡

第二 長 春(滿蒙貿易の中心)……………一二六

(一)我滿洲鐵道の終點 (二)重要輸出入品 (三)糧粟の名産地 (四)金融及び商業 (五)所謂長吉鐵道

第三 哈爾濱(露國の理想的都府)……………一二〇

(一)亞細亞の莫須科 (二)哈爾濱の三大區劃 (三)集散の重要商品 (四)露人成功の第一工業 (五)所謂滿洲の穀屬 (六)家畜并に精肉の供給 (七)金融と露清銀行 (八)戦前の日本商民 (九)松花江と水運 (十)東清鐵道の中心

第四 伯都訥(沃野中の要市)……………一二三

(一)松花江嫩江の會流點 (二)製造業の盛大

第五 齊々哈爾(北滿洲の要市)……………一二四

第三篇 韓國

第一部 韓國南部地方

第一 釜山(京釜鐵道の起點).....一五〇

第二 海拉爾(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第一 愛瑯(黑龍江畔第一の盛邑).....一四九

第二 黑龍江流域地方

第一 寧古塔(東滿洲の要市).....一四九

第二 愛瑯(黑龍江畔第一の盛邑).....一四九

第三 海拉爾(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第四 齊齊哈爾(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第五 綏化(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第六 吉林(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第七 長春(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第八 哈爾濱(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第九 齊齊哈爾(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第十 綏化(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第十一 吉林(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第十二 長春(露國勢力圏内の一要市).....一四九

第十三 哈爾濱(露國勢力圏内の一要市).....一四九

土地貸買 (五)其他の産業 (六)金融事情 (七)度量衡の種類 (八)海上の運輸機關 (九)京釜鐵道

第二 馬山浦(朝鮮海峽の要地).....一七三

(一)將來の大貿易港 (二)商工業及び市場 (三)多望なる農業 (四)附近の礦山業 (五)欲知島の漁場 (六)海陸運輸の利便 (七)本邦人の好事業

第三 統營(漁業上の要市).....一八三

(一)慶南の一要市 (二)漁船の良根據地

第四 晉州(慶南の商業地).....一八四

(一)慶尙南道の首府 (二)毎年兩度の大火 (三)木綿の名産地

第五 木浦(半島屈指の良港).....一八六

(一)前途多望の地點 (二)商取引の盛火 (三)南平の木綿市場 (四)耕作地の價格 (五)小作料及び地租 (六)耕地買入上の要件 (七)棉花栽培の有望 (八)製鹽業亦た多望 (九)七山灘の漁場 (十)其他の各産業 (十一)金融及び通貨 (十二)度量衡の種類 (十三)海陸の交通運輸

第六 群 山(最も有望の貿易港)……………二〇四

(一)全忠兩道の咽喉 (二)商業及び市場 (三)苧布の主産地 (四)農産業の前途 (五)日本人經營の農事 (六)水田の收支計算 (七)農事經營の好標準 (八)有名なる竹島漁場 (九)金融及び通貨 (十)重要な三大河

第七 大 邱(南韓の最大市府)……………二一九

(一)四通八達の勝地 (二)商取引の盛大 (三)米穀の多産地 (四)通貨の種類

第八 全 州(亦重要市邑)……………二一五

(一)全羅道の大市府 (二)各種の産業

第九 江 景(群山日本人の勢力圏内)……………二二七

(一)鎭江第一の良浦口 (二)日本人の實業

第十 公 州(是亦望みある市邑)……………二三九

(一)忠清道の盛邑 (二)重要輸出入品

第十一 濟州島(朝鮮海峡の一富源)……………二三三

第二部 韓國中部地方……………二三五

第一 仁 川(韓中第一の開化地)……………二三五

(一)半島最大の開港場 (二)日本居留地の繁盛 (三)貿易上の助敵 (四)日清商人の優劣 (五)京畿道沖の漁業 (六)金融市場と白銅貨 (七)海陸の運輸機關 (八)仁川將來の好事業

第二 永登浦(京釜京仁兩線の分岐點)……………二四七

(一)將來の火邑 (二)實業狀態

第三 京 城(韓國第一の消費地)……………二四八

(一)韓帝國の首府 (二)諸外國人雜居地 (三)首府の商業 (四)商業上の三大機關 (五)商店名稱及び商習慣 (六)各種の原始産業 (七)金融及び金融機關 (八)京義鐵道及び電氣鐵道

第四 開 城(韓帝國の舊都)……………二六四

(一)人参の中央市場 (二)重要集散品

第五 水 原(將來多望の市邑)……………二六

(一)京釜線の一要驛 (二)實業狀態

第六 春 川(江原道の首府)……………二七

(一)江原道屈指の商業地 (二)米及び柚産地

第七 蔚陵島(日本海の別天地)……………二六

(一)絶海孤島の一富源 (二)本島の經濟事情 (三)港灣及び交通 (四)附近の諸島

第三部 韓國西北部地方……………二七

第一 海 州(京義沿線の一要市)……………二七

(一)黄海道第一の都會 (二)日韓人の干係

第二 鎮南浦(發達の急激なる開港場)……………二七

(一)大同江唯一の港口 (二)取引地及び商品 (三)各種の産業狀態 (四)金融井に通貨 (五)大同江の水利

第三 平 壤(北韓の最大市府)……………二七

滿韓の富源目次終

目次

第四 龍巖浦(鴨綠江下流の要市)……………二八

(一)日露戦争の賜物 (二)各市場との連絡 (三)産業狀態 (四)日本人の新市街

第五 義州及び新義州(京義線の終點)……………二九

(一)鴨綠江畔の要市 (二)商業區域 (三)鴨綠江左岸の砂金地

第六 元 山(日本海の最大港)……………二六

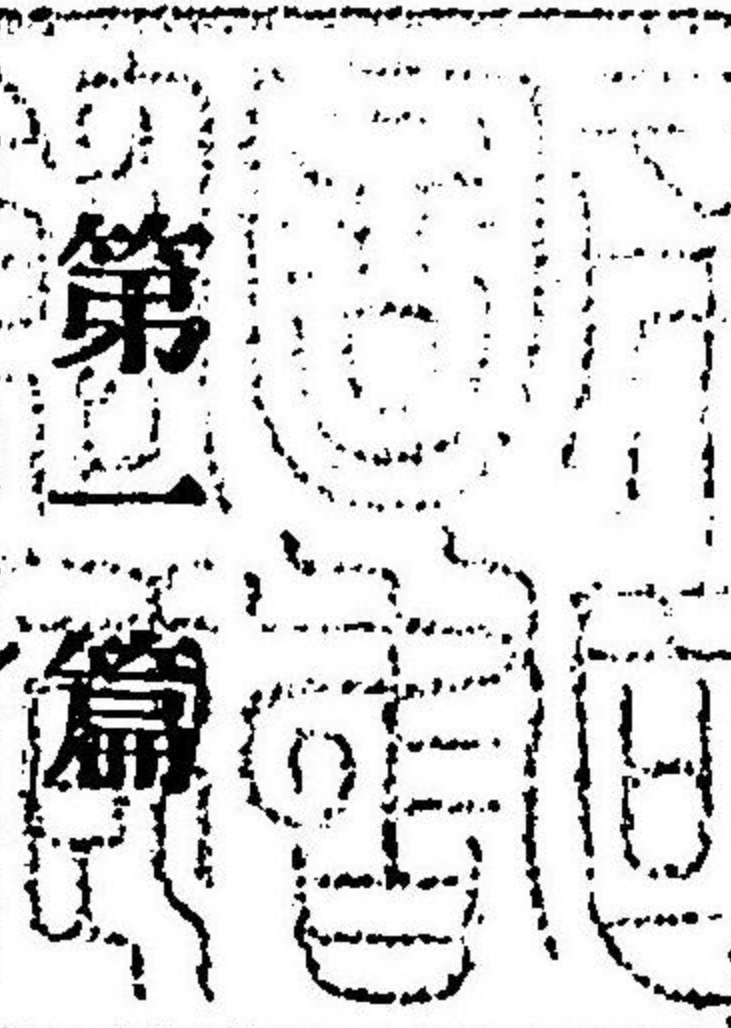
(一)韓國三大港の一 (二)居留地の商業 (三)重要なる農業 (四)牛馬飼豚の飼養 (五)豊富なる礦物 (六)日本海沿岸の漁業 (七)通貨及び運輸

第七 城 津(北韓の要港)……………二六

(一)日本海第二の開港場 (二)重要商品 (三)農業及び山林



滿韓の富源



新發展地の解剖

西村 駿次  
山崎 寛猛 共著

戦後經營の項目を列挙せんか其數敢て尠なからざるべしと雖も滿韓の經營より急にして且重大なるものは恐らくは他に是あらざるべし。滿韓は親愛なる多數の同胞を犠牲とし巨額の財貨を消盡して購ひ得たる我新勢力圏なり。此貴重なる新勢力圏を開拓扶植し膨脹の大日本帝國を實現せしむるは我等が後代子孫に負へる處の責任なると共に又勇敢なる吾人祖先の神靈に酬ゆる義務ならずんば非らず然れども思へ夫れ如何に國民の霸氣汪溢にして天を衝き地を捲くの慨ありと雖も自己が將に發展膨脹せんとする邦土の形勢を揆らざるに於ては焉んぞ計畫圖に中るを得んや、籌略方を誤らざるを得んや爰に於て乎先づ滿韓の産業狀

態を研究知悉し、而して後平和的經營の實行に着手するの、甚だ至當なるは敢て多言を要せざる所なるべし。

## 第一 滿韓の面積

(一)我三倍大の面積 我國民の將に發展せんとする滿韓の兩土は、英國の印度加奈太濠洲に於けるが如く、遠隔の地に在るものに非らず、佛國が有する殖民地の如く、各所に散在せるものにわらず、夫の對馬海峡は、構造粗雜なる往古の獨木舟若くは挾板船の如きものにて、猶且容易に渡航し得たるもの、而して足一たび對岸の釜山に上らんか、徒歩以て往くも敢て無人の境を踏むに及ばず、山河の險に逢ふに及ばず、韓半島を縦斷して直に滿洲に達するを得べし、況はんや陸には京釜義安率及び我滿洲鐵道あり、海には汽船のあり、名に於ては滿韓は或は外國ならんかなれども、實に於ては却て内地の或地方に赴くよりも、便利にして容易なるものあり、面積は滿洲三十六萬三千六百十方哩、また韓國は八萬二千方哩なるを以て、之を本邦の本州、九州、四國、北海道及び臺灣を合算したる十六萬二千六百四十二方哩

と對比するに於ては、滿洲は我より大なること約二倍半、韓國は我より小なる約半分、若し二者を合計すれば、將に日本より三倍大の面積と爲るなり、豈また廣大ならずや、而して滿洲は現今施政上の便宜よりして、內蒙古の地を其疆域に編入し、之を大別して三省とす、南方なるを盛京省と稱し、中央なるを吉林省と呼び、最北なるを黑龍江省と名づく、而して其境域は不規則なる三角形を爲し、朝鮮、露領西伯利亞、內蒙古、支那本部の間に介在す、次に韓國は大陸に接續せる狹長なる半島と、森爾たる多數の島嶼とより成り、東南は日本海に面し、其海角我對馬國と相對して朝鮮海峡を爲し、西は鴨綠江を隔て、遼東に通じ、北は吉林省及び露領烏蘇利地方に接し、豆滿江之が界を爲す、全國を京畿、忠清、慶尙、全羅、江原、黃海、平安、咸鏡の八道に分ち、又咸鏡道を北關と稱し、江原道を關東と云ひ、慶尙道を嶺南と呼び、全羅道を湖南と云ひ、平安道を關西と唱へ、忠清、全羅慶尙の三道を總稱して三南と名づく。

(二)富源の培養者 滿韓の兩大地域が抱擁する所の富源の培養者とも稱すべき、山河の状態に就て述べれば、滿洲全部の山脈は長白山、興安嶺の二大都より成り、前者は管に滿洲に於ての大山脈に止まらずして、實に東亞有數のものなり、其最高

峰は海拔一萬尺乃至一萬二千尺に及び、長白の名は四時常に白皚々として長へに消へざるより起る。長白山脈の支脈には完達山脈、黑林嶺山脈、千山山脈、吉林哈達山脈等を生む。後者も亦東亞の大山脈にして、支那人の所謂外興安嶺是なり。内興安嶺伊勒呼里、小興安嶺等の諸山脈は皆其支脈なり。次に韓國は到る處山岳重疊して我國若くは滿洲の如き廣野と云ふべきもの少なし。國中第一の高山は白頭山にして、山脈は北より南に向ひ、東岸に沿ふて走り、國中の山嶺は多く此高山より分派せらる。今各道中の名山を列記せば慶尙道の烏嶺、太白、小白、俗離、智異、伽藍の諸山、忠清道の金剛、鐵嶺、五臺、登雲、白岩の諸山、黃海道の高達、首陽、青陽の三岳、咸鏡道の長白、白頭、五峰の三山、平安道の青山、西陽、延平、天摩、狼林、劍山の諸山、嶽なりとす。河川の大きなは滿韓の境界たる鴨綠江及び豆滿江の外、滿洲に在りては黑龍江、松花江、遼河を始め、嫩江、渾河、牡丹江、香河、呼蘭河等あり。又韓國には漢江、清川江、錦江、榮山江、蟾江等あれども、疆土の面積の狭小なる殆んど滿洲の五分の一に足らざる半島なるを以て、巨流大江の無き又自然の數なり。而して是等の山、是等の河は、互に相頼り相輔けて國內富源の涵養に資するものなるを以て、甚だ尊重すべものたるや論を俟たず。

## 第二 滿韓の人口

(一) 日●本●人●口●の●趨●勢● 次に人口は國家の重要な基礎にして、社會的政治的經濟的諸般の現象は、之に依て察知せらるべきもの、故に今滿韓の人口を觀察するに先ち、我國人口の趨勢に就て些か論及するの要あるを見る。日本の人口は増殖の最も迅速なるを以て名あり。我最近の人口數は、臺灣を合せて實に四千九百八十萬の多きに達す。而して其増殖割合は、毎年大概五十萬づゝの増加あるものなるを以て、其六千萬と爲り、七千萬と爲り、將た一億となるも、遠き將來に非ざることを窺ひ得べし。然るに翻て帝國の領土を見るに、明治二十七八年戰役に依て獲得したる臺灣を外にしては、寸壤尺土と雖も曾て之を加へたることあらず。之を以て人口の稠密なる愈々稠密を加へ、既に本島四國九州を合せて我人口の密度は一方哩平均四百人に垂んとし、臺灣亦た二百二十人に及べり、獨り北海道は一方哩の住民三十人内外にして、今後尙は數百萬を收容するの餘地ありと雖も、之を我人口増加數に對照する時は、其餘地の如き殆んど言ふに足らず。茲に於て乎、我人口の捌口を如何なる

方面に求むべきかは、頗る緊要の問題たるに至れり。

(二)好箇の捌口 此時に於て韓國を以て我膨脹する人口の捌口と爲さんか、韓國は大陸續きの半島なれば、我國民にして韓國に充満すれば、自然に溢れて滿洲に出づべく、滿洲に充満すれば更に溢れて西伯利亞に推し出さむ、然らば韓國及び滿洲の二地は幾許の我國民を收容する力あるか、之に就ては先づ現在人口及び一方哩の平均人口を見るを可とす。

國 別	人 口	一方哩の平均
滿 洲	八百五十萬人	二十三人
韓 國	一千萬人	百二十二人
合 計	一千八百五十萬人	七十一人五

滿韓の人口に就ては固より正確の統計なし、明治廿二年に公けにせられたる我參謀本部の調査に依れば、滿洲の人口を千三百萬人となし、埃匈國參謀大尉ヨセフ、シヨエーン氏は約千二百萬人と調査するも、最近の政家年鑑には八百五十萬と記さる、若假りに千二百萬とするも、一方哩の人口は僅に三十三人に過ぎず、次に韓國の人口は是亦た信憑すべき統計なしと雖も、一千萬人とすれば大差なからん、斯の

如くして計算する時は、其一方哩の人口は滿洲は二十三、韓國は百二十二、人にし、之を我北海道を除ける平均四百人、北海道を加へたる平均二百九十九人に比し、甚だ少數なるや一見疑ひなき所にして、更に其背後には日本に三十倍大の廣袤を以てし、人口は六百萬人に足らざる西伯利亞のあるを知らば、我同胞は二倍して一億と爲り、四倍して二億と爲り、六倍して三億となるも、以て人口過剩を憂ふるの要は決して是あるべからず。

## 第一篇 滿洲

滿洲は東亞の寶藏と稱せらるゝ所なり。我よりも約二倍半大の面積を有して、農産物に於ても、鑛産物に於ても、水産物に於ても、林産物に於ても、無限絶大の富源を有し、而かも此天恵は未だ充分に利用せらるゝに至らずして、空しく山野に埋没せらるゝと云ふに至つては、有爲なる國民の奮つて之が開發に當らずして可ならんや。况はんや滿洲を縦横に貫流する巨江大河の濱には、幾多殷富なる都邑の散在して、將來の大商業地たり、大工業地たる要素を遺憾なく具備するに於てをや。吾人は今此滿洲の實業状態を(一)遼東半島(二)遼河流域(三)鴨綠江流域(四)松花江流域(五)黑龍江流域の五大地方に分割して陳ぶる處あらむ。

### 第一部 遼東半島地方

「遼東」の一語、一たび吾人の耳に響けば、血湧き肉躍り、無量無限の感動を發さしむ。遼東は我國が十年二回出帥の地にして、忠勇なる幾萬の同胞が埋骨の地なり。而

して遼東半島は滿洲中最も進歩せる地方にして、又滿洲の支關なり。此處に位置する都邑には東洋第一の大通商港たる大連、極東の重鎮たる旅順を始めとして、金州、蓋平の諸都邑ありて遼東の繁榮を資く。

#### 第一 大連港 (我滿洲發展の基地)

(一)我手に移りし租借權　大連は滿洲の支關なり、露國が東洋第一の商港たらしめんと企てたる青泥窪も、日露戰爭の結果また大連の舊名に恢復せられ、隣港旅順口と共に其租借權の我手に歸したるは、戰捷國の有する當然の權利と言ひながら、近頃甚だ快心の事たらずんばあらず。大連灣は金州地峽の南方に位置し、灣首三小澳あり、其南なるをヴィクトリア澳と言ひ、北なるを船澳と稱し、其東南なるを手澳と呼ぶ。手澳の陸岸に柳樹屯なる一市邑あり、往年清國が軍港たらしめんと計畫せし所にして、俗に大連灣と稱するは此地なり。而して露名の所謂青泥窪は、此柳樹屯と内海を隔て、相對峙し、ヴィクトリア澳の海濱に在り、夫の關東州と云へるは千八百九十八年(明治卅三年)三月十五日北京に於て、露清兩國全權委員の間に調印締結

し、更に同年四月十五日露都に於て追加せられたる特約の條項に據り、露國が清國より租借したるの地にして、大連即ち當時の青泥窪は實に關東州の首府たりしなり。而して戰捷の結果租借權の我有に歸したるは管に大連及び旅順の兩港のみならず、此關東州一圓も亦た我治政の下に移りたるなり。關東州の面積は露國の記錄に據れば二千五百平方露里とあるを以て、我二百二十平方餘里に當り、恰かも滋賀縣若くは鳥取縣の廣袤に同じ。其區域は遼東半島中の貔子窩と普蘭店とを連ねて東西に引ける線より以南の半島と、之に附屬せる諸島即ち皮希爾那爾列島、海洋島、裏長山列島、五馬島、八岔島、大長山島、旄島、女牆島、小島、倫島、南三島、北三島、和尚島、外長山列島、小鶴子島、大鶴子島、長子島、帽島、小平島、圓島、石島、鐵島、水其生島、密爾納島、理衣水島、エバレスト島、非石波瀝島、ドルリイ島、圓錐形島、南關島、蓮花島、花椒島、長興島、王家島、古婁島等の島嶼を併せたる一帯の地にして、之が地球機上の位置は、北緯百廿二度東經四十度の間に在り。州内の戸數は四萬二千餘、廿九萬八千餘の支那人之れに居る。軍政時代には金州を大連、金州、旅順の三政區に區別し、金州は四管區、旅順は二管區に細分し、各政區に軍政委員を置き、管區は管區長を設け、管區長以下會長

村長は公選の支那人を採用したるが、明治卅八年六月石塚長官以下其幕僚一同の大連に著し、此處に廳舎を置き民政を開始したる以來、旅順と金州を支廳と爲せり。

(二)大連の市街組織　大連市街の面積は我約五平方里にして、此土地は明治卅二年中、東清鐵道會社が清國一畝、我六畝七合を平均露貨七留の割合を以て、清國より買入れたるものなり。露國時代大連市政區の境域は、青泥窪市、老鐵灘郡、沙河口郡の一市二郡に分ちたるが、我民政區も矢張り之れを市街と村落の二つに分ちて管理す。其地勢は關東州の西南にありて、東北は大連灣に瀕し、南は黃海に面し、西は墨蘭河の谿谷に連なれる丘陵に接し、半島の中央は岩石峨々たる禿山蜿蜒として東西に走り、黃海の濱に至りて斷岸絶壁を以て海に入る。西北部は大平原を形成し、山脈の中央より港灣に向つて斜阪を爲し、此平地に大連市街あり、また市街附近の村落にして、市の管轄下にあるものは總數二十五箇村なり、其村名は大嶺、南崗、傅家庄、商家屯、老虎灘、黃家屯、轉嶺、小崗子、捧捶島、北崗、寺溝、鄭家屯、李家屯、下甸子、台山、南沙河口、北沙河口、馬蘭屯、三春柳、高家地、香爐礁、馬家溝、王家屯、劉家屯是れなり。大連に上陸して先づ人目を驚かすは、海陸の設備が甚だ大仕掛けなるにあり。大連は東清鐵道

會社が露國大藏大臣の命を受けて經營したる所にして、港には堅牢なる防波堤あり、棧橋あり、船渠あり、東棧橋は長さ約四千七百尺、また之より大なるは所謂大棧橋と稱するものにて、其幅最も廣き所は三百五十尺に達し、周圍の水深は十八呎乃至二十八呎ありて、優に富士艦の如き巨舶を入るゝを得、最も淺き所にては猶ほ六千噸の船舶を繋ぎ得べし。又船舶碇繋場は東棧橋と大棧橋の間にありて、日本現在の最大巨船十二隻を繋ぎ得べく、其附近には十一隻を繋ぐべく供へたる浮標あり、更に港内の小港即ち露人のラポーチャヤ、カーワニ(勞働港の義)の内には長三百八十呎の既成船渠と、之より約二倍大を有する未成船渠の二ありて、海上の設備には遺憾なし、更に翻つて陸上の設備を見れば、大棧橋には敷線の軌條を敷き起重機を据付け、貨物積卸に時間と勞力を省き、又附近に停車場及び大倉庫ありて、貨物集散に便す、街衢は何れも我占領軍將校の氏名を附せられたるが、先づ其起點を東方より數ふれば、(一)東方公園の東南端、(二)海岸通と監部通の區劃點、(三)本街道、(四)本街道、(五)三浦通、(六)大山通、伊地知通、落合通、乃木通の起點、(六)乃木町公園の起點、(七)福島町兒玉町の起點等にして、何れも區劃頗る整然たり、尙ほ其他の設備には中央發電所ありて

其規模もなか／＼宏大なれども、僅かに二百五十馬力の發電機三個を備へたるのみにて、我軍に占領せられ、又大連港には市内に飲料水なきを以て、市の西南に流る墨蘭河より上水道を引く、其設計は第一着に於て市民を四萬三千人と假定し、一晝夜一人につき我六升餘を要するものとして作られたり。

(三)大連在住の日本人 明治卅八年一月陸軍省告示にて本邦人の渡航を許し、其後六月下旬より民政の布かれたるより、大連在住の日本人は船便毎に増加し、其韓國より徒歩にて來りたる者を合するときは、九月上旬調にて約七千人、之れに二萬餘人の支那人と猶ほ多數の軍人軍屬を加ふれば、随分優勢なる市を形成し居るなり、又同年八月五日迄に我當局の許可を得て市内に營業を開始したる日本商人及び居留支那商人は千九百九十七人にして、其業體は、

雜貨商	三百人	土木建築業	六十人	旅館	四十四人
理髮店	三十八人	料理屋	三十人	飲食店	三十八人
酒商	三十三人	運送業	九人	菓子商	三十五人
材木商	十人	味噌醬油商	二十一人	民家業	四人
倉庫業	一人	魚類販賣	十六人	書籍商	三人
衣服商	四人	文房具商	二人	醫師	二人





値する業務たるを失はず、農家は大連港の對岸なる柳樹屯に多く存す、而して每家殆んど若干の豚羊雞を飼養せざるはなく、其使途は食用に供するなり、稍や富める者は騾驢牛馬等を飼養するが、之は總て耕地挽車を目的とするものにして、牛は從來より食用と爲さず、飼養食料としては豚には粟糠高粱糠を與へ、別に玉蜀黍及び高粱を加ふ、羊は牧草の外黑豆を用ひ、牛馬には草食の外、牛には黑豆、馬騾驢には高粱玉蜀黍を與ふ、牛は毎月一斗五升、馬は同四斗五升、豚羊には定量なきが如し、豚は一ヶ年兩度分娩し一回能く十頭以上を産み、生後六七箇月に至れば交尾し得、羊は一年一回産み、生後一ヶ年にて交尾し、牛馬騾驢は隔年一回産み、生後二年目には地を耕し車輛を挽く事を得るに至る、次に山林業は我邦の如く雜草の繁茂甚しからず、林地の刈拂は勿論、刈の手數も要せざるのみならず、矮少なる苗木を植付くるに便宜にして、赤松苗を養成するもの多し、長さ五六寸の二年苗にして其價は百本十錢内外の相場を有す、クヌギ等は凡て山地に直接播種するものなるが、寒氣及び夏季乾燥の候に於て枯色するを防ぐ爲め、一穴に五六粒を播種す、其發生後は頗る不體裁なるも遂に抱合して一株となり、堅強なる樹木として生長す、此地方に於

て山地多きは、大連旅順の附近、金州の大和尚より三十里堡并に東方の小虎山を経て普蘭店の東に亘る線、鹽太澳の西北尾角地方の長山列島にして、夫より東方に進み貔子窩に近づくに従ひ減少す、關東州即ち我租借地域内のみにて、林地面積約五百萬町歩あり、地代は頗る低廉にして、甸田即ち沖積土の上畑にても、一反歩五拾圓以下、最下等の山田即ち山畑に至りては、僅かに五圓内外に過ぎず、故に牛羊等を放牧する山地の如きは、推して知るべきなり。

(五) 近海の日清人漁業 大連近海の日本人漁船は、卅八年春頃までは彼れ是れ五百隻ばかりの數に上りしが、其後は競争又は販賣の關係等にて漁船の數次第に減じ、今日と成りては殆ど其半ばと成りたれども、之とて海上漁獲の模様は、於て別段不利益なる變化を來したるには非ず、捕獲魚類の中、數最量も多くして需要亦盛なる者より順次に記せば、鯛、比目魚、鱈、ホラ、エイ、鯖、ニベ、鱈、鱈、サヨリ、太刀魚、鮪、鱈、海鼠、鮑等なり、又飼料として此近海に存するものは、ひょうたん蟲形により名くしやこ、だこ、舟蟲、小しやこなり、漁場として今日までは、重に長山列島方面より遠くは海洋島邊にも向ひ居れり、此間には良港もあり、群島も點々し、暴風の起るに方つて避難

するにも容易なれども、之れよりは旅順方面の漁業に移ることゝて、同方面は避難所少なく且つ天氣倏忽の中に變化するため、漁業者の困難一方ならず、故に漁業は先づ十一月を限りとすべしと云ふ。近海群島の間に夥く生息する海鼠と鮑とは、今後水産家の注意を要する所なり。次に支那人の漁獲の種類は鰆、太刀魚を主とし、鯛、グチ、比良目魚、鱈等にして、漁具は釣漁を主とし、刺網、曳網を使用す。生魚は概ね漁業地附近の需用に充て、他は鹽物とし、金州方面に於ては芝罘に、長山列島方面に於ては安東縣地方に輸出す。

## 第二 旅順口（東洋の大軍港）

(一)帝國海軍の重鎮 旅順口は極東無雙の險要の地なり、關東半島の最南端に位し、芝罘を距ること七十四海里、威海衛よりは八十九海里の距離あり、老鐵山脈は蜿蜒として假頭山と爲り、老虎尾に到りて港の西方を扼し、黃金山は其東港に屹立し、兩山の間僅かに一水道を以て港の内外を連通す。港は四面重疊たる山峯を以て包まるとが故に、如何なる大風の時と雖も、港内頗る靜穩なり、而して港内を東西二

區に大別す、東港は黃金山の背面に位し、軍港埠頭たる處にして、艦船十餘隻を繋ぐを得べく、其繫船地は長さ一千四百七十六尺、幅九百八十四尺、深さは滿潮の時三十六呎六吋、干潮には二十五呎なりと記さる。最も此計數は露國租借當時のものなれば、現今は多少の變更あるものと知るべし。船渠は東港の一角に在り、次ぎに西港は即ち老虎尾の裡面にして、東港に比すれば海底稍や淺きも、尙ほ優に數艘の大船巨船を碇泊せしめ得べし。元來旅順口は軍港としては渤海の咽喉を扼し、黃海の頭部を占め、極東洋上無二の好位置を有するものなれども、其缺點は港口及び港内狹隘なるが爲め、一時に多數の艦船を出入若しくは碇繋し難きに在り、故に露國は西港に灣入せる淺淺の水を、干潮時十八呎の深さに浚渫するの計畫を立て、以て此缺點を補はんと圖れり。本港は人も知る如く、霧きには清國北洋艦隊の主要なる一軍港なりしが、日清戰役の際、日本の爲めに攻陥され、堡壘兵營當時悉く破壊せられぬ。尋で明治三十一年露國は清國政府を囑喝して旅順大連の租借條約を締結し、爾來旅順は露國極東經營の最重鎮たりしが、日露戰爭の結果は更に其持主を變じて、大連と共に租借權は我日本に移り、帝國海軍の旅順口鎮守府の所在地と爲り、内地に在

る横須賀、吳、舞鶴、佐世保と相俟つて、我海上權を擁護する重要軍港と變せり。

(三)戦捷紀念の市街 旅順口の市街地は西港に在り、東港なる陸海軍用地に接近して、區域餘り廣大ならざるが故に、千九百一年即ち明治三十四年、露國は新市街の經營に着手し、地域の競賣を行ひしに競争の結果、地區の地價甚しく騰貴し、一方方サーション即ち我七尺四方餘の地價五十留餘に上れり。又新市街設計の當時歐人居住地と支那人居住地とを區別し、支那人は不便なる一隅に排斥されたり。斯くて新市街の設計は爾來三年に亘りて銳意決行したるを以て、明治三十六年には既に壯麗宏大の市區を形成し、大連の新市街と相對して、露國式大市街の雙觀と稱せられたり。清國時代に於ける市街は、城子東街、城市西街、東新街、中新街、西新街の五大部に分たれ、露領となるや露語に改稱せられ、最後に日本領となるや我陸海軍の名譽を永く紀念とする爲め舊市街には磐手町、淺間町、高砂町、笠置町、秋津洲町、松島町、初瀬町、朝日町、乃木町、大島町また新市街には横須賀町、明治町、春日町、日進町、吉野町、大迫町等の軍艦町將軍町續々として出來し、中央の大公園は後樂園と命名せられたり。旅順市街の戸口數は昨年四月第一旬の調査に據れば、住民は露印獨米韓人六十

一名支那人一萬七百二人にして、宅地の番號は新市街百六十六戸、舊市街六百五十九戸、新支那人街千四百四十三なれども、右は市街宅地の番地數なるを以て家屋の數は之よりも多數なり、聞く處に依れば、舊市街の家屋は、旅順市の公有にして、新市街の家屋は個人の所有なりと、更にまた旅順口附近の支那村落は、總て四百餘軒ありて、人口概算四萬を超ゆ。市政は露國時代には東亞大總督府を此處に置き、彼の大將アレキセーフを其總督と爲し、軍政民政總て其權内に握らしめたるが、目下は我大連民政署の旅順支署ありて、市及び附近村落の統治を爲す。

(三)商取引の狀態 此地戦争前即ち露國人全盛の時代に於ても、盛に商業を營みたる者は、租借主人たる露國人にあらずして、第一支那人、第二日本人、第三獨逸人と云ふ順序にて、實業上に於ける露國人は、何等の成功を著はさざりき。我國産物の旅順に輸入せられし額は、一箇年平均三百萬圓に達したり。日本商店販賣の貨物にして、最も良く露國人に珍重せられ需要の廣大なりしは、絹織物、朝日麥酒、炭酸水、三河木綿等にして、更紗形の布袋地も亦た歓迎を受けたり。支那人の販賣したる品は多く雜貨にして、日本或は上海より輸入し、肉類、蔬菜類、果物類は重もに對岸芝罘よ

り輸入せり、旅順にある支那商人の多くは山東、上海、廣東地方のものにて、商業上には非常の勢力を有せり、開戦前我邦人の此地に在りしもの約千人以上ありしも、主たる商店は二十餘軒、また一箇年小賣高拾萬圓乃至貳拾萬圓に達したるもの、僅かに四軒ありしに過ぎざるに反し、支那人商店の賣上高一年拾萬圓以上に達するもの十數軒ありたるに徴するも、彼等の悔り難きを察するに足るべし、政治上に於ける支那人は露國に壓服せられ居たるも、旅順の實業界は支那人に依て左右せられ居たるなり、旅順に於ける貨物賣買上の仕拂期限は、三箇月または六箇月を期限とし、大節季は支那一般の如く、歳末と盆の二回なり、此兩期には必らず決算支拂を爲さざるべからず、又支那商人の貨物仕入法は、十名若くは二三十名連盟して共同仕入れを爲すを以て、商品の仕入値段は極めて廉價なるを得べく、加之販賣に方ても暴利を貪らず、換言すれば利益を薄くして賣捌き、幾回も資本を運轉し、積數の上に於て利益を謀るが常にして、取引上は支那人の特長たる信用を重んじ、決して約束を破るが如きことなき慣習、亦た此地にも行はるゝが故に、自然彼等は勢力を得るに至りしなり、猶ほ此地支那商人間に於ける一種の慣習にして、特に擧ぐべき一美

點あり、并は支那商店に於ては、同一の商品は概して價格一定し、甲乙丙丁の商店に於て、賣價を二三にせざることは是れなり、若し甲乙の店舗に依りて市價の相違を見ることあれば、是等は其店主が、一は山東の者、他は上海出身者なるが如く、其出所の異なるが爲めにして、同一地方出身商人間には、同一商品の價格を異にするが如きは、實に稀れにして、寧ろ皆無と云ふを適評となすが如し。

(四) 旅順附近の動植物 旅順口は政治上の目的の爲めに繁昌したる地にして、工業農業等の爲め發達したる處にあらず、故に此地は日用貨物の消費地としては將來有望の地たるべきも、生産地にはあらず、旅順口近傍の山岳及び丘陵は殆んど巖石より成り、岩は單純にして餘り錯雜せず、片磨岩も見ゆれども、各種各色の砂岩、各色の石灰岩、粘板岩、硅岩、石英岩等に過ぎずして、要するに古生層の水成岩多し、石英岩は管に旅順附近のみならず、半島到る處に多く、支那家屋の石垣などは、主もに此石を用ひ居れり、斯の如き岩山のみなれば、さなきだに樹木の發生宜しからざるが上に、日露兩軍にて燃料の爲め多く伐採したれば、樹木を見ることとは殊に少なし、唯だ支那村落の四周には、樺、菩提樹を見、墓地には黒松及び赤松あり、地裂には

楊、赤楊、山毛櫸を見る位にして、果樹として棗、梨、杏の外之れぞと云ふものはなし草は割合に能く山岳に繁茂し、秋季に至れば龍膽草、桔梗、刈萱、風鈴草、我毛香、女郎花、撫子、野菊、金雀草、千屈菜などのもの、紅、白、紫、黄、相ひ狼藉として錦を布けるが如し、是等の植物景より觀察するときは、風土は我信濃地方と見れば大差なからん、又萩の咲き亂れ居ることや、天長節後まで十數種の野花を發見するに徴せば、此地方の氣候は、さまで寒冷ならざることを察知し得らるべし、動物は十一月中頃までは、燕、鶯、類白、四十雀など春の如く長閑に嘯り舞ふを見るべし、此邊の土人は遊獵せざるを以て、禽鳥類は殊に多く、報喜鳥、白頭翁、鷓鴣、百舌、鶉、鶉、鶉、鶉、小鶉、白鶯、五位鶯の類下り、又戸を敲かねど水鶏も少なからず、西方なる双島灣近傍の地裂には千鳥多く、南方なる龍王塘の邊には鶯多し、鷹は到る處に舞ひ、鳩は鳩灣地方のみならず、所在に群を爲して飛ぶ。

五 旅順近海の漁業

水産物は太刀魚、鯉の一種なる鮠魚、蝶の類なる嘉吉魚、鯉の類なる鯊魚、鯛等最も多く産す、太刀魚は刀魚と云ひ多く鹽漬と爲し、鯊魚、鯛魚は重みに乾製して用ゆ、支那漁夫が從來使用せる漁具は粗雑且つ幼稚にして、何れも

舊式に屬し、進歩せるもの一も之れなし、海流は三寒四温にして、此近海に於て又鱒魚の漁獲さるゝは、對島海流の餘波、此處に及べるものなるべく、次ぎにまた明太魚及び一種の鱈の多く漁獲せらるゝは、朝鮮海流の此近海にまで到れるを知る、故に此地方と朝鮮の中部とは、氣候相類似すと雖も、而かも、京城仁川よりは暖かなり。

第三 金州城 (我租借地内の要市)

(一) 商業の區域 金州城は對岸の山東岬角と共に、直隸灣の門扉を形成せる金州半島の細頸部に位置する一都會なり、清國時代には此處に副都統を置き、金州の外、復州、熊岳、蓋平、岫巖の各地を管治せしめ、露國の旅順租借以來は撫民府を置き、我國は民政支署を設けて之れを統治す、人口三萬と稱す、商業は清國時代には此地方一帯の中心點なりしを以て、相應に活潑なりしも、現今は之れを大連に奪はれ、單に城内及び附近の村落を相手に、日用品の供給を爲すに止まる、商舖の最大なるは雜貨商なり、人民の生活狀態の如きも、衣服は粗造の綿服にて満足し、絹布の如きは之を用ふるもの稀なり、商業上の習慣としては、貨物賣買に就ての勘定は從來毎月一

二六

回とし、又五月節句、八月節句、年末には必らず清算せしが現下は戦亂の際として即日清算す。又商業手形とも稱すべきものは未だ發達せず、唯三期清算の時に當り、決済を爲し能はざる場合には、一枚の證書を差入るゝことあり、之を名けて期票と稱す。蓋し次ぎの期節に於て仕拂ふことを約す延期證書なるを以て此名あり、而して普通通貸借の利息は年一割より一割五分位にて、多くは土地家屋を抵當物件とす、期限は別に一定の習慣なく、利息の仕拂ひを怠らざれば、協議の上四五年に亘るも故障なし。

(三) 農業及び其習慣

製造工藝上の産物に關しては、金州には特筆すべき價值なきも、農耕は相應に進歩す、主要なる農産物は玉蜀黍、高粱、粟にして之に次ぐものは豆類、麥類なり、蔬菜類は白菜、青菜、豌豆、茄子、菠薐草、葱蒜、韭、馬鈴薯、甘藷、胡瓜、甜瓜、西瓜等にして、附近地方の需要に供す、耕作地域は總て廣大にして、長さ四五町に亘るものあること珍らしからず、耕耘は總て獸力を用ひ、多くは牛及騾を以てす、農夫一人にして能く十日地(我約三町六反)を耕作し得、一年一作なり、肥料は採種の際に糞、灰、人糞、牛馬糞少許を用ひ、發芽後又少量の豆粕油粕を施す、あれども概して肥

料不足にして地質を改良するに足らず、只奇とすべきは農民は人尿の以て肥料たることを知らざるの一事なり、鋤草は下種後一回若くは二回に至るものは甚だ罕なり、金州管内穀物一日地の收穫高を査するに概ね左の如し。

	上等地	中等地	下等地	最下等地
玉蜀黍	二石五斗	一石五斗	五斗	二斗
高粱	二石二斗	一石二斗	五斗	二斗
粟	二石六斗	一石五斗	六斗	三斗
大豆	一石五斗	一石	三斗	一斗
黑豆	一石	七斗	三斗	一斗
綠豆	八斗	三斗	一斗	五升
麥	一石八斗	九斗	四斗	二斗

(備考) 本表一石は我一石五斗位とす

一日地に於て收穫する粟は上地約五百五十斤、中地三百斤、下地五十斤位とす、是れ唯一の馬秣なり、又人口に對する地積の割合は一人に付三畝九歩にして一日地玉蜀黍の收穫平均一石五斗と假定せば一人に對する糧食は一ヶ年九斗七升五合一ヶ月八升二合一日二合七勺(約我四合)に當る

農夫の給料は一人一年六七十圓なれども、若し穀物を以て給與する時は、玉蜀黍五六石を普通とするを以て、十日地に對し玉蜀黍の收穫二十石と假定し、耕夫一人牛馬各一頭を使役するものとせば、其收支計算は左の如し。

一五畝乘二十石

十日地(我約三町六段の收穫)

此内 六石  
七石二斗(馬一頭每月四斗五升)  
牛一頭每月一斗五升  
糞引 六石八斗  
新夫給料額  
馬牛飼養料  
純 益

故に自作を爲す場合には十日地一箇年の純收額は十二石八斗となる。地價は一日地に付上等地我約二百圓、中等地約五十圓、下等地約五六十圓の見當にて賣買す。

(三)山林と砂金地

金州附近は總て禿山赭丘にして、殆んど山林と稱すべきものなし。蓋し亂伐の結果なり、實に此地の第一緊急事業は植林にして、樹木繁茂すれば水源も涸れずして、地質の改良も爲し得べく、木材及び燃料の不足をも補充し得べし。村落附近の墓地若くは卑濕地等に於て見る所の樹木は、殆んど楊柳のみにして、時に交ゆるに柞樹、椿樹を以てす。松樹の矮少なるもの間々之を見ることあるも、其生育甚だ良好ならず、唯楊柳の二樹は卑濕の地に於て其生長甚だ速かなる故に、土人も亦た之を植ゆるの傾向ありて、其大なるものに至りては、周圍一丈以上に及ぶものあり、又杏樹梨樹も其生育甚だ佳良なるも、樹林保護の法なきを以て、僅に住家の附近に生育するのみ、而して木材の缺乏は非常なるものにして、家屋の建築は多く石材と磚瓦と土とを以てす。其材木を要するものは安東縣より輸入する松材

を用ふ。小家屋建築の用材は往々附近地方より産出する楊柳椿樹等を以てす。器具用材料としては福建より輸入する樟木を以て最上とすれ共、其價格極めて不廉なるを以て、普通品は大概安東縣輸入の松材、又は此地方に産する樟木を以てするが故に、其粗造見るに堪へず。燃料としては高粱稈、柞枝、楊枝、山草及び僅少の松葉等を産するに過ぎず。従て此地方に向つて、朝鮮より年々尠なからざる薪材の輸入せらるゝを見るなり。次に金州附近には砂金地あり、其重なる處は梅家屯、初家屯、南趙家屯等なり。梅家屯は金州より貔子窩に通ずる街道上の一驛、亮甲店の西方約二里、溪流に臨める一村なり。年々農民の開時に於て陶金する者少ならず、又亮甲店の西南約二里に至れば、初家屯あり、今より十二三年前の發見に係る。南趙家屯は亮甲店の南方約四里に在り、光緒廿二三年頃多くの陶金者來りしも、今は甚しく衰へたり。

(四)清國貨幣の計算法

此地方に通用するものは、有孔銅錢、大小銀貨及び馬蹄銀等なり。有孔銅錢は即ち我國の一文錢と同様に、小銀貨には五錢十錢二十錢の三種あり。一圓銀貨五十錢銀貨あれども流通多からず。銀貨は湖南湖北安徽江南廣東直隸盛京諸省及び我國香港等の鑄造に係るものは皆總て通用せり。清國各關

港場に通用するところの墨銀は曾て輸入せしむ、其相場割安のために清人の回收せしものか、現今に至りては其數至て少きが如し、金州一厘銅錢の計算法は一種の稱呼ありて、即ち幾吊幾百文と稱す、一吊文とは即ち一千文にして、一百文は其數に於て十六文四分に當る、故に一吊文は其實數よりする時は一厘錢百六十四文を意味し、例之ば一吊五百文と云へば、實數二百四十六文なるが如し、清人間の取引は總て此計算法を用ゆるを以て、深く此等の點に注意して其誤りなきを期せざるべからず、又一兩は即ち銀の分量一兩にして、一兩は十錢(十夕)一錢十分(一分)一分は十厘なり、又馬蹄銀は其量目凡五十兩内外にして、其銀の成分如何により申と稱して價を増し、毛と稱して價を減するものなり。

#### 第四 貔子窩 (遼東南海岸の要港)

(一)開港候補地 貔子窩は遼東南海岸に於て鴨綠江口の安東縣、大東溝及び南海岸の大孤山、莊河、大連及び旅順口と共に海口にして商業地たり、特に關東州中に於て大連を除けば唯一の海口にして、米國の如きは夙に茲に注目し、先年安東縣、大

東溝、奉天の開市せらるれば、大孤山と共に其開港候補地と指定せられし位の地なり、現に金州城あたりは茲に物資の供給を仰ぐ程の處にして、二十七八年役には民政支部を設けし處なり、大連にありては、世人既に噴々之を稱し、潮の湧くが如く渡來しつゝある處あるが、貔子窩に至りては之を知るもの甚だ尠なし、市街は金州の東大凡我十九里の海岸にあり、世人の熟知せる海洋島、長山列島等は其貔子窩の管轄に屬せり、市街の人口は三千三百五十人にして云ふに足らざるが如しと雖も、其商店は大にして其數凡百五十戸あり、輸出入の物品は輸入は外國製雜貨、支那製雜貨、金巾、毛織類、絹織物類、石油、海産物、米、利堅粉等にして、輸出は主に土地産出の穀類及び柞蠶葉、卷煙草、鹽、鹽魚等に過ぎず、而して目下一ヶ年の輸出入總額は約我二百萬圓位にして、將來長足の進歩をなすの趨勢あり、此數年來韓國に交易の端を開き、漸次盛大に越くの傾向あり、其輸入は主に芝罘を經山し輸出も亦た芝罘に依るを多しとす。

#### (二)商業上の價值

當港出入の船舶は主に芝罘より來るものと、大連灣遼東南沿岸一帯および韓國北西岸より來るものとす、其船は支那帆船にして大凡五十石



以上五六百石に至る、其一ヶ月の出入平均は約四百五十隻なり。此地冬期二ヶ月以上は結氷し、港灣は遠淺なれども、滿潮時は其市街まで入港し得て、未だ至大の不便を感せず。向後益々殷盛に赴くに至ると、又殷盛に赴かしむる手段として、小規模の築港の如きは蓋し必要の事ならん。當地の商業關係は芝罘との關係甚だ多きため、當地の商人の八割は山東省のものを以て占め居れり。商人は夏の仕入として四五月頃芝罘に貨物仕入に赴き、冬の仕入としては結氷前に芝罘に赴きて歸來し、概して一年二度の仕入をなす。其仕入に赴くには、何時も必ず當地方産出物なる穀物を積行を例とす。商業取引は重に掛賣りとし、秋に至り穀物收納に際し、其穀類を時價に換算して穀類を受取るを例とす。而して右は皆卸賣にして、其小賣は皆現金なるも至て寥々たるものなり。商業の販路區域は、北は熊岳以南の中央山地は其範圍に屬し、東は大孤山と其範圍を分界して、莊河に至り、西は金州と其界を分つと雖も、金州は往々貔子窩に供給を受くることあるなり。

三附近の産金地 貔子窩附近に於て、産金地として知られ居るもの都合三箇所あり。即ち金廠屯、袁家屯、杜家屯是なり。金廠屯は貔子窩より莊河に通ずる街道上、

畢利河の右岸に近き一驛にして、昔時多額の産金ありたるもの、如し。又袁家屯は普蘭店より、貔子窩に通ずる街道の一村にして、其産金地は同村の南方にあり、今を去ること數十年前の發見に係り、當時千餘名の陶金者ありて、頗る盛況を極めたるもの、如くなるも、其後衰運に傾き、僅かに附近村民が農業の餘暇を以て陶金に従事するに止まる。杜家屯は貔子窩より金州に通ずる街道上の一驛なり。此地は十數年前始めて發見せられ、一時五百餘名の採金者ありて、盛況を呈せしが、矢張他の産金地と同じく、漸次收益を減じ、近年は附近の農民が耕作の餘暇を以て陶金に従ふに過ぎざるも、是等の諸地方にして、更に最新の方法を以て、採金するに於ては、尙ほ未だ絶望のものとは爲すを得ざるべし。

## 第五 蓋 平 (亦産業の二中心)

(一)半島有數の市邑 蓋平は旅順大連より海城及び遼陽方面に赴く中間に位置し、遼東半島中有數の都會なり。新に帝國の領有と爲りたる滿洲鐵道の停車場ありて、南は旅順大連、北は奉天長春、西は營口より山海關に通ずる便あり、地形は東南に

茫々たる平野を望み、北は凡そ四町にして丘岡に掩はれ、南二里餘にして、蓋州河口に到る。河口に一碼頭ありて、蓋平市の百貨を吞吐す。縣城は古の所謂蓋州城にして、長方形を爲し、南北の長さ七町餘、東西五町餘、城壁は堅牢にして其高さ三十尺、城内には數條の街衢縱横に通じ、住民の五分の四は城内に居を構へ、其殘部は城外南東部にありて、別に一市街を形成す。人口三萬と註せられ、商人は山東山西兩省人多し。蓋平附近は遼東半島には珍らしき濕地にして、沼澤甚だ多く、耕作の田圃は稀れなり、但し能く排水の策を講せば、耕地と爲し得る見込みある土地尠なからず。

(二)養蠶業の中心 盛京省の物産中に於て蠶絲は最も有力なるものなり。蠶種は即ち野蠶にして、山に放ち、土俗に下落樹と稱する柞樹の葉を喰はしむ。盛京省中に於て野蠶を飼養する地方は、遼河以東にあつては、北は遼陽奉天に及び、東は寬甸安東等の朝鮮國境に達するも、就中其最も盛大に飼養し、又取引の中央市場たるべきは蓋平なり。養蠶は春秋兩季に行ひ、春蠶は前年の秋繭より取り、秋蠶は其の年の春繭より收得す。春季は殺雨に蛾蟲出で卵子を放ち、立夏に至り全く孵化して蠶兒と爲り、四眠を経て夏至より小暑にかけて繭を作る。又秋蠶は大暑に蛾出で立秋に

孵化し、五眠を経て秋分より寒露にかけて繭と爲る。故に秋蠶の飼養期は春蠶に比し、約二週間程長期なりとす。其結果として成繭に至りても、秋繭は形大にして、絲量多きに反し、春蠶は形小にして、絲量尠なし。故に春蠶は蠶種として生繭の儘にて販賣するにあらずんば、收支相償はず、從て飼養高も遙に少なく、恰かも三と七の割合を爲す。今生繭及び空繭各千顆の重量及び絲量につき、春秋兩繭を比較すれば、大略左の如き見當とすれば、大差なし。

種 別	春 繭	秋 繭
生繭千顆の重量	六斤乃至七斤	七斤乃至八斤
空繭千顆の重量	一斤内外	二斤内外
繭千顆より得る絲量	五兩乃至六兩	八兩乃至十二兩

又製絲後の優劣を觀るに、春絲は大抵春季の空繭より製するを以て、彈力弱く節數多く、其品質到底秋絲に及ばざれども、色澤白く、纖維細く且つ柔軟なるは、春絲の秋絲よりも勝る所なりとす。而して野蠶を飼養する樹は總て之を柞樹と云ひ、土俗之を不落樹若くは薄羅樹とも呼ぶ。而して柞樹には更に大葉柞、小葉柞、尖葉柞、胡科樹等の區別ありて、大葉小葉の兩柞を總稱して青楨子と名く。凡そ柞樹を植るは山地にして、土質は黒土黃土若くは砂石を存する土を良とし、又南に面する地方を選

三六  
み五尺許りつゝ、相隔て、植付くるを最も善とす。柞樹の種子は椋子と稱し、之を蒔て後最初五六年間は少量の蠶を養ふべく、其充分繁茂して多量の蠶を養ふに至るは、大抵十五年の星霜を要す。而して約三年毎に伐採し、常に高さ五六尺以上を越えざらしむるは、蠶兒取扱上の便利と枝葉の繁茂を謀るが爲めなりと云ふ。

(三)製絲法の一斑  
製絲場は之を匡絲房と稱し、重なる養蠶地方には多少の匡絲房なきは無しと雖も、到底蓋平の數多くして規模の廣大なるに匹敵すべくも非らず。製絲法は先づ麵三即ち土産の曹達を水に溶解し、之を大鍋の中に入れ火を焚いて熱せしめ、然る後に繭數千顆を之に投じて屢々攪き交せ以て殺蛹を行ひ、次に其繭を蒸籠の中に移して鍋上に置き、曹達の入る湯を離るゝ二寸許りならしめ鍋下には尙ほ火を焚き、日没頃より夜半に至るまで絶えず蒸すなり。但し始めには小火を用ひ、中頃より火力を大にし、鍋中の麵水をして漸々沸騰して蒸籠中に上り、繭を一面に濕さしめ、後又小火に復さしむ。而して鍋中の水は次第に減じて鍋底に至るも決して之をして全く乾かしめず。若し水量少なきに失するときは、乾燥甚しくなり製絲に害を及ぼすに至る。此水の適度を量るは、大に技倆の存する所なり。

斯の如くして繭既に蒸し終れば之を出して外皮の屑絲を剝ぎ去る。之を大挽手と云ふ。次ぎて絲頭を搜り出して卓上に置き、絲の細粗良否を區分し、以て框に掛く。框は通例大小二種あり、大なるものは直径二尺四寸、小なるものは一尺六寸位とす。繭より絲を繰り終りたる後は、残りたる屑絲を二挽と稱し、又其蛹に密着せる部分を別に蛹膏と名け、最劣等の絲として使用せらる。

(四)蠶絲取引の方法  
蓋平は蠶絲の中央市場として一年の取引高實に八千俵乃至一萬俵を越ゆ。其賣買期節は春絲は陰曆六月の下半月に至りて上市し、同年三月を以て了り、秋絲は陰曆九月末を以て上市し、翌年三四月を以て終る。此秋絲は秋の生繭より製したるものなるが、又秋の空繭より製したる秋控絲は、陰曆四月を以て上市し六月に了る。他地方より來たる商人は、常に開河を以て來り封河前に去るを以て、蠶絲賣買の盛なる季節は無論開河中なり。蓋平には買附問屋及び賣込問屋各三十餘家あり、問屋の口錢は百兩につき銀二兩にして、此中には絲の選分け方、目方の掛合せ、荷造の諸費用、來客が問屋に宿泊中の食料等をも包含す。但し荷造に要する蒲蓆及び油紙は此外なるを以て、買客は絲價百兩につき都合二兩四匁程の出費

を要する勘定にして、代金の支拂は總て現金取引なり。絲價の高低は取引の繁閑及び産況の豊否に依て差あること勿論なるが、最近の相場は左の如し。

種 類	單 位	最 高	最 低
頂尖絲(最上等絲)	一兩に付	銀一匁四分八厘	同一匁零七厘
頭號絲(次等絲)	同 上	銀一匁	同八分

蠶絲の賣買に使用する秤は絲秤又は萊陽秤と云ひ、其一斤は十六兩なり。蓋平の通常秤は一斤十七兩三錢なるを以て、絲秤は通常秤の二斤と一兩三錢に當り、又蓋平の百斤は營口の百六斤二兩(我十四貫目)に當る割合なり。而して繭の賣買は口錢其他の習慣とも生絲に同じと雖も、唯だ賣買上生繭は顆數に例り、空繭は斤量を以てす。

**(五)製鹽業の最盛地** 遼東半島沿岸の製鹽業は、養蠶業と相並びて盛京省の二大有力事業として目され、沿岸至る所に製鹽に適せざるは無しと雖も、就中蓋平附近は擧げて鹽田と稱するも可なるの有様なり。我政府に於ても亦た其有利なるを認め、之を民間の事業と爲して大に發達せしめんとする計畫あり。鹽塘は概ね長方形に區劃し、大小一様ならざれども、大約一區の面積は長五六十間、幅十五間位を普

通とし、之を約七間四方位の小區劃に區分す。而して畦畔を設けて各區の界線と爲し、畦畔に小口を設け鹽水の注入に備へ、小木板を以て之を塞ぎ開閉自在ならしむ。又鹽塘の周圍には濠を掘り、以て海潮を貯ふるに備ふ。一鹽塘の小區劃は或は十六、或は十四あるも、其十二より少なきは無し。此小區劃一個を一副塘と呼ぶ。製鹽法は先づ鹽塘周圍の濠には滿潮に際し海水の進入する如く爲し、濠中には釣桶を用ひ之を副塘に酌入れ、此處にて太陽に晒すこと四五日なれば、始めて結晶を見る。一塘一回の採鹽高は上等の鹽塘にて概ね十石位とす。然れども本業に於て最も恐るゝものは降雨にして、若し大雨に逢へば雨水池中に充ち、甚しく鹽分を稀薄ならしむるに依り、止むを得ず池中の水を總て放流し、更に石礮を用ひて池内の地盤を固め、然る後更に新鮮なる潮水を酌入れ、又最初より同一なる仕事を繰返さる可からず。一年中製鹽に適する時期は陰曆三月より八月迄にして、其他の六ヶ月間は寒氣の爲め全く採鹽を休止す。製鹽期六ヶ月中にては三月より六月迄を最好期とし、七八兩月は降雨多くして採取多からず、一塘毎年の産鹽額は上等の鹽塘にて、豊年なれば三百石、中等塘二百五十石、下等塘五十石内外なり。一副鹽塘の賣買價格は大約

上中下の三等に區別せらる。最近に於ける一副塘の時價は、上等洋銀五百圓、中等同三百五十圓、下等二百圓位なり。而して蓋平河口より營口附近なる四道溝に至る一帯の海岸は總て一面の鹽田にして、約一千三百副塘と稱せられ、鹽業に従事する勞働者五千人を下らず、平年の産額三四十萬石に達す。製鹽の時藏は實に極めて簡單無造作にして、大抵二百石又は三百石宛露天の地上に堆積し、之を掩ふに稊稻若くは穀草等を用ひたるのみにて、降雨強烈なれば自然漏水の虞なきにあらず。海濱には五六里の間、製鹽の堆積して小丘の狀を爲せるもの相連り、一見して鹽業の盛大を知るに足る。而して各地に堆積せる製鹽中には五六年前に製造したるものもあるを以て、隨て一帯の鹽場に現存する既製鹽の額は、大約百萬石内外ならんと云ふ。鹽塘主と勞働者の關係は、通常塘主は製鹽時期中即ち陰曆三月より八月迄、洋銀二十四圓位の賃銀にて雇入れ、食料住居等は總て備主より支給す。又別に一種の方法に依り雇入るゝこともあり、其方法は塘主より製鹽季節六ヶ月間の食住を給し、賃銀は一切之を與へず、三月より六月十三日に至る期間に採取せし製鹽は盡く塘主の所得とするも、其以後の採鹽は塘主其半額を取り、殘半額を各備人に分配して賃

銀に代ふるなり。一副塘には製鹽者二人を要し、一人の塘主にて澤山の副塘を有するものは、此外管理者及び厨夫等を要す。故に雇人の賃銀及び住居修繕等を合し、一塘に付製鹽期間六ヶ月の費用約洋銀一百圓を要す。而して鹽業者より從來商人に直接販賣せし價格は、上等品一石六百斤乃至七百斤八十錢より一圓、下等品六十錢位にして、上等品一石の原價即ち買出價格八十錢の外に、現行清國税金四圓三十錢を加ふるときは、五圓十錢と爲り、更に若干の運賃及び商人の利益を加算し、蓋平城内にて商人の販賣する時價は、五圓八十錢乃至六圓位のものとして居れり。

(六) 農業生産費 露國が滿洲侵入以來鐵道敷設其他の爲め勞働賃銀暴騰し、殊に日露戰後益々甚しくなりたるを以て、農業生産費も從て増加したるが、今參考の爲め蓋平附近に於ける小作地十畝に對する高粱の生産費及び所得額を現今の相場により算出すれば左の如し。

小作料(但し十畝に付)	二十八弗
肥料百二十担(每担十五仙の割)	十八弗
種子三升半代	四十仙
肥料運搬費	四弗
種子蒔付費其他	二弗十仙
支取一季三四回(毎回四弗宛の割)	十二弗

確刈り賃二人分(一人八十仙の割)  
收穫後運入れ用車二輛雇賃  
高粱を穂より落す費用二人分(一人八十仙)  
其他雜費

一弗六十仙  
二弗四十仙  
一弗六十仙  
二弗

收入 高粱六石賣上代(每石十四弗の割)  
同上キビ稗の賣價

八十四弗  
十四弗

即ち支出七十二弗十仙、收入九十八弗、この差引利益は二十五弗九十仙と爲る勘定なり、小作人と地主の關係は極めて單純にして、小作人は一定の小作料を納むる外、平常地主と何等の往來を爲すことなく、吉凶事あるも慶吊の禮を盡すこと極めて稀なり、小作料十畝に付二十八弗を要する處は、地質膏肥なる上等地なり、若し又小作料を現品にて納むる場合には、或は收穫高を折半し、或は地主四分小作人六分等の分配方法をも行はる。

(七)砂金地と炭鑛 蓋平附近に於て砂金地として知られ居るは、碑坊及び石道口又の名を何家屯と稱する所なり、炭坑としては瓦房店、炸子窰最も著名なり、碑坊は蓋平の東北約二里許にして、其途中に小巴嶺關、家甫等の小嶺横はり、之を越ゆれば一面の平野あり、此北方の位置に當て諸部落の點在するあり、是即ち碑坊部落の

所在にして、其北背に標高二百メートルの小山脈走れるが、所謂碑坊の産金地とは、此一帶の地域を指すものなり、此地は三四年前に於て、一度露人の金鑛調査の爲めに來村せし以來、其産金地なること誰れ言ふとなくに傳はりて、終に廣く其名を知らるゝに到りしが、未だ實地に探掘せしこと曾てこれなく、産額の有無は不明なり、石道口は蓋平の南方約三里にある山間の一小部落にして、東方は山嶺を隔て、塔子溝に出る間道あり、其間約一里半なり、又西方は東雨霖堡に通ずる山路あり、約一里半にして、東清鐵道に達す、産金地は石道口村の南方約二十町にあり、金は砂金として、此處の小流に産す、又瓦房店、炸子窰の炭鑛は明治卅一年露國之を租借し、先づ鐵道を敷設し、舊租借人等に相當の代價を拂つて、全く買收の手續を畢へ、翌三十二年天津唐山地方より職工一千餘人を雇入れ、一面には家屋の建築、坑道の開鑿に従事し、一面には鐵道及び運搬路を修造し、清國人に探掘を受負はせ、上等炭一千斤銀五圓、二等炭銀二圓で買收せり、炭質は水分少く、出山貨と稱す、出山貨とは坑外に炭あり、裏面に入るに隨つて出炭額少きものをいふ、第一層炭は萬八立地下二三丈の下にあり、臭氣強くはねる質ありと稱す、其の下に石板相接す、第二層炭は立炸深さ

四尺餘、堅に固まりたる粉炭と稱し石板相接す、第三層炭は明煤深さ五尺餘、油氣あり汽車用に適すと稱し、石板相接す、第四層炭は明炸深さ一丈餘、油氣火氣共少しと稱し、汽車用に適し、同坑中の最上等品にして、第五層炭は下二路明炸の下に在りと稱し、炭脈は無底なり。

四四

## 第二部 遼河流域地方

中央滿洲の豊饒を謳はしむるも、遼河あるが爲めなり、滿洲唯一の通商港たる營口を隆盛ならしめ、遼陽、奉天、鐵嶺等の大市名邑を繁榮ならしめたるも、遼河あるが爲めなり、支那歴史を書くものをして遼東の名を逸する能はざらしめたるも、遼河あるが爲めなり、若し遼河なかりせば、滿洲は或は現時吾人が觀る如き、多幸多福の邦土たらざりしやも測られず、遼河の流域は實に新日本街の建設地とし、新日本村の創設地として、幾多好良なる資料を吾人に供しつゝあるなり、遼河の上流には二派あり、其西なるは內蒙古に源を發し、東なるは長白山の支脈庫爾諾山より起り、昌圖府の北に來つて東西遼河合流して一となりて盛京省に入り、開原縣、鐵嶺縣等の

西を横ぎり、巨流河司の鎮店を東し、更に西南流して遼陽洲の西境に出で、渾河を呑んで水量増大し、營口より海に入るものにして、全長總て百八十餘里、其灌溉區域の斯の如く宏大なるより推すも、又以て滿洲が遼河に負ふ處、如何に多きかを知るに足らむ。

### 第一 營口 (滿洲最大の貿易港)

(一)營口發達の原因 營口は俗に牛莊と呼べども、牛莊は牛莊城の所在地にして、營口の上流更に數里の處にあり、營口は今より凡そ六十餘年前に開港せられたる滿洲最大の通商口なり、市街は遼河の河口を遡る十四海里、左岸に沿ひ狹長なる地形を爲し、中央關帝廟の所在より二區に分たれ、東上流に沿へる地を東營子と稱し、各國人の居留地と爲し、西下流に沿へるを西營子と呼び、清國人の商衢とす、開港前は寥々たる一小村落にして、高粱の間に數軒の矮屋を見るに過ぎざりしが、歐米諸國との交通開けし以來、次第に繁榮に赴き、現時は人口十萬に達し、清國開港場中に於て最も有力なるもの一となれり、此遼河幅廣くして、漢堡に於けるエルベ河

アントゥエルプに於けるセルド河に譲らず、大小の汽船順序正しく投錨する時は、五百隻を繋ぐも狹隘を訴ふることなしと云ふ。是故に營口が一世紀にも足らざる期間に於て、能く現今の如き發達を爲したるは、一に遼河の賜なり。

(二)貿易上の勢力圏　滿洲の商業は都合四箇の方面に關係を有す。(一)黒龍江省の北部並に東部地方は浦潮斯德と密接の關係を有し、遼東半島は大連港に頼り、鴨綠江地方は主として芝罘と商業關係を結び、營口は滿洲中央部即ち遼河の流域及び松花江に沿ふ各地方を自家の勢力圏内として、貨物の吞吐を引受くにあり。故に其面積より云へば營口は獨りにて滿洲の三分の二を占め、残り一分を他三港が有するものなるを見れば、營口の貿易の滿洲に冠絶して盛大なる所以の偶然ならざるを知るに足るべし。營口の貿易は常に輸入超過を示す。輸出品は農産品多く、輸入品は多く工藝品とす。即ち天然物を收穫して之を賣り、人工物を求めて之を買ふなり。輸出品に於ては大豆、豆粕、豆油を主とし、皮類、藥材、蠶絲、高粱、其他雜穀之に次ぎ、又輸入外國品は綿布、綿絲を主とし、石油、石炭、鐵類、海産物、砂糖類、雜貨之に亞ぐ。而して是等輸入外國品の販路は時に消長ありと雖も、雲齋布、粗布、綿絲、石油、燐寸の如き

日用の必需品は、近年に至り著しき増進を來たせり。而して日本製の産物にして將來有望の雜貨を擧ぐれば、先づ第一は時計なり。其種類は置時計、懸時計、オルガン入目覺時計、懐中時計等賣行き良く、嗜好は懐中は鍵捲よく、鍵を胸間に垂れて裝飾の一とす。置時計は人物草花の描きあるもの、八角時計は縁に金星を施したる玉振りのものにて、外部に草花人物の模様あるを可とす。次は扇なるが此は大形のものにて親骨は少しく狭きもの、蓋は山水花鳥の金泥入りを可とす。次は陶磁器なるが、此は飯碗、茶碗、皿、鉢、井、散蓮花等の安物良し、亦寫真入りの湯呑みも相應に賣口あり。洋傘の安物に就ては女物は賣れざるも、男子用のものは好評なり。其他燐寸、石鹼、釜口、日本酒、巻煙草、綿絲、綿縮緬、フランチ、ル、タマル等の本邦品は非常に歡迎を受けつゝ、あるを以て將來とも倍々有望の商品なり。

(三)滿洲最大の工業　大豆より豆油を搾取し、其殘滓を豆粕とする事業は滿洲第一の工業にして、又營口は本事業の中樞たり。豆粕の製造所を油房と稱す。大豆の産地たる鐵嶺附近に於て、豆油採取の目的を以て始めて油房を起したるは、今より六七十年の前にて、其殘滓即ち豆粕は僅かに家畜の飼養料たるに過ぎざりしが、不



圖せし事より山東省の農民之を肥料に施して其價值多きを認め、之が動機と爲りて盛大を來たし、今や我國のみにも毎年五百萬兩内外を購入するに至り、前の本業たりし豆油の製造は、却て豆粕の副産物たらんとするに至れり。豆粕製造業は逐年旺盛に赴きたりと雖も、之が製造方法に就ては毫も進歩せず、僅かに人力の代りに騾馬を使用し、大豆を壓搾する位なりしが、明治廿八年營口の英商太古洋行が新式機械使用の範を示せしより、清人も漸く之を學んで改良を加ふるに至れり。而して油房を建設するに當りては、場所の選定最も肝要なり。小規模の油坊は滿洲各地にあるも、輒近に至り大計畫の油房が漸次營口に集注し、次第に内地の小油房を抑制せんとする傾向を生じたる理由は、蓋し左の如し。

- (一)營口は豆、豆粕の集散地なる故、稍精密に相場の變動を豫知する便あり、(二)油房の信用を利用し豆類の賣買を爲し、且つ同屋的業務を兼ねるを得、(三)豆類豐富の際一時に多大の原料を買ひ置くを得、且つ日常原料の缺乏を招かざること
- (四)融通圓滑なること、(五)積取汽船入港の多少に由り相場の變動著しきことあるを以て、準備豆を賣却し其利を得ること少からず。

等の理由に據り、遂に營口が豆粕業の中心と爲りしなり。油房を建設するに就ては、新式と舊式とに依て其資本額に非常の差あるは勿論なれども、左に新式即ち機

械油房につき一實例を示せば

總資本金二十萬圓 (固定十萬兩、流動十萬兩)

一箇月豆粕製造高 九萬枚

但し豆粕市場良好にして、一日一班より百廿五枚を製すれば、一月九萬枚を産すれども、稍之を減せば一日一班より百枚なるを以て、一箇月には七萬二千枚を製造するに過ぎず。故に兩者の場合に於ける製費を示せば左の如し。

製造費細目	九萬を製する時	七萬二千枚を製する時
職工百十人 (九十六人なれども、準備十四人を置く)	一千〇〇四元	八百二十四元五十仙
監督 (四人賃錢)	八十元	同上
機械修繕人 (四人賃錢)	百八十元	同上
水汲唧筒掛 (二人賃錢)	六十元	同上
石炭運搬人 (二人賃錢)	六元四十仙	同上
火 夫 (二人賃錢)	十六元	同上
豆破碎場人夫 (四人賃錢)	十二元四十仙	同上
三階豆均し (人夫四人賃錢)	十二元四十仙	同上
賄 人 (四人賃錢)	二十元	同上
苦 力 (四人賃錢)	十二元	同上
三階豆運び費用 (百石ニ付十一吊)	二百六十四元	二百一十一元四十仙
機械消耗油	六元	同上
石 炭 (一日に八噸乃至七噸)	二千百六十元	一千八百九十元
油 草 (一袋に付五分)	九百元	七百二十元

麻	布(百俵、一箇價四錢)	百〇五元八十四仙	八十四元六十四仙
職工	賄費(一人一日十二仙)	五百〇四元	同上
借地	料(一年四千兩)	四百九十元	同上
建築	費(五萬兩の利息)	九百〇二元三十仙	同上
消耗	費	二十元	同上
合	計	六千七百五十六元三十四仙	六千五百七十六元八十四仙
過爐	銀換算	四千五百八十四兩三錢	四千四百六十二兩三錢
一俵即ち五枚に對し		二錢五分四七	三錢一分〇〇

滿洲豆粕の製造高一箇年大約一千萬枚とすれば、其副産物たる豆油は四千萬斤の巨額に上るを以て、是亦た看過すべからざる産物なりと云はざる可からず。

**(四)豆類取引の方法** 滿洲の大産物たる豆類を營口に於て取引するには、河俣地俣、集市俣の三別あり、河俣は河運に依り營口埠頭に來集せる船豆にして、之は乾燥不良また故意に河水を散布し、斤量を多くする等の惡風行はれ、品質も概して宜しからず、價格も他豆に比し大に低廉なり、此豆は營口に集散する豆類中最も大部分を占め、例年三月末より出廻り十一月中旬に至りて止む、之が賣買を周旋する者は水經紀(仲買)と稱し、每家數十人の手代を使用し、一方に於て船豆荷主の依頼を受けしめ、各見本を集め、同貨位の物は之を合して一と爲し、各問屋を巡回せしめ見本

及び販賣の石數を示しつゝ、商談を試む、賣買の約を了せば、買方は急使を派して見本及び現物の相違なきやを確め、直に舢船を遣して斗量を爲し、或は之より直ちに汽船に轉載するか、若くは陸揚げを爲して庫中に貯藏す、買手に於て斯く急速を要するは、賣約後直ちに水を注加し、又は他の上値を聽きて轉賣するが如き弊風あるを以てなり、地俣は又棧俣とも云ひ、前記の如く河豆を陸揚げして庫中に藏したるもの、若くは冬期車運にて出廻りたる貯積豆の稱呼なり、地俣豆は冬期及び春期に於て盛に賣買せらるゝが、此期の地俣豆は能く乾燥し、品質も良好なり、次に滿洲各地より冬期輸送する車載豆は、一時營口街に入る東南門口に來集し、茲に集市を開く、是れ集市俣なる名のある所以なり、各荷主は自己の車上に便乗し居るを以て車載の儘見本を取り商談を試む、其集市を離れて、門内に入り獨り賣買を約するが如きは固く禁じて許されず、茲に賣買を了したる者は各問屋の手代より荷主に對し、其價格及び自己の屋號を印したる書附を交附し、荷主は之を以て貨車を拉し、其店舖に至りて斗量す。

**(五)金融機關の種類**

營口には我正金銀行の支店ありて、彼我貿易上に至大の

利便を與ふるも、此地在來の金融機關としては、先づ銀爐及び當舖の二種に指を屈せざるべからず。銀爐は又一に爐房とも云ひ、業務は自ら銀塊を購入し、銀貨を鑄造して之を賣出し、或は他よりの委託を受けて各種の銀兩又は銀塊を改鑄し、尙ほ商業取引あるに際し、甲乙兩者の媒介者と爲り、貸借關係を帳簿上に於て決済すること等の役を爲す。營口にある正銀は大抵銀爐の庫中に藏置せらる。試みに平常市中の有高を問ふに各銀爐之を秘密に附するを以て判明せざるも、多き時は五百萬兩に達することあり、少きも五六十萬兩を下らざるべしと云ふ。此他票莊若くは票號、銀莊若くは銀號、錢舖等の名稱ある商賈ありて、或は官私の現銀を爲替して一定の爲替料を徴し、或は官私の預金を引受け、恰も我邦の普通銀行と同一の業務を營むものあれども、多くは銀爐の兼業に、屬す。當舖は我國の質屋と同一にして、土地家屋の如き不動産を除き、衣服器具米穀等の諸物品を抵當として、資金の貸附を爲すものにして、銀爐其他の票莊と取引する信用を有せざる者は、皆之に就て借款す。質屋が我金融上有力なる一機關なるが如く、當舖も亦た甚だ勢力あり。當舖の資本は何れも十萬兩以上にして、中には四五十萬兩のものもあり、又此外質舖典舖と稱する

ものあるも、そは當舖の小なるものと見れば、大差なからん。

(六) 利子及び通貨　營口の支那銀行中當座預金に對しては利子を附するものなし。若し一箇月以上の定期預金と爲れば、正銀なれば千兩に對し一箇月十二兩位、過爐銀なれば千兩に付一箇月五兩位の利子を附す。貸付金は、大抵一箇月以上一箇年未滿の期限を以てするものにして、平時の利息は大抵正銀千兩に付一箇月十七八兩より二十兩位、過爐銀なれば千兩に付一箇月七兩乃至八兩なり。日歩貸は一切行はれず、割引は全く行はれざるにあらざるも、實際甚だ稀なり。當舖の利子は百分の二乃至四、五を通例とするが如し。營口にての通貨は元資銀、大銀貨、小銀貨、銅錢及び外國貨幣なり。元資銀は又營口元資と稱し、各人の依頼に應じて銀爐の自由に鑄造する馬蹄銀なり。其量目の標準は甚だ區々にして、大なるは五十四兩もあれば、小なるは五十一兩位のもあり。取引の際には之を秤りて授受する點より見れば、貨幣と言はんよりも寧ろ一個の銀塊に過ぎざれども、其流通しつゝある狀況は少しも外國に於ける貨幣と異なる所なく、貨物の大取引に用ふる相場は兩を以て表示す。營口の通貨中最も注意すべきは、過爐銀と稱する一種特別の幣制ありて、大口の賣

買貸借は之に依て決済せらる。過爐銀は管口の商習慣に由り、貸借決済日と定まりし清曆六月一日、九月一日、十二月一日の三期に正貨を受取るの黙約を以て、元資銀を銀爐に預け入れ、銀爐の帳簿に受入れ即ち借方に記載せしめ置き、他人と取引を爲し、代價を支拂ふ必要ある時は、買主及び賣主双方より銀爐に對し、口頭にて其旨を告げ、其帳簿上に貸借の記入を爲さしむるものにして、甲乙取引者間には、少しも現銀の受渡を爲さずして、唯甲より乙に銀の所有權を移轉せしむるのみなり。若し過爐銀の所有者にして、決算期限未だ至らざるに現銀の引換を要する場合には、恰かも期限前に手形を割引するが如く、相當の割引料を出さざるべからず。其割引歩合は加色と稱し、加色は日々市中に於て定まるものにして、現銀の取付大なる時は高く、少き時は下落し、平常は勘定日の翌日最も高く、漸く次期の勘定日に近くに從ひ下落し、遂に皆無となる。

(七)貨物賣買の方法 管口に於て貨物を賣買する方法に通常三種あり、一は大屋即ち清語の經紀と稱する仲買的問屋の手を経るもの、二は内地より來る客商と直接の取引を爲すもの、三は二重に仲買の手を経るものなり。大屋は諸種の取引に

従事し、滿洲三省内地商人に廣く其名を知らる。大屋の口錢は大概百分三なり。又第三の二重に仲買の手を経るものとは、先づ甲清商の手を通じ、次に大屋の手を経て内地の客商と賣買取引する方法なり。此場合には二重の口錢を支拂はざるを得ず。甲清商の口錢は大概價格の三分、大屋は甲清商に拂ひし口錢を引去りたる價格殘金の二分なり。此種の取引を爲す時は、甲清商は依頼者の爲に無報酬にて通關手續を爲し、又半年間餘の倉敷料を引受くる慣習あり。現今我國に多額の輸入ある大豆、豆油、豆粕の取引は、多くは問屋の手を経るものにして、現銀勘定なるが常なり。而して其取引には過爐銀を用ふ。昨年四五月頃に於ける過爐銀の元資現銀に對する割増は三十兩内外なり。仲買口錢は物品の種類に依り差違あるが、其重なる者を舉ぐれば、各種金巾は三分の三、雜貨も百分の三、豆類は一石三百文、豆油は一篋三百文、豆粕十枚毎に三百文にして、材木は日清戦争前には一口に付銀二錢なりしが、現今は五錢と爲せり。

(八)度量衡の種類 度量衡の不定錯雜なるは清國の常に於て、先づ尺度より云へば、裁尺、木尺、大尺、蘇尺の四種あり。度量衡は人民に自由製作を許し、然かも之が檢

定を爲すことなきに依り、同一尺度中にも多少の長短あり、今、在營口の某氏が實地商店に使用しつゝ、ありし各種の尺度を比較し、更に之を我國の尺と比較したるに左の如し。

種類	用途	我曲尺	我直尺
裁尺一尺	布帛を度るに用ゆ	一尺一寸五分	九寸二分
大尺一尺	土布を度るに用ゆ	二尺七寸五分	一尺六寸六分
木尺一尺	材木土地等を度るに用ゆ	一尺四分	八寸三分五厘
蘇尺一尺	寸法を度る時に用ゆ	一尺二分	一寸一分六厘

斗量にありては、樹を斗と稱し、一升斗、五升斗、一斗斗あり、樹の製作も人民に許すも、只一斗斗のみは官製のものを使用し、又一斗以上のものを授受するには、必らず官斗を使用せざれば、嚴罰に處せらる。官斗に河備斗、地備斗の兩種あり、前者の一斗は我一斗四升五合一夕に當り、後者の一斗は我一斗四升なり、此地備斗及び河備斗にも私製のものありて、容量は官私とも不精確なり、權衡には戥子、天秤、戥秤の三種あり、戥子及び天秤は銀塊を量るに用ひ、我十匁は戥子秤の一兩〇四一八と爲り、我九匁五三五は天秤の一兩に當る。秤は大小種々ありて、我國舊來の權衡に類し、商品の賣買に使用せらる。其量の不正確なることは、尺度斗量等と同一なるが、先づ平均

して彼百斤は我が十八斤乃至八十九斤に當る。

(九)遼河の運輸 營口には鐵道に依つて南旅順大連、北哈爾濱に通じ、又關外鐵道に乗じて山海關より天津北京に達し得べき利便あれども、其營口をして現今の隆昌を致したるは實に遼河の賜物とす。遼河の上流は前途の如く、東遼河は長白山の支脈なる庫爾諾山に發し、西遼河は內蒙古より起り、更に渾河、太子河等の諸川を呑合し、營口を経て海に朝す。其流域は滿洲中戸口最も稠く、最も開けたる部分にして、奉天府、遼陽洲、海城縣、通江子、開原縣、鐵嶺縣、法庫門、新民廳等の各市場は、其本流若くは支流に沿へり、而して營口より年々輸出する幾百萬石の豆類を始め、滿洲内地各種の産物は皆一旦是等の市場に集中し、然る後遼河の水流に依り營口に運輸し來るものとす。其輸出品の集散地は又併せて輸入品の市場たる論を俟たず、開河中遼河上流地方と營口との間を往來する船舶を遼船と云ふ。遼船に二種あり、大なるを樺船と云ひ、小なるを手船と稱す。其總數は日清戰役以前迄は凡そ一萬一千餘艘なりしが、平和後に至つて稍其數を減じたり、而して毎艘平均一箇月に二回の往復を爲すと假定せば、例年開河即ち春三月末より向ふ七箇月には、總計約六萬餘航を

爲す割合なり。又此の遼船の搭載量及び其の製造價格を聞くに左の如し。

種類	搭載量	使用水夫	製造價格
手船 <small>大形</small>	四五十石	三人	百五十兩
手船 <small>小形</small>	四五十石	三人	百二十兩
橈船 <small>大形</small>	七八十石	五人	三百兩
橈船 <small>小形</small>	七八十石	五人	二百四十兩

遼船の上流終航點は現今奉天の北方二百九十清里なる通江子にして、其到着日數は風位水量等に依て差ある勿論なり。全體に滿洲は殆んど無風の日なきを以て航行には大なる便あり。營口より鐵嶺まで六百五十清里の水路を遡るに順風の時は往々にして四五日間に達することあり。今左に重要各市より營口に送る貨物の運賃及び到着日數等を示さん。

到着地	送地	重量	運賃	到着日數
營口	奉天府	百斤	四十錢乃至五十錢	五日
營口	鐵嶺	百斤	一圓二三十錢	五日
營口	通江子	百斤	五十錢乃至七八十錢	六日
營口	開原	百斤	一圓二三十錢	六七日
營口	法庫門	百斤	三十五錢乃至五十錢	五日
營口	新民廳	百斤	八九十錢	四日
營口	遼陽	百斤	五十錢乃至八九十錢	三日

運賃は時季に依り高低あり、春秋二季は一は開河後に當り一は閉河に近きを以て、何れも商業繁忙の時なると、且つ春季は上流水淺くして動もすれば、航行に困難を感ずるとを以て、春季に於て運賃最も高く、秋季之に次ぎ、夏季は最も低廉の時なりとす。

### 第二 遼陽 (産業上の大市場)

(二) 滿漢韓の要衝 遼陽は奉天の南百廿清里、また營口を距る北々東二百四十清里の處に位す。此地は北滿洲より南下する者、又は韓國義州より營口を経て支那本部に行かんとする者の要衝に當り、且つ商業取引に於ては營口と最も密接の關係を有し、營口の巨商富買は孰れも支店若くは出張所を遼陽に設く。此の故に營口に於ける商況の順逆は、直に遼陽商業界の盛衰と爲るなり。遼陽は北方十清里にして遼河の水運を利用し得らるゝのみならず、車道も亦滿洲の各市に通じ、輸送の便甚だ少なからざるが故に、此地は自然貨物集散の一中中心たる地位を占む。今聯絡ある著名の市邑を擧ぐれば、東方には鳳凰城、興京、通化、安東、大東溝、寬甸、懷仁あり、西部

には廣寧あり、南部には海城、岫巖あり、北方には奉天、新民屯、鐵嶺、吉林、海龍、城等あり。何れも遼陽を中央市場として、百貨の送受を爲す。

(三) 販售重要商品 遼陽に於て消費せられ、若くは此地を経て附近の市邑に分布せらるゝ輸入品の重なるものは、綿布、綿絲、石油、燐寸、煙草、雜貨類とす。綿布は南清地方の如く華奢の風習なきを以て、其需要極めて廣汎にして、逐年増加の傾向あり。洋布は米國品第一位に居り、英國品之に亞ぐ。本邦製のものには縮絨布は、棒縞無地共に漸次輸入の傾向あるも、瓦斯織、絹綿交織等の上等品は、單に上流に於て使用するのみ。紡績絲は、印度絲最も勢力あり、本邦絲も近年俄に勢力を擴張し、來りたるを以て、遠からず印度絲と相馳驅するに至るべく、石油は米國品最も賣行き廣く、此地のみにて一年十五萬箱を消費すと云ふ。燐寸は本邦品、黃燐燐寸一箱七十餘根入のもの殆んど全市場を獨占す。煙草は從來は本邦製品と露國製品と相競争せり。雜貨の重なるものは、毛布類、錢入れ、石鹼、手拭、鏡類、時計、陶磁器等にして、日英米獨露諸國產のもの、互に一張一弛の勢を有す。重要物産は大豆、豆粕、燒酒、棉花、米の五種なりとす。大豆の毎年遼陽に聚集する額は二十萬石に上り、其間屋大小合せて三十餘戸あり。

り、油房即ち豆油搾取場は十餘戸あり、大抵巨屋を構へ、屋内に扁平にして◎形の石板を設け、其上に石車を按し、豆油の搾取を爲す。而して其粕は所謂豆餅即ち豆糟として、營口に輸送せられ、更に海外に販賣せらるゝものなるが、一日壓搾機一臺にて豆餅六十餘片を製す。一片の重量は五十一斤にして、一片の豆糟を製するに油五斤乃至六斤を搾取し得べし。又燒酒は滿洲内地の特産物にして、遼陽に於ても其製造なか／＼盛んなり。豆糟の製造方法は、營口の部に於て既に述べたるを以て、次項に燒酒製造の概要を述ぶる所あるべし。棉花は城の周圍六七十清里以内の各邑に産出す。其産額多大ならずと雖も、一箇年七十餘萬斤を出すべし。是等は殆んど皆此地附近に於て消費せられ、偶々奉天に輸出せらるゝことあるも、其は極めて僅少なり。價格は印度棉花に比し二三百文低廉にして、一斤三吊二三百文なり。米は滿洲中最優等のものを生し、品質は上海米に比し、寧ろ良好にして、光澤あり、味甘美なり。遼陽青と稱し、一石の相場百八十九吊文位なり。唯遺憾なるは其耕作區域極めて狭小にして、僅に城の西方及び北方三四十清里の間に過ぎず。

(三) 盛大なる燒鍋 燒酒は高粱を原料として製するものにして、本邦の燒酎に

酷似す。燒酒製造所は、土語これを燒鍋と呼ぶ。遼陽に於ける本業は、何れも有數なる資本家の營む所にして、資本金二十萬吊文乃至五十萬吊文を有し、優に遼陽の經濟界を左右し得るの勢力あり。燒酒製造の方法は、備へられたる高粱に少量の小豆、麥、蕎麥の粉末を混合し、密に入れて醱酵せしめ、四日の後、窖より出して、屋内の地上に撒布し、更に小豆、麥、蕎麥の粉末を入れて攪亂すること約一時間にして、湯釜の上に装置せられたる圓形の木桶に之を入れ、中央に徑一尺許りの孔ある蓋を蔽ひ、周圍より蒸氣の洩れざる様に燒酒槽を以て充塞し、釜下の爐火を盛にす。此時天井より釣下げられたる處の錫筒を以て、蓋の中央部にある虛孔を密蔽し、之に冷水を入れて終始攪拌し、下より蒸發する所の水蒸氣を凝結せしめたるもの即ち燒酒なり。製品は容積約三升の瓶に入れて發賣す。其相場一斤一吊二百文内外なり。而して燒酒製造に用ふる燃料は石炭にして、一日の製出高一釜に就て千四百斤なり。一日二回蒸溜を行ひ、一回に五石を入れ、之より七百斤を醸造し得ると云ふ。

〔四〕煙臺の石炭坑 元來東部盛京省は礦物の豊富なるを以て聞ゆる所なるが、就中遼陽より奉天に向て進む數里の一小驛にある煙臺の炭坑は、日露戦争に依て

有名のものとなれり。此炭坑は煙臺驛の東に當り、南北に連亘起伏する丘陵の中に在りて、其北端なるを磨臍山と云ひ、南端なるを茨兒山と稱す。此兩山は豊富なる炭脈の兩端を形成し、磨臍山は即ち目下採炭中の坑區のある所なり。故に磨臍山炭坑の名われども、其煙臺停車場に近きを以て、普通煙臺炭坑と稱せらるゝなり。炭脈は磨臍山より南方茨兒山に連りて、其延長約三里に亘り、幅員は北端に於ては約半里を有し、南に赴くに從ひ、廣く遂に一里餘に及ぶ。各炭層は東西兩端に高くして、六十九度乃至七十度の傾斜を有し、中央に下るに從ひ、傾斜の度漸次減少す。而して其重要な炭層は都合十一にして、各層間二十呎乃至二百呎の距離を有せり。左に各炭層の名稱及び厚さを示さん。

第一層	介兒山	厚さ	一呎六吋	第二層	上三路	厚さ	二呎六吋乃至三呎
第三層	上三路	同	二呎乃至二呎六吋	第四層	別曹	同	一呎乃至三呎
第五層	甲比	同	一呎乃至二呎	第六層	甲之比	同	二呎乃至二呎六吋
第七層	大曹	同	四呎乃至五呎	第八層	大黃煤	同	二呎六吋乃至三呎
第九層	小黃煤	同	一呎六吋	第十層	下三路	同	二呎
第十一層	下二路	同	八呎乃至二十呎				

如上の各炭層は孰れも有煙炭なれども、煤煙甚だ少なく、其分析表は左の如し。但



し數量は總て百分率なり。

炭層名	炭業	採發物	水分	灰分	硫黃
大曹	六〇・二	二四・〇	二・〇	一三・八	少
甲之比	六七・八	一七・三	一・八	一三・一	極少量
甲比及別曹	七〇・二	一七・六	二・一	一〇・一	少量

尙ほ此外煙臺方面に於て、有望の炭坑と目され居るものは蘆家屯、張家溝、昆明山、茨山、丈有溝、大窩、瓦子溝等にして、奉天將軍若くは土民の經營に依り開掘せられつゝあり。

**(五)金融及び通貨** 遼陽に於ける金融機關は、營口若くは奉天の如く完備し居らずして、僅かに錢舖及び當舖あるのみ。錢舖は貸金、爲替、預金を業と爲し、時々錢票を發し、遼陽商業界の爲に金融を調和する最有力の機關なり。其組織は一個人又は數人の合資に成り、資本金は大は四十萬吊より小は十萬吊に至る。當舖の資本金は一萬吊乃至十萬吊にして、山西人の營むもの多し。冬期は商業繁盛なるを以て、金融引締り普通貸出の外、商人の貨物を抵當とし借款を依頼するもの多き故に、當舖は非常に繁劇を加ふるも、夏期は之に反し、金融緩慢なるを以て、當舖の業も亦た閑散

なりとす。貸出金利は錢舖は大抵月一分二厘乃至一分五厘にして、其金額期限信用の如何に依り高低あるは勿論なり。預金は定期引出の約束あるものに限る。年四五分の利を附す。又當舖の貨物に對する貸出金は、日用品は時價の六掛乃至八掛にして、其他は貨物の如何に依り、五掛乃至二掛なり。利子は主に月利二分にして、三十六箇月即ち三年を以て一期とす。若し此期を過ぐれば借主の事情如何に係らず更に延期するを許さず。又月の五日以内に受出するものに對しては、其月の利子を取らざるも、猶ほ一日を經過すれば、一箇月の利子を收む。市場に流通する貨幣は、元寶銀、銀貨、銅錢、錢票、紙幣の五種とす。元寶銀は所謂馬蹄銀にして、總て量目を以て取引す。又別に碎銀と稱する細片銀塊あり。之は元寶銀一個を以て標準とすれば、端數の支拂に困難なるを以て是を流通せしむるものにして、少額ならば元寶銀と同じく其量目だけの價格を有するも、元寶銀一個以上の量に至れば多少の差あるを免れず。是れ元寶銀一個の鑄造費を控除するに因る。銀貨は各省にて鑄造したるもの及び日墨露等のものなるが、賈貨の多きこと驚くべき程なるを以つて、授受の際には能く注意せざるべからず。銅錢は鑄造年次を異にし又重量も大小多少の差あるも、等し

六六  
く一文銭として通用す、其計算法は二個を一成、三個を二成、五個を三成、十六個を一  
百文、百六十二個を一吊文とす。錢票は所謂兌換紙幣にして其額一様ならず、最少額  
一吊文より最大額四五吊文に至る。錢舖、糧房、雜穀、問屋、燒鍋等より發行するもの  
なり。紙幣は北清事變以來露國紙幣の通用を見、今は我軍用手票之に代れり。遼陽營  
口間の送金爲替は、小銀貨又は元寶銀にて取組むを常とす。其相場一定せざるも、通  
常小銀貨百元に付爲替料八十仙乃至一元五十仙、元寶銀百兩に付營口過爐銀百二  
兩乃至百十二兩の範圍を超えざるものとす。

(六)商情一斑 一箇年中商業繁盛の時期は春秋兩度にして、春期は遼河開河後  
即ち舊三月より五月まで、又秋季は遼河結氷前即ち八月より九月までとす。夏季は  
降雨多く道路泥濘、交通不便となる故に、商情閑散なり。取引は重に現銀にして奉天  
營口の如く過爐銀の賣買行はれざるも、信用あるものは往々延べ賣買を承諾する  
ことあり。定期支拂は大抵三箇月拂を以て最長期とし、普通は十五日拂の習慣なり。  
其三箇月以上の仕拂と爲れば、一箇月一分二三厘の利率を按して計算するを例と  
す。貨物を賣買するに就て問屋なる一種の機關あること、我國に同じ、各地より來る

所の商買は重に問屋に宿泊し、貨物の販賣若くは買付を委託す。問屋は専心委託主  
の命を守り、精密に事を處理し、且つ倉入其他一切の事務を代辨し、荷受渡の際に起  
りたる凡ての損害に責を負ふものなるを以て、頗る便利の機關なるのみならず、手  
代を各方面に走らしめて現物の有無、取引高の多少、相場の変動等詳細なる事實を  
委託主に通報し、貨物賣買の參考に供するを以て、坐らにして市場の大勢を知るこ  
とを得、而して賣買成立したる時は、双方より手数料を出す、大概賣主三分、買主二分  
の割合なり。

(七)水陸の運輸 營口奉天への運輸は遼河の水運を利用し、冬期結氷の頃のみ  
陸運を藉る。水運に倚るものは船房と稱するもの専ら之を取扱ひ、水量多き時は市  
外十清里なる上王家にて、水量少き時は十六清里なる干河子にて貨物の積込を爲  
す。左に主要地に到る距離並に貨物運搬に要する日數を擧ぐれば、

地名	距離	水路		陸路	
		日數	時期	日數	時期
營口	二百四十清里	八日	冬期	三日	夏期
奉天	百二十清里	四日	冬期	一日半	夏期
海城	百二十清里	四日	冬期	一日半	夏期

鐵嶺	二百五十海里	九日	三日	五日	六八
鳳凰城	二百四十海里	四日	四日	六日	

運賃は發送地に於て一半を仕拂ひ、到着地に於て其殘額を支拂ふものとす。是れ各地に於ける貨幣の相場一定せざるより自然に發生したる習慣なり。遼陽營口間貨物の水路運賃を擧ぐれば、遼河積込地迄の車賃をも含んで、雜穀一件(百廿斤)五吊文、豆粕一片二吊文、大豆一石十二吊文にして、冬期の車賃は船賃と大差なきも、夏期の車賃は約六割増とす。又貨物發送に就ては之に保險を附し、不時の災禍に備ふ、現今遼陽にある保險業者は二軒あり、遼陽停車場は西門外にあれども、從來は汽車を利用する者甚だ鮮し。

(八)各種の度量衡 度量衡は總て支那的にして各種不同また營口奉天等のものとも同一ならず、先づ尺度より述べれば、

穀尺	は我廠尺に比し約一寸短し
洋尺	西洋反物を度るに用ひ、穀尺の二尺六寸に當る
木尺	穀尺に比し約二寸短し
大尺	穀尺の一尺七寸強に當る

斗量の計算法は半合を一合、五斗を一斛、十六斛を一乘と云ひ、遼陽一斗を各地の

ものに比較すれば、

營口斗	八升四合	通江子斗	七升五合
奉天斗	九升五合	法庫門斗	九升
長春斗	七升五合	新民廳斗	八升五合
海城斗	九升		

權衡は平秤、戥あり、平に又庫平、漕平あり、庫平は官税を納付する時に用ひ、漕平は商業取引の際、重に元寶銀を量る爲め使用す。秤は一般貨物の賣買に用ひ、戥は藥材を量る場合に用ひらる、而して此地の百斤は營口の百五斤にして、約我九十一斤に該當す。

### 第三 海城 (亦著名の一市邑)

(一)商工業の狀態 海城は奉天より遼陽を経て旅順大連に至る中間の都會にして、地形は平坦なり、海城より南すること數里にして八里河なる一驛あり、之れ奉天方面より南下するに當て、營口と金州半島に向ふ道路の分岐點たり、此地は附近に人口十萬を有する營口、三萬を有する蓋平、五萬を有する遼陽の三角形の中央にあるを以て、交通も頗る頻繁にして、遼河流域の南方に於ける有力なる都會として

知らる。海城の商業は其規模に於ては遼陽に及ばずと雖も、繁盛の度に於ては却て遼陽の右に出づとも傳へらる。城内には十字形の市街ありて、豪商富買の店舗聯列し、街道亦清潔、城郭の完備せるは滿洲各城中稀に見る所なり。輸入品の重なるものは綿絲、綿布、鐵類、石油、雜貨等にして、我製造にかゝる洋傘、卷煙草、陶磁器、石鹼、綿布、燐寸、鈕釦、鏡等の工業品は或は大連港より、或は營口より輸送せられて盛に賣買せらる。商買の重なるは豆、問屋、油房、錢舖、雜貨店等なり。商業取引に關する習慣等は遼陽に於けると略ぼ相似たり。

(二) 耕地及び農産物

海城附近の土質は肥沃にして、農耕に好適なり。産物は高粱、粟、玉蜀黍、豆類にして、豆は種類に由り蒔付に遅速あり。又收穫の割合にも差違あれども、其他のもの、生産額及び收穫高を一段歩に平均するときは左の如し。

種 類	種 子	收 穫	蒔 付	刈 入
玉蜀黍	二斤	百三十斤乃至百六十斤	四月	六月
粟	一斤	百五十斤内外		
豆	五斤	百二十五斤乃至百五十斤		
高粱	二斤	百三十斤乃至二百斤		
高粱	一升	約六斗		

肥料は馬糞及び土糞を使用す。土糞とは汚穢物を土中に腐敗せしめ、土に混和して肥料に作りたるものなり。耕作者は騾馬二頭立ての農具にて通常七人を要す。一日の耕作反別は約我一町二段餘なり。耕地の賣買價格は上等五六拾圓、中等四拾圓、内外下等拾五圓乃至二拾圓なり。農民は一般に淺黄及び黒の金巾、或は内地産の綿布、兒童は赤色を用ひ、甚だ粗朴にして、食料は朝が粟粥、高粱饅頭、白菜漬物、晩は高粱飯、白菜漬物位にて清曆二月より十月に至る間は三食なるを以て、朝夕は粟粥と高粱饅頭、晝は高粱乾飯を食す。

第四 奉 天 (清帝國の舊都)

(一) 滿洲最大の市街

奉天府は清朝の舊首都にして、盛京省の首府たると共に、復た滿洲第一の要都なり。我軍の奉天占領は歐洲諸國をして旅順の開城にも勝ざる稱賛と感動を起さしめたる所なり。奉天府は遼河の東九十清里、渾河の北十清里、營口の北三百六十我滿洲、東清鐵道奉天停車場を距ること四十五清里の處にあり、瀋陽又は盛京とも稱す。清朝の祖先努爾哈赤の興京より移りて都したる處にして、

當時瀋陽城、興京城、東京城を號して三都城と呼べり。人口は三十萬あり。盛京將軍此處に駐在して、奉天省の行政を掌握す。府城の規模は北京に及ばずと雖も、結構壯麗なることは、清朝發祥の地たるに耻ぢず。府内は分て大東關、小東關、大西關、小西關、大南關、小南關、大北關、小北關、四平街、鐘樓南大街、鐘樓北大街の十一大區とす。四平街及び南北鐘樓大街は内城に在りて、奉天府最大最盛の商業街なり。

(二)商業上の價值　　奉天府は運輸交通の衝を扼する一大樞要の地にして、商業は滿洲第一の消費地たると同時に、又滿洲三省に對する最大の貨物集散市場たるを失はず。即ち奉天府の北方なる阿什河、呼蘭、哈爾濱、吉林府、長春、昌圖、奉化、開原、鐵嶺、南方の烟臺、遼陽、海城、牛莊城、營口、其西部なる大民屯、新民屯、其東部なる海龍城、朝陽、鎮山城子、通化、興京、鳳凰城の各市邑は、何れも奉天府を中心として、貨物の集散を爲さざるはなし。即ち營口より輸入して滿洲一帯の地に供給せらるゝもの及び前記各市邑より産出する所のものは、先づ奉天府に廣集し、更に營口に送らるゝもの多きを以て、奉天の經濟上に有する地位や、又偉大なりと謂はざるべからず。滿洲の實業に志ある者は、決して奉天府を看過する能はざるなり。店舗の構造は頗る見事に

して、屋上を越えて雲漢を摩すとも謂ふべき看板の標柱は五色に綾採られて甚だ美觀なり。店頭の商品飾付方法は、包藏式にあらすして、陳列の最新法を採用するもの多し。而して重要輸入外國品は綿絲、綿布、石油、鐵類、陶磁器、海産物、雜貨等にして、先づ最も多く目につくは西洋雜貨店及び西洋食料品の専門小賣店なり。時計、洋燈、携帶電燈、懷中鏡、ナイフ、洋巾、袴下吊、インキ、ペン、白粉、香水、楊子、齒磨粉、三鞭酒、ウキヌキ、一、ブランド、葡萄酒、麥酒等を始めとして、罐詰類、珈琲、ビスケット、チョコレート等如何なる贅澤品にても揃はざるはなし。又日本品にては捲煙草、寶丹、燐寸の三品は天下は我一人かの如く偉大なる勢力を有す。商品は何れも營口より輸入され來たるものなるが、雜貨店、食品店の發達を促したるは、謂ふまでもなく露西亞人が多く入り込みたるに基因す。猶ほ此他洋服裁縫店もあれば、理髮店もありて、滿洲の都邑とは思はれざる程なり。今や露西亞人の勢力又た往時の如くならずと雖も、奉天は日本人なる二代目の華客に依て、益々進歩することならむ。

(三)製粉事業の中心　　滿洲に於ける製造工業は極めて幼稚なれども、其前途有望のものは其數少なからぬ中に就て、製粉事業の如きは宜しく本邦人の考查注目

を要する所とす。滿洲中に於て最も優等なる小麥を最も多額に産出する地は、奉天府以北長春に至る中央滿洲にして、製粉事業としては恐らくは奉天府は其中心たるを失はざるべし。奉天府には米國より新機械を輸入して製粉する清國人もあり、清國人は製粉場を磨坊と稱し、現今奉天府内の磨坊は約六百組ありて、毎組一箇年凡そ三百五十石奉天の一石は我一石二斗三升の小麥を製粉するを以て、同市に於ける一箇年の製粉總數は約二十一萬石、此價額約百八十萬兩なり。而して此等の莫大なる數量は殆んど全く奉天府民の消費する所にして、他に少しも輸出するの要を見ず、何となれば磨坊の業は到る處に行はれ、鐵嶺の如きは四百組、營口又三百組を下らずして、各市邑多少に拘はらず製粉場ありて、其管内の消費に供すべければなり。今製粉事業に就き其製造方法を陳べんに、小麥は粉碎する以前に於て、塵埃砂石等を除去する爲め先づ之を洗滌す。其法直徑四尺計りの平釜中に淡水を滿たし之に小麥を入れ塵埃の水面に浮上すを見て之を除去し、次に熊手狀の器具を以て能く攪拌し、後ち抄出して水分を滴下し日に乾す。其後更に篩に掛け粒張りの悪しきもの若くは砂石等を篩過し、之を臼中に運びて粉碎す。一たび粉碎せるものは篩

を通過せしめ一番粉を採取し、殘粉は再び臼に運びて粉碎し、斯の如く反覆粉碎すること五回に及びて止み、茲に全く滓渣のみと化す。操業は規模の大小により之を分て組とす。就中二組のもの最も廣く行はる、即ち人夫四人、驢馬十一頭、及び臼、篩箱、各一臺にして、驢馬は臼に大なる梓木を附け之を牽かしひるなり。而して此人數及び馬頭を二分し、一半は晝間、一半は夜間就業せしむ。而して二組の磨坊に要する資本金は約二千兩にして、内約八百兩は家畜及び器具に要する固定資本と爲り、残り一千二百兩は流動資本として使用さる。流動資本は原料小麥の買入、家畜の飼養料、職工賃等に使用するものにして、今一箇年の製造日數を三百日と假定せば、一晝夜二石五斗の小麥を使用するを以て、其買入價額二十兩一石平均八兩なるが故に、三百日間にて七百五十石金六千兩となる。前記流動資金一千二百兩の内二百兩を以て家畜の飼養及職工賃等の支辨に充つるものなれば、原料小麥の買入に流動する資金は一千兩となるを以つて、恰かも一年六回の運轉を爲す勘定なり。而して麥粉の生産分量は原料小麥の良否に依て等差あり、上等小麥にありては我一石より廻百五十六斤、下等品よりは百三十六斤を製し、滓渣は麸子と稱し、重に家畜の飼養に

供せられ、小麦一石より約三斗乃至四斗を産す。麥粉の用途は饅頭、饅餅、麵條等にして、是等の品は我國にありては、間食なれども、彼に於ては主食なる故、其需用額大なる所以なり。滿洲麵と米利堅粉の優劣を見るに、前者の製造は頗る丁寧なる故に清淨にして亦粘質多く、食味美良を以て聞え、後者は色澤純白にして粉末亦微細なるを以て、滿洲麵に優ると雖も、粘力に乏しくして麵條等を造るに適せざる點ありて、互に一得一失を有す。

(四)奉天附近の農地 南方滿洲の土質に就ては、蓋平より南の方大連旅順地方は瘠地なれども、遼陽より奉天に至る間は、なか／＼膏腴の地として知らる。土質は粘質壤土にして、遼陽附近の表土は二尺乃至三尺位、奉天附近の表土は一尺位なり。表土の下層は河の砂の如きものなるを以て、植物の耕作に適す。故に高粱、玉蜀黍などを毎年連作するも、土地瘠薄とならず、肥料は牛馬糞を少許づゝ散布するのみなり。而して此地方にては一作のみ播種するが、之は必要上高粱若くは玉蜀黍を一作づゝ作るにあるものにして、樹木の燃料殆んど皆無なる故に、土民は是等を耕作して食物を得ると共に、燃料を得ざるべからざるを以て、一舉兩得の植物を植栽する

なり。而して種子は食物となり、莖幹は牛馬の糧食と燃料とに供す。農具は頗る單純なり。鋤、唐鍬、大鎌位のものにして、牛馬耕の時には夫れに相應すべき鋤ある位に止まる。耕作地の廣漠たるには、驚く計りにして、畦の長さ四五町位もありて、一枚の耕地三町乃至五町に及ぶもの敢て珍らしからず。彼等は播種後耕耘せざれども、雜草は餘り蔓らず、思ふに嚴寒の爲め、其種を枯らすものならん。又作物中には陸稻の播種されあるを見るも、我國に比し劣ること數等にして、水田は二三箇所あれども、殆んど云ふに足らず。之に關しては盛夏の候に及んで、三尺位の深き井戸の水にても冷水、氷の如くなるを以て、稻根をして充分成長せしめざるものならん。

(五)重要物産の種類 重要物産の第一に位すべきものは、大豆及び豆粕とす。毎年此地より輸出する大豆は三十萬石に上り、皆冬期車運して此地に至り、問屋に托して鬻賣す。其間屋合せて三十餘戸あり、又大豆を壓搾して油を取り、粕を以て豆餅を製する油房二十餘家あり、是等は皆富豪の經營にかゝる。皮類は北部なる三姓、伯都訥、蒙古地方より聚集するもの少からず。皮舖は百廿餘戸あり、皮類は大別して細貨、粗貨の二種とし、前者は貂、栗鼠、銀鼠、灰鼠、獺の如き上等皮にして、後者は狐狸、山羊

七六

犬皮其他敷皮類なり、寒氣強烈なる滿洲地方にては衣服の裏に毛皮を附けて防寒に供するもの甚だ多く、皮料は貧富に依り其度を異にすれども、通例用ひらるゝものは羊皮、狐皮、狸皮の類なり、而して清國は古へより養豚事業の甚だ盛んなりしに拘はらず、猪鬃は從來之を利用するの道を知らざりしが、今より二十餘年前英國宣教師が奉天に來り、此猪鬃の甚だ價值あるを教へたれば、爾來奉天に於ける猪鬃製造業は漸次發達し、今や滿洲に於ける最も有力なる輸出品の一とはなるに至れり、而も此の輸出品は特に奉天に於てのみ行はれつゝあり、實に奉天は滿洲に於ける猪鬃の集散市場にして、其年々集り來る總額は約百萬斤餘に上る、之が重なる産地は奉天を始めとし、吉林、卜魁、阿什河、寬城子、圍林子、賓州等なり、目下英國宣教師の指導により、猪鬃を買蒐し輸出向に其長短の撰別取揃を業とするもの十ヶ所あり、毎所三四十人の職工を使用し、年々精撰の上輸出するもの毎箱百卅三封度、則ち百斤入にして總額七八百箱乃至一千箱餘ありと、但し右は主として英國の需用に應ずるのみにて、若し他に需用あるに於ては此以上幾何にても供給し得る餘裕あり、出貨期節は毎年十一月より翌年二月迄にして、其相場は頂上青猪鬃百斤二十兩乃至

九十兩、混猪鬃百斤七十兩乃至二十兩なり、又馬毛の産出も少なからず、相場は頂上頭尖白馬尾百斤百二十兩乃至九十兩、二尖白馬尾同じく七十五兩乃至五十五兩、頭尖黑馬尾百斤八十兩乃至六十兩、二尖黑馬尾五十兩乃至四十兩位なり。

(六)金融情况

奉天府の金融は營口と略ぼ相似たり、過爐銀とは云はざるも、過碼なる無形の信用賣買行はれ、票莊及び錢舖と稱する二個の銀行的の機關に依り、圓滑に調和せられつゝあり、票莊の營業は重に錢舖に向て貸付金を爲し、又兼て個人の預金並に爲替等を取扱ふ、其貸附金利は期限の長短信用の厚薄に由り多少の差あれども、一年七八分位なり、預金は此地の決算期たる十二月三十日以後に非ざれば引出さざる約束あるものに限り、利子を附す、其額は年四五分なり、錢舖は票莊及び個人の間中に立て、奉天商業界の爲に金融を調和する最有力の機關にして、貸金は過半票莊より七八分の利子を仕拂ひて借出し、更に之を月一分若くは一分四五厘にて個人に轉貸す、然れども錢票にて借入高二三票に上る時は月を按して八九厘を收むることあり、一票は額面一萬吊文なり、決算期日は一年間唯十二月三十日の一回のみにて、此時は票莊錢舖は勿論、此等と關係ある個人は最も精確に決算



を結了する義務あり、當舗は從來百餘軒ありしも、日清戦争、北清事變等屢々の變亂に逢ひ、營業主は何れも逃遁したる結果、奉天將軍は奉天公議會と商議し、二萬兩の株を募り、公議當舗なるものを設くるに至れり、貸出金は錢票を以てし、通常十吊文の貨物に對し、日用品なれば八吊文乃至六吊文を貸與へ、其他の品は貸金額甚だ少なし、期限は表面は二十六箇月なれども、三十箇月に延期することを得、利子は一箇月二分の割合なり。

(七) 通貨及び取引習慣 奉天に於て流通する貨幣は、營口と同じく元寶銀、一元銀貨、小銀貨、銅錢及び外國紙幣の五種なり。一元銀貨の銅錢に對する相場は、知府の布告に依て定まり、決して市中に於て隨意變動せしむるを許さず、又錢票は兌換紙幣に類する物にして、其額一吊文より一萬吊文迄種々あり、票莊若くは錢舖より發行して市場に流通せしむ。此錢票は素と銅錢の不足を補ふ爲め發行したるなり、貨幣に對する兩替の割合は、日々變動して高低定まらざるが、其一例を擧ぐれば、(一)元寶銀一兩に對し銅錢九吊九百三成、(二)銀貨一元に對し銅錢六吊二百文、(三)墨銀百弗に對し小銀貨百十元位なり、爲替も亦た其相場時々變動して一定せざるも、大抵

奉天銀千兩に對し北京銀千六七十兩、同じく上海銀は千四五十兩、同じく營口銀九百九十乃至八十五兩の範圍なり、又營口奉天間の爲替は至極巧みなる方法行はる。即ち奉天より營口に爲替を取組むには、逆爲替を用ふるもの多し、其相場は奉天銀千七十兩に付營口過爐銀千九十五兩内外なりとす、信用取引の行はるゝと盛んなり、貨物の取引は外來のものに非ざれば現金取引を爲さずして、之が媒介の任に當るは錢舖なり、貨物の標準は總て銅錢を以て表示し、元寶銀及び銀貨の銅錢に對する相場は時々變動して、貨物取引に不便少なからざるを以て、過碼なる信用取引を爲し、此の不便を免がる、過碼は營口に於ける過爐銀と稍々相似たるものなり、又問屋ありて貨物の販賣若くは買付の委託を受くること、他の市邑に於けると同じ、問屋の手數料は原價の幾分を收むれども、其の割合は貨物の種類に依り等差あり、例へば販賣を委託する時は反物類は二分、燐寸、烟草、綿糸其他雜貨は三分の手數料を取り、購買の委託なれば雜貨反物類は一分、豆餅一片に付二成、大豆一斗に付五成の手數料を要求するが如し。

(八) 運輸交通 運輸交通に關する一般の状態を陳ぶれば、奉天より營口に到る

貨物は舟楫の便を藉るも十一月より翌年中旬までは河水氷結するを以て陸路に頼る汽車を利用するものは目下尙ほ甚だ稀れなり奉天より各地に至る貨物の到着日数を示せば左の如し。

地名	距離	水路	陸路	
			冬季	夏季
營口	三百六十清里	四日	五日	七日
牛莊	二百七十清里	三日	四日	六日
海城	二百四十清里	三日	四日	六日
遼陽	二百二十清里	二日半	三日	五日
煙臺	六十五清里	二日	一日半	二日半
鐵嶺	百三十清里	二日	二日半	
開原	二百四十五清里	二日	三日	五日
新民	二百清里	二日	二日半	四日
長春	六百九十清里	十日	十四日	

貨物は運送間屋の手に依て運輸せらる。而して陸運に當るを車房と云ひ海運を船房と稱す然れども水陸兼業する者多きを以て通常之を車頭房子と稱す今此間屋の所屬に係る船舶車輛の數を聞くに左の如し。

手船	大五十石積(一萬八千斤) 小四十石積(一萬三千斤)	五百隻
汽船	約二萬八千斤積	百二十隻

滿 韓 の 官 源

車 輛

冬天積炭大五千斤、中二千斤、小旅客用

千七八百輛

保險料は元寶銀一個に付三吊文、貨物は元價に準じ、大抵百兩に付四吊文位なり。又奉天營口間に於ける重なる貨物の運賃は左の如し。

品名	單位	水路	陸路
大豆	一石	六吊文乃至九吊文	九吊文乃至十二吊文
豆餅	一片	一吊二百文乃至二吊五百文	一吊五百文乃至三吊文
豆油	一擔	三吊五百文乃至五吊文	六吊文乃至七吊五百文
雜貨	百斤	四吊文乃至六吊文	七吊文乃至八吊文

(九度量衡の種類) 奉天に於て用ひらるる所の平は、蘇法平にして、奉天銀百兩を各地の平と比較すれば。

營口銀	北京銀	遼陽銀	長春銀	芝罘銀	海城銀
九十九兩八錢	百二兩一錢	九十八兩	百五兩四錢	九十九兩二錢	九十九兩

衡は營口秤より大にして、營口百斤は奉天秤九十八斤に相當し、又斗量は奉天の一斗を各地と比較すれば。

營口斗	長春斗	鐵嶺斗	海城斗	開原斗	蓋平斗
九升	八升	九升五合	九升五合	九升	九升五合

尺度は大別して洋尺、截尺、下加尺、絲尺、木尺の五種あり、木尺は大工左官の用ふる。

滿 韓 の 官 源

ものにして、其他は反物類を度るに用ふ、各種尺を截尺と比較する時は、洋尺一尺は截尺の二尺六寸、加尺一尺は截尺の一尺八寸、絲尺一尺は截尺の九寸、木尺一尺は截尺の八寸強に當る。

(十)百億圓(?)の炭礦

奉天の實業状態を今や陳べ終るに當つて、尙ほ一の重要視せざるべからざる一事は、我御用新聞に依て百億圓の價值ありと、叫ばしめたる撫順の炭礦なりとす。此炭礦は露國の着手經營せしものなりしが、日露戦争に依て我戦利品となりしは皆人の知る處にして、其果して百億圓の價值ありや否やは、暫く爰には別問題として預り置くべし。撫順附近に於て露人の採炭に着手せしは、北清事變以後にして、陽に名を支那人に藉り陰に清國大官を繋絡して、其實は自ら盛に之を經營し遂に實權を握るに至りたるものなり。今現に開坑されあるは千金寨(撫順の正南約五千米突)楊柏堡(千金寨の正東千五百米突)老虎臺楊柏堡の正東千五百米突)の三箇所にして、坑數新舊大小約四十箇所あり。露人經營時代に於ける毎日の出炭量最も多き時は、千金寨六十萬斤、楊柏堡五十萬斤、老虎臺四十萬斤にして、卅七年五月より同十一月に至る八箇月間の採炭總量は約四億萬斤に上りたりと云

ふ、又撫順の煤田は數里に亘り、炭層は既に知られたるもの二層あり、地域に依り厚さ差違あるも、下層は五尺以上、上層は約五十尺あり、下層炭は上層炭に比すれば、其質稍々劣れるも亦粘着力を有し、上層炭は其質頗る堅緻なるも、有煙炭にして而も層中裂面を具有するを以て、其採掘最も容易なり、適當に採掘する時は、少なくとも七八割の塊炭を得べく、瓦斯の含有量に富み、且つ相當の粘着を帯び、火焰長くして最も汽鑪用に適し、灰分硫黄分甚だ少量にして、特に灰色は純白なり。露人經營當時に在りて採炭せる坑口は老虎臺、楊柏堡、千金寨の三地に分在し、其數三十九箇所あり。

第五 鐵 嶺 (遼河河畔の大市場)

(一)大豆の集散市場 鐵嶺は遼河の南三清里、奉天の北百三十清里、營口を距る四百九十清里の處にありて、古來遼河の水域は此地を以て北端とし、北方滿洲より遼東灣に輸出する貨物は、此處まで陸送せられ、更に水路に轉換せらるゝ地なりしを以て、百貨輻輳の都市なりしが、今より廿餘年前更に其上流なる通江子に埠頭を開き、船隻の開駛を准可せし以來、多少其繁盛を通江子に奪はれしと雖も、大豆の輸

出及び雜貨の輸入今尙ほ盛にして大豆の集散は滿洲に於ての一大市場とす、人口約三萬、市街甚だ廣大ならざるも、人家稠密にして往來極めて頻繁なり、市内殷富の區を東周及鼓樓西街とし、東關には富裕なる問屋多く、鼓樓西街には洋雜貨店の軒を並ぶるもの多し、露國が南下の政策は、其根據地の一として此處を撰び、而して遼陽に劣らざる大規模の停車場を設け、鐵嶺より北方なる寬城子、吉林及び海拉爾、伯都訥等よりする凡ての貨物を陸運又は水運に依りて此處に輸し、更に鐵道に依りて青泥窪に輸出せんとし、全力を傾注せしも、如何にせん鐵嶺及通江子よりする北滿洲の水産物は、悉く遼河の水運にのみ頼りて依然營口に輸送され、容易に鐵道便を利用するもの之なかりしと雖も、露國の此着眼は、鐵嶺が近くに奉天遼陽等の大市場あるに拘はらず、滿洲に於て如何に重要な土地なるかを推察する料とならむ

(二)大豆の輸送費用 鐵嶺に於ける大豆の集散額は、一年五六十萬石を下らず、其大豆を營口に輸送するには、夏期は船運に依り、冬期は車運を藉る。船運に用ふる所の者は、漕船若くは手船にして、一隻四十石乃至七十石を積載し得べきも、遼河中淺瀬多きと水量の増減甚しきに依り、其積載量の如きも一定せず、航行の際には萬

一の危険に備へんが爲め五隻乃至十隻聯絡して流下するを常とす、馬車は五頭乃至八頭挽にして冬期は約四千斤、夏期は二千餘斤を載積して送る。左に營口に到る大豆百石に對する輸出雜費を、船便及び汽車便に區別して比較せん、但し汽車便は日露戰前に於ける東清鐵道に依るものと知るべし。

項目	汽車便	船便
運賃(營口まで)	露貨百九十三圓	同
運賃(鐵嶺街より積込地まで)	同 四百四十圓	同 四百四十圓
釐金稅	同 二十九圓	同 二十九圓
斗量稅	同 九圓	同 九圓
支應局納金	同 十圓	同 十圓
船米(高粱米二斗)	同 八圓	同 八圓
保險料	同 八圓	同 八圓
問屋手数料其他	同 十五圓	同 十五圓
合計	千百八十一圓(露貨換算)	千八百七十圓

大豆の現金買入に對し問屋の收むる所のものは、一斗に付手数料一成文及び堆用と稱して五成文を要し、冬期中に於ける定期買入は一斗に付手数料一成文を收むるのみにして、堆用を要せざるも、陰曆七月一日を過ぎて尙ほ賣放たざる時は、堆

用五成文を要求す、堆用は倉敷料其他を含むものなり、即ち大豆一斗の買入に對し六成文の諸掛を要し、例へば一斗の相場三吊六百文なれば、三吊六百六成文の買入となり、一石は三十六吊六百文と爲る割合なり。

三間屋及び金融 他方より鐵嶺に來る所の商賈は間屋若くは取引ある商店に内寓し、貨物の賣買を委託するを常とし、間屋に寓するものは食料及び雜費として、一人一日二十仙内外を與ふ、然れども重なる商店に寓し、年中多額の賣買を委託する者は、單に一箇年中に於ける正月端午仲秋の三期に、多少の金員を、使用人に賞錢として給付するに過ぎず、取引は重に現金にして、奉天營口の如く過爐銀若くは過碼行はれず、然し信用あらば往々定期仕拂を承諾することあり、定期支拂は三箇月を以て期限と爲す、此場合に於ける賣價は年一割乃至一割二分の利子を加へて計算するを以て、現金賣に比し價格高直となる譯合なり、而して商業繁劇の季は春秋二期にして、此時は大豆を内地より自ら運搬して此地に至り、其歸荷として、雜貨を買入るゝを以て商業繁盛にして、卸賣の如きは其額却て奉天府の上にありと云ふ、鐵嶺の金融は奉天營口の如く其機關整備せず、僅に少數の錢舖及び當舖あるの

み、鐵嶺營口間の送金爲替は凡て小銀貨にて取組み、其爲替相場も一定せざれども、通常小銀貨百元に對し爲替料四十錢乃至六十錢の範圍なりとす、流通貨幣は元寶銀、銀貨、銅錢、錢票の四種にして、此地には元寶銀即ち馬蹄銀を鑄造する銀爐なく、流通する元寶銀は重に營口銀、吉林銀なり、一元銀貨の流通は極めて少なくして、小銀貨専ら流通す、銅錢は八吊文を一束とし、一束文は銅錢百六十個、一吊文は十六個、一成文は一個六を以て計算す、錢舖の發行する錢票も、其最高額は一千吊文を上らず、

### 第六 開 原 (古の開元城)

(二)歴史に富める市邑 開原縣城は古に肅慎と稱せし地にして、肅慎の文字は日本の舊史にも屢ば散見する處なり、唐虞以來扶餘國と稱し、又高句麗と曰ふ、今の韓國を會て高麗と呼びしも、其王の此處より起りしに依り、コリアと云ふは其清音にして、コマは倭讀なり、扶餘國の名亦我日本の歴史に出づ、曷昌、契丹、女真を経て明代に至り大に更張して或は府とし、或は州とし、始めは開元の文字を用ゆ、明の大祖洪武二十一年に改めて開原と書す、清廷の北京奠鼎後此地を以て邊境の重鎮とし、

康熙三年縣衙を設けて開原縣と云ひ奉天府に屬せしめたり。開原附近一帶の地は平坦開濶にして東西兩面に屏風を立てし如き山また山の起伏するを見、又清河の流は此地附近に於て各支流と合し、遼河に注ぐ。北すれば一路坦々哈爾濱に達すべく、吉林にも到るべき道路あり。鐵道停車場は市街の左方約一里の南方にあり。人口は鐵嶺に北し殆んど半數位のものにして、日露戰爭中我軍の調査せし處に依れば戸數二千四百九十四、土着人口一萬四千七百七十八人にて、内男八千七百四十三人、女六千零三十五人なりと云ふ。

(二)開原地方の農事 一面の島地にて水田なく、其島地に植ゆる重要なる作物は大麥あり、小麥あり、小麥の一種に火麥あり、大豆あり、小豆あり、小豆の一種に菘豆あり、粟、棉、陸稻、稗、甘藷、芸豆、いんげん豆に類す。馬鈴薯、鴉片煙、西瓜、黃瓜、香瓜、所謂甜瓜にて種類多し。高粱等十五六種を下らず。高粱は一天の島上等の部類にて、約七石を産し、一石の價平年にて四圓前後、外に其黍殼は一般に燃料として需要あり、百捆五六十錢にして、能く八九百捆を産す。此地方にては島五尺四方を一弓とし、四十弓を一畝とし、六畝を一天若くば一日と稱す。但し六畝を一天と稱するは、旗人の所有地

に限り、民人の所有地は、十畝を一天と稱す。而して以上の一天の島の賣買相場は普通三百圓以上、租税は粟三升三合、固より一樣に行かず。小作料十五六圓位、一年の雇人料概算二十圓位に當る。但し之れは平年の相場にして、一天の島は、五人男一日の仕事と定まり居るもの、如し。

### 第七 昌 圖 (産業亦盛大)

(一)盛京北陲の要市 昌圖は盛京省の北陲に位地し、內蒙古境邊門内にある一都邑なり。昌圖附近の地形は波狀をなし、平坦にあらずと雖も、丘阜より丘阜の間は一望開濶なり。市の四圍は繞らずに深嚴なる地隙を以てし、自然の防禦を構成したり。明治卅七年の調査に依れば、戸數一千八百七十九、人口一萬一千五百五十七、之を細別すれば、商舖三百五十六、戶舖人二千四百三十四名、住戶一千五百二十三、戸男女九千一百二十三名にして、昌圖市の地積は方圓十有餘、清里十九頃六十畝なり。市以外東地局、西地局、各五千頃合計一萬頃を有す。一頃は一百畝にして、我が六町二十六步餘、一畝は三百四十弓にして、我が六畝餘、一弓は五尺平方にして、我が七合餘に當

る右の一萬頃は收税を要する耕作地にして、蒙古王の派したる官吏の統ぶる所なり。即ち徵税は一頃五兩五錢の定めとす。一兩は我が一圓四五十錢、一錢は我が十四五錢なれど、時の相場にて多少の變動ありと知るべし。此地より各地に通ずる道路は、鴛鴦樹奉化を経て、懷德及び長春吉林に至るもの、西南に八家子を経て、小塔子法庫門及び通江子に通ずるもの、西北に金家屯、新立屯及び康平縣に通ずるもの、正南に馬千臺門を経て、開原鐵嶺及び奉天に通ずるもの、東方に昌圖停車場に通ずるもの、五道あり。

### 二、滿蒙の貿易市場

昌圖は滿蒙貿易上の要區にして、商況從て活潑なり。此地方の重要物産として數ふべきものは、青麻、胡麻の類にして食用、大麻子、油蔴、午莠子（藥品原料）、黃煙、煙草にして柳子煙、葉煙の二種あり。葉煙は柳子煙より高價、瓜子（食用多く鄭家屯附近に産す）、牛乳（蒙古人の製する物）、元豆、大豆（即ち豆油の原料にて、上海にては牛豆と言ふ、蓋し牛莊より輸出するを以てなり）、面域土製の鉢にして染物用、洗而器及び火鉢に用と、高粱（土人の食料）、豆油、豆餅、豆粕と言ふ、肥料として輸出多量なり）以上十種にして、輸出税を要し、價格に案して納税せしむ。外に燒酒ありと雖も、

道は蒙古王の供祭品に屬するを以て課税せず。

## 第三部 鴨綠江流域地方

滿蒙の國境を劃す鴨綠江は、其源を長白山の南麓に發し、水源より江口に至るまでに總滙する河川は數十の多きに上る。而して其上流たる長白山には、支那大陸に於て双絶と稱せる、大森林を蔽し、流域諸地方には大東溝、安東縣、鳳凰城、九連城、懷仁、寬甸等の諸市邑を包擁し、又對岸なる朝鮮には龍巖浦、義州、昌城、碧潼、楚山、渭原等の諸市府を結合し、共に與に鴨綠江の天恵を頌つ。

### 第一 安東縣（鴨綠江畔の營口）

（一）未來の一大都會 安東縣は鴨綠江畔の營口と稱せらるべき地にして、市街は鴨綠江を遡ること我約五里の上流沿岸に在り。前面江を隔て、韓國義州へは一里にて達し、後は崗陵を負ふ。市街の長さ我二十町幅十餘町にして、戸數二千餘あり。人口は約二萬と稱す。夏時商業繁盛の時期と爲れば、支那本部より多數の勞働者來

集し、人口も激増して十萬に達すれど、冬季結氷の頃に至れば大抵離散して郷里に歸る。安東縣は鴨綠江の流域に含まるゝ各都邑に供給する貨物の入口たると共に、亦是等の地方より輸送し來る物資の吐口にして、恰も遼河に於ける營口と其軌を一にす。而して從來安東縣を経て集散する貨物は芝罘を経由するものなるを以て、商權は凡て芝罘商人の掌中に歸し、安東縣は宛然芝罘の出張所の觀ありしも、明治卅七年來大阪商船會社は時勢に鑑み、大阪より韓國仁川を経て安東縣に至るの新航路を開始するに至りしかば、將來の商勢は一變し芝罘の實權を奪ふて我國に收むるを得るに至るべく、安東縣は實に未來の一大都會なり。

(三)日本人の勢力 此地は韓國方面より鳳凰城を経て遼陽方面に通ずる樞要の地なれば、市街頗る繁盛にして巨萬の富を有せる清商少からず、明治三十七年五月鴨綠江戰鬪後改めて本邦人の來着したる者は、其數三四組の少數に過ぎざりしが、七八月の交より漸次我が商業家の安東縣に入込む者増加し、同十月には普通の在留者のみにても二千餘名の多數に上りたるも、同十一月結氷期に臨み、本邦人多くは一時歸國又は他に轉住するの傾きを生じ、同月二十五日結氷後の人口は約千

源 富 の 韓 滿

五百名となり、越えて卅八年に入り四月解氷と共に、本邦人は再び日本内地及び北韓地方より陸續到着し始め、同年六七月の交には在留本邦人約六千名となれり、其後戰局の北進と滿洲各地の一部解放に連れ、遠く遼陽營口方面に移り、或は大連附近に移動する者日に増加し、九月末の在住者は日本人約四千、清國人約一萬三千人と爲れり、而して安東縣に於ける日本人は殆んど萬屋的の營業にして、各種兼業の者少からざるも、其中五軒以上の同業を有する者は左の如し。

大工業	二四六	飲食物及飲食店	二三〇	雜貨商	一六二	木挽業	一五三
菓子商	七〇	遊戯店	六八	人力車夫	三五	藥種及販賣業	三三
理髮業	三四	魚類商	二九	旅人宿及下宿	二四	吳服商	二二
製粉業	二〇	時計商	一四	遊藝稼業	一四	左官職	一一
酒類商	一〇	洗濯業	一〇	牛肉及鶏肉業	八	鮎湯商	八
和洋服販賣業	八	寫真業	七	陶器商	七	代書人	七
辦炭商	七	牛馬賣買業	七	川塗	七	湯屋	六
紙煙業	六	豆腐商	五	米穀商	五	貿易商	五

前記大工左官飲食店及類似者比較的多き事實は、一面に安東縣將來の多望を示すに相違なく、又昨今に於ては、安東縣の新市街は盛んに家屋を建設し、或は永住の希望を以て諸般の經營に従事する者あり、中には當地方に集合する大豆其他の雜木

源 富 の 韓 滿



山藪又は豆粕等を買出し、直接是を本邦に輸出、或は安東縣に於ける重要輸入品たる麥粉、砂糖、金巾等を本邦より直輸入し、是を清韓兩國人に販賣せんとする者あり、未だ充分なる効果を顯はさざるも、將來は前記商品に依り必らず、有望なる貿易地となること疑ひなし。

三、日本人の居住地

安東縣に於て日本人の居住する地區は、大別して二とす。一は舊市街の一部即ち大和町と稱する小區域にして、鴨綠江の上流にあり。一は舊市街の西方に接續する新市街なるものなり。大和町は最初在留者の一團より組織せる日本人會なるものあり、一手に清國人より此小區域を借受け、是を當時の在住者に貸附けたるもの、由にて、方今此方面に居住する本邦實業家の内には、永住の目的を以て土着せる者比較的多きが如し。新市街は北方舊市街に接し、鴨綠江に沿ひ、西南六道溝に達し、其面積約二百萬坪あり、内鐵道用地等を差引き、普通市街に適すべき土地にても、約七十五萬坪あり、貸下の方法としては、最初一坪に付金五錢十錢廿錢と言ふが如く區々の地料を上納する慣例なりしが、卅八年十月以降是を改正し、土地借受者は最初一坪に付金三十錢を納め、其後は一坪毎に毎月一錢の地料

を納めしむることに改定せり、而して安東縣在留帝國臣民にして、營業に従事せんとする者は、左の等級に應じ各別に營業税を賦課徴收せらる。

一等	營業資本額	銀拾萬圓以上	營業税	年銀參百六拾圓
二等	同	銀壹萬圓以上	同	銀壹百貳拾圓
三等	同	銀五千圓以上	同	銀六拾圓
四等	同	銀壹千圓以上	同	銀參拾圓
五等	同	銀五百圓以上	同	銀貳拾圓
六等	同	銀壹百圓以上	同	銀拾圓
七等	同	銀壹百圓未満	同	銀參圓

營業税は毎年四月一日及十月一日の兩度に、其半額を前納するものにして、兼業を爲すものは其兼業の等級に依り、營業税を追加徴收せらる、仕組なり、最も市場露店式營業貸席料理店營業者は別に定むる處に依り營業税を納付するものとせり、即ち左の如し

料理店營業税率

一等	客席總座數十五座數以上にして一等と認むべきもの	毎月	銀四圓
二等	同上十五座數以下	同	銀叁圓
三等	同上十座數以下	同	銀貳圓

貸席營業稅率 (貸席數營業)

一等	客席總數四十疊數以上にして一等と認むべきもの	每月	銀六圓
二等	同二十五疊數以上	同	銀五圓
三等	同二十五疊數以下	同	銀四圓

特種婦女營業稅 (貸席料理店及飲食店に於ける女傭人に課す)

酌婦	月額	銀四圓	酌婦	月額	銀參圓
仲居	同	銀壹圓	下婢	同	銀壹圓

(四) 商品の供給區域

安東縣より貨物を供給する區域は、割合に廣大にして、西は鳳凰城及び岫巖地方に至り、北は鴨綠江の上流懷仁通化と韓國義州楚山方面に涉る清韓一帯の地を始めとし、下流龍岩浦安州以北各地に於ては、貨物の需用は皆な多少安東縣に其供給を仰ぐものゝ如し、殊に鴨綠江に於ける貨物は、皆一應安東縣に集る慣例なりと言へば、京義線が當地に於て滿洲内地なる東清鐵道と連絡せる今日に於ては、安東縣は必ず鴨綠江域の大都會となるや必せり、只だ目下の處清商の間に割込み、本邦實業家の施設經營を爲すの困難は、到底平壤鎮南浦の比に非るべし、何となれば安東縣に於ける金利は、第一銀行當座借越利子にても、百圓に付

日歩四錢五厘乃至五錢を唱へ、是れを大同江岸に於ける鎮南浦港に比すれば約一錢高に當る而已ならず、第一銀行は未だ本邦人に對し、充分なる融通を爲すの運びに至らず、又々一方には安東縣には未だ倉庫の借入るべきもの少く、大豆の如き舟渡の姿なれば、經驗ある貿易業者に非れば容易に着手し難き事情あり、此地は元と長白山より伐採し來たる材木を取引する大市場なりしが、今や材木市場は更に其下流なる大東溝に移されたるを以て、材木市場としては僅に雜字號筏の賣買あるに過ぎず、商品の輸入は綿絲、綿布其他の雜貨類にして、就中食鹽、金巾、木綿、燐寸の如きは非常なる勢力を有す、支那人は日本人より鹽を買ふことを禁せられ居る故に主として朝鮮方面に販賣せらる。抑も清國に於ける食鹽の輸入税は頗る高額にして、清國政府の一財源となし居れるが、之に反し日本人の安東縣に於ける食鹽輸入は無税なるを以て、價格に差違を生じ、從て支那人が日本人より鹽を買ふ時は、清國の財源著しく減する故之を禁するなるが、若し他日邦人より支那人に食鹽を販賣し得るに至らば、此業の前途頗る見るべきものあり、而して此食鹽は重に貔子窩、華園溝地方に於て製する荒鹽なるが、之を精製せば良好の食鹽を得るを以て、日本人

中には安東縣に再製場設置の計畫あり。

(五)市場と商業協會 安東縣舊軍政署は、新市街繁策の一として、舊市街を去る二三丁の地點に一の魚鳥獸肉蔬菜市場を設け、是に隣接する一區域に假家屋敷地を設け、兩者相待て此方面に日清兩國商民の吸収を計りたるものにして、其成績特に著るしく且つ其敷地は各約三千五百坪あり、此一區域内に野菜其他の日用品を始め、小雜貨興行物の類に至る迄配合散布せられ、恰も清國各港に於ける市場を見るが如く、日々雜沓繁榮を極めおれり、此市場及假家屋敷地取締規則に依るに、本市場及び假家屋敷地は、日本人及び清國人とも其幾分を借受け營業することを得、市場内にて賣買取引を爲さんとする者及び露店式營業者(假家屋敷地にて營業するもの)は共に、鑑札料として銀貳圓を市場取締所に納め、市場鑑札を受け、別に市場場代金又は假家屋敷地借料として、毎月一日左の金額を市場取締所に前納するものとす。

場代金	一區劃	一ヶ月銀五圓
借地料	一區劃	一ヶ月銀五十錢

次に又我軍政署の設置せらるゝや、安東縣在住者は清商と共に施政準備會な

るものを新設し、日清兩國人の別なく、寄附金の名義を以て一種の營業税を徴收し、韓國各港に於ける日本居留民役所の如き事務を執行し來りたるが、卅八年七月に至り在留本邦人は更らに安東縣日本人會を立つると共に、安東縣商業協會なるものを組織したり、本協會は將來安東縣に於ける日本人商業會議所の基礎となるべきものにして、一方新市街在留者の爲め便益の方法を講究すると共に、鴨綠江流域の利源開發紹介の任務を盡さんとする由にして、其會員としては安東縣在留者の重なる者を包含するが如くなれば、將來韓國各地に於ける日本商業會議所と相待ち、本邦實業家の参考となるべき資料を供するに至るべし。

(六)金融事情 安東縣に於ける商業の繁盛なる時期は、清曆三月より九月まで即ち江の解氷後より結氷前までなり、十月より二月までは商人も勞働者も大抵歸郷するを以て、商況従つて閑散なり、取引は大概現金にして、又問屋の手數料は賣主より賣價の百分の三を徴收す、此地に於ける錢舖即ち支那銀行は數軒ありて主として芝罘と取引せり、目下は我第一銀行出張所ありて中央金庫事務をも取扱ひ居れり、支那人にして大取引を爲すもの、中には清國貨幣を用ふるも、其他の商人は

總て日本通貨を以て取引し、日本貨幣の流通は非常に旺盛なり、次に本邦人の内地に送金する爲替は毎月平均五六萬圓にして、支那人の送金爲替を依頼し來たる者も少からず、支那人の送金先は主に芝罘、上海、朝鮮地方にして日本に送るものは五六萬圓なれど、其他は一ヶ月八拾萬圓に上る。是等は言ふ迄もなく商品仕入の資金なり、又此地の兩相場は芝罘相場を標準として居るも、我軍の占領當時は多少の變動ありて三十七年末頃六十四五兩を往來したるに、卅八年五六月頃は七十二三兩を上下せり、故に兩相場の昂騰せし時は金巾及び紡績糸の如きは産地よりも却て廉價なることあり。

(七)鴨綠江の漁業 鴨綠江の漁業は支那人朝鮮人のみの手に依て従事せられしが、最近に至り我内地より出稼する漁民少からず、今後は日清韓三國漁民の競争場たるべし。鴨綠江の魚類は鱈、鯨、鯊、鰻、鮫、白魚等最も多く、殊に五月頃は白魚の漁期にて、毎朝江岸に出づれば二間乃至三間位の小舟に白魚を満載し居るもの數十隻に達す。此白魚は三四寸大のものにして、内地にては容易に見るを得ざる肥大のものなり、而かも一升の價格僅かに我四五錢に過ぎず、又以て鴨綠江の白魚に富め

るを知るに足らん、尤も白魚の漁期は四五頃を限りとし、何時にても獲れるものにあらず、概して解氷時期は鱈、鯨、鯊、鰻、鮫、多し、四月初より白魚、五六月が鱈、夫れより鰻と云ふ順序なり、下流龍巖浦附近にはカナガシラ、ニベ等の漁獲多く、海上に出づれば鱈、鯨、其他各種の魚類多し、四五月頃は上流より解氷の冷水流れ來たること多きを以て、此等は沿岸に近づかずと雖も、五六月頃より七八月にかけては多數の漁獲を見るを例とす。

(八)鴨綠江附近の農業 鴨綠江地方は關東半島の如き瘠土にあらず、土地の生産力は一天(一天は六畝、一畝は二百四十歩)に付、平年小麥二三石、高粱六七石、粟四五石にして、一天の地價十兩乃至二三十兩、小麥賣價一石八九吊、高粱賣價一石七八吊、粟一石十四吊なりと云ふを見て、農業の多望なるや知らるべし。此地方にては稻米を作らず、土民の常食は包米即ち玉蜀黍、麥、小米即ち粟、高粱等なり、土質及び氣候は米を産出するに適せざるにあらずして、土民が之を作らざるなり、彼等は一年三回僅かに米を喰ふ、而して其米は朝鮮若くは上海より輸入す、故に若し甸子を開墾して水田を作らば、將來滿洲の産物に一新物を加ふることなるべし、現に蘇子河流

城の陵街より東五里の地にては、韓人を招き水田に従事せしむるあり、又興京より新民堡に至る間にも韓農夫の水田を耕すあり、是等は清國人の招きに應じ移住せるものにして、土民に水田耕作法を教ゆ、又安東縣と鳳凰城の間なる湯山城附近には少許の水田存在す、之は日清戦争の當時我が教へたる遺物なりと傳ふ、雜穀類は他地方と同じく粟、稷、高粱、玉蜀黍、大小麥、豆等を産し、麻も多額に産すれども其質の稍粗なるは憾みなり、又此地方の山岳には藥草多く人參、百合、桔梗、芍藥、金綿菜、耳茯苓、五味子、澤蘭、甘草、細辛等にして、人參は殊に良質にして價貴し、又山藟を産出する重なる地方は石柱子、夾皮溝、秋果碧、大荒溝、小荒溝、庫倉溝、白菜地、關門拉子、太平哨、萬寶蓋子、大青溝、碾子溝、混江口等にして、石柱子附近のみにても毎年二萬五千餘條を産す、一籠は一十個入りなり、其市場に出づる時期は春藟は六月十五日、秋藟は九月十五日を以て例とし、皆安東縣を絶て芝罘に送らる、阿片の原料たる罌粟畑は諸所にあり、六月下旬は花汁採取の時にして、滿開紫白紅等の美花の間に半身を現して熱心に採取する滿洲婦女を見るは、恰も我宇治の茶摘の如し。

▲九鴨綠江流域の鑛業 ▲鴨綠江流域に位置する通化及び懷仁の兩縣は、由來金

銀鑛に富むを以て名あり、其所在地は左の如し。

▲通化縣所屬

- |                                  |                        |
|----------------------------------|------------------------|
| 大廟溝 (通化の南十五清里) 金銀                | 小廟溝 (大廟溝の東十清里) 銀       |
| 葦沙河 (通化の南四十清里) 金                 | 報馬川 (葦沙河の西廿清里) 金       |
| 霸王槽 (報馬川の西二十清里) 銀                | 大梨樹溝 (霸王槽の東北二十清里) 金    |
| 通天溝 (通化の西八十清里) 砂金                | 崗山二道溝 (通天溝の南十清里) 砂金    |
| 南崗山嶺 (二道溝の南廿清里) 銀及茶晶             | 富爾江 (南崗山嶺の西三十清里) 金     |
| (以上は通化縣の西南界にあるもの)                |                        |
| 三合頂 (通化縣の北東約百五十清里) 金             | 大灘平 (三合頂の東北十清里) 金      |
| 小灘平 (三合頂の東南十清里) 銀                | 半藏河 (三合頂の西三十清里) 炭礦     |
| 仙人溝 (游龍の西南四十清里) 炭礦               |                        |
| (以上は通化縣の北界、海龍府との管轄界にあり、尙探掘せぬ處多し) |                        |
| 林子頭 (鴨綠江の東二十清里) 金                | 寶聚泉 (林子頭の東六十清里) 金      |
| 帽兒山頭道溝 (寶聚泉の東南廿清里) 砂金            | 同 二道溝 (鴨綠江の北岸二十餘清里) 砂金 |

同 三道溝 (二道溝の北東廿清里) 砂金  
 同 六道溝 (四道溝の東南三十清里) 鐵  
 四道江 (通化の東北四十清里) 炭礦  
 (以上は通化縣の東界、四五道江の外は皆鴨綠江の北岸に在り、各礦所在の溝身長は約百餘清里乃至三百清里に達するといふ)

懷仁縣所屬

老 黑 山 (懷仁縣の南東百清里混江と鴨綠江の合流點西北二十清里) 金  
 老爺嶺三道溝 (瀋陽嶺の北東四十餘清里鴨綠江の北五十清里) 炭礦  
 (以上は懷仁縣の東南界、鴨綠江の沿岸にあるもの)  
 大 雅 河 (懷仁縣の西四十清里) 石棉礦  
 凉水泉子 (懷仁縣と鳳凰縣の界城) 銀 (但し船分多し)  
 (以上は懷仁縣の西界にあるもの)  
 响 水 河 (懷仁縣の北七十清里) 炭 礦  
 拐 磨 子 (响水河の南東二十五清里) 炭 礦  
 右二縣の嶺山は既に着手したるものあり未だ着手せざるあり、通化縣下崗山二道

溝の金鑛は、清國官衙の直營事業にして採掘三年に亘り、日々工夫二千餘を役使し、毎月得る處の砂金二千匁内外なりしが、馬賊に奪略され、後拳匪の亂と露軍狼藉の爲め、終に中止したりといふ。

第二 大東溝 (我勢力圏内の一盛邑)

(一)材木の最大市場 滿韓の境界たる鴨綠江を遡らんとして、先づ第一に達する市邑を大東溝と爲す。大東溝は安東縣の管轄に屬し、北清一帯に供給する材木の大市场なり。鴨綠江上流の大森林地より伐採し、筏と爲して江を流し來れる材木は、總て大東溝に依て各地に輸販せられ、大東溝は此材木賣買の爲め特設せられたる市場なるを以て、大東溝の生命は一に懸つて、長白山産材木の消長に依つて左右せらるものと云ふべし。大東溝より安東縣へは陸路なれば九十清里、水路なれば百十清里にて達す。大東溝の市街は鴨綠江口に於て幾多の州を爲す部分に於て建設せられ、其市街に接して幾十の支流縦横に疏通し、以て河海の双方へ舟筏を通ずる便を與へ、其市街と海との間にある洲は即ち材木の置場所にして、長さ一里餘幅拾

一〇八  
 敷町あり、此置場は各材木商店の背後に接續して、公設の共同置場なるを以て、何人と雖も自由に使用せられ、一時に數千の筏來集するも少しも狹隘を感ぜざるなり。市街は略東西に長く其延長約我一里、南北に狭く其幅約我拾數町にして戸數一千五六百、人口約一萬と稱すれども、夏時に至れば、山東山西等支那本部の出稼民蟬集するを以て、其數四五萬人に及ぶ。

(二)長白山の伐木事業　大東溝は前述の如く材木市場として特設せられたる都邑なるを以て、先づ其本元とも云ふべき長白山の伐木事業に就て陳ぶる所あらむ。抑も清國の大森林は南に在ては福建、北に在つては長白山脈の天然林の二とす。此滿洲の大森林の廣袤は實に無限にして、其内長白山脈のみにては延長我百餘里、幅二三百里に亘る。長白山の伐木事業とは、即ち此森林に入つて、立木を伐採し之を筏に組立て、鴨綠江を流下して大東溝に搬出する事業なり。而して此事業は少額の資本にて事足り、元木代價を支拂ふに及ばず、人夫の賃錢は成功拂ひの習慣にて、需要者は勞せずして來たる等の便宜あるに加へて、利益の割合は少なくとも五六割、多きは十割十五割に達すと云ふに至ては、我戰捷國民の輕々に看過すべからざる好

事業にあらずや、伐木事業開始に就て用意すべきは、大東溝に於て伐木道具の購求及び人夫の雇入れにして、道具は甚だ簡單のものにて、一筏に要する斧、鋸、鑿、蔴口、即ち抱鉤、鐵環釘、麻繩の類を總括して二十餘圓あれば足る。又人夫は人夫頭一人に付き常用人夫三四名を附すれば、一筏分は作り得らるゝものにして、伐木事業準備時期に至れば、多數の出稼者は大東溝に來つて傭主を俟つ故に、少しも人夫の供給には不便を感せず。此人夫頭は伐木造材等の指揮監督を爲し、兼ねて自からも勞働するなり。而して山地作業は、清曆九月に大東溝を發程して入山し、翌年六月頃歸着するなり。森林に入れば清國政府所有の立木を隨意に伐採し、之に自己の刻印を打込めば即ち其所有に歸するものにして、別に原木代價を支拂ふの要なし。材木の製造方法は人夫頭の能く熟知して指揮する所なるが、之を大別すれば角材、丸太材の二種と、之に特種の造材法を有する車材を加へて三種とす。而して角材及び丸太材は長さ八尺を單位とし之を一節と云ふこと我一間と呼ぶが如し、其二倍三倍のものを連二連三等と稱す。造材終ると共に之を溪流の邊に積置き、水量適當の時を見計ひて流下し本川まで流し、筏に組立つ。

三鴨綠江の筏流し 溪流を流したる材木其本州に入れば、河口に於て筏に組立て、愈よ大東溝に搬出する準備に懸る。筏は普通清曆四月に流下し、六月前後を以て大東溝に着する豫定なるが、筏の構造は造材の種類即ち角材と丸太材とに依て差違あり、今最も多く産出する所の料板を以て構成したる筏の構造を述べれば、一筏の料板木数は大概二百二十本乃至五百五十本より成り、筏の中央には小屋を造りて人夫の居用に供し、其前後には三挺乃至四挺の楫を附して操行に便にす、而して筏乗下げの際は之に要する人夫を上流にて新に備入るゝ者にして、一筏に就て人夫頭一人、人夫五人乃至七人を乗込ましめ、其中より炊事雑用等兼務の者を定む。運材中の危険に就ては、山地に於て立木を伐採したるも未だ筏に組立つるに及ばずして出水の爲め往々流失することあり、流失木の拾集は土人の業にして、其所有主より請求なき時は無論拾得者の所得に歸すれども、若し之が返還を請求する時は不當の報酬を食るを以て、大抵は其儘に放任するを常とす。又鴨綠江を流下するに當て、馬賊又は其他無賴漢の爲に奪掠せらるゝことありと雖も、我日章旗を立てたる者には、皆敬愛の心情を露はして敢て暴行を加ふるものなしと云ふ之れ前に

日清戦争の時に彼等に及ぼしたる我威信の感化力に基くものなるが、今又日露の戦争に於て我國威を一層發揮したる故に彼等の畏敬する、尤もなり。土人の筏業者にして、其掠奪を豫防せん爲め日章旗の樹立を乞ふ者多く、或は一日五弗の借賃を出さんと云ひたる者もありし由なり、而して此鴨綠江を流下する筏に本字號と雜字號の二種あり、前者は同一事業者の手にて構造せられたるものなるを以て、其造材寸法材質等一定し、後者は拾集木等を組合せて作るものなれば、品質寸法等に甚しき異同あり、價格の貴きは無論本字號にして、大東溝に來る筏の多くは、本字號なり。雜字號は安東縣若くは韓國義州に於て賣却せらるゝを常とす。

四材木賣捌方法 筏にして愈よ大東溝に着せば、同地の材木問屋に委託して賣却するなり。材木問屋は行棧と稱し、取引は現金賣買なり。行棧の手數料は賣買價格百圓に付き二圓にて、賣買者双方より其半額宛を支拂ふものとす。若し又相當なる買手なき時は行棧は材木を抵當として相當代金の前貸を爲すことあり。加之材木賣捌に關する一切の用務は行棧にて處辨し、又屋内に多くの客房を設けて取引者の宿泊に供するを以て甚だ便利なり、而して材木を大東溝にて賣拂ふ場合には、



木税局より規定の木税を徴収するを以て、之を原木の獲得代金とも見做すことを得るが、而かも此税金は買手に於て負擔するものなるを以て、伐木業者の方は矢張り何等の痛痒を感ぜざるなり。斯の如く長白山の伐木事業は甚だ有利のものなるが、今之に關する詳細の計算を擧ぐれば

(イ)資本金 一箇の賣場代金一千兩以上に達するものに要する資本金は驚くべき少額にて支辨し得るものにして、即ち之に對する資本金は五百兩以内なるも、實際須要の金額は僅々二百五十兩内外にて足れりとす。是此種の事業は勞力を主とするも其貸金たる管に低廉なるのみならず、其支給上に關しても亦た一種の便法あるに由る。蓋し事業の當初に要するは少額なる器具買入費及び勞働者の衣食費にして、資本金中の大部分を占むる彼の勞銀は、事業終了して貸を貸却したる後に支拂へば可なるを以てなり。  
(ロ)貸金及び給與 人夫は貸金の外尙ほ其食物を給與し、且つ一箇月の中一日及び十五日の兩度に豚肉に焼酒位の品を與へて饗應するを以て常例とす。此外衣服の貸渡を爲す。而して貸金の支拂期日は、貸後にして、只夫れ迄は少許の小遣錢を前貸するに過ぎず。其貸銀額は次項の計算書に詳かなるが、もし貸を流下するに當て、材木を流失したる場合は貸銀を給せざるを以て、彼等は食物のみ給せられて、無賃にて勞働したる結果と爲るなり。  
(ハ)利益の計算 本邦人某が四箇を作する目的を以て作業したる、收支計算を得たれば、茲に掲げて參考とせむ。

(第一)支出總計金壹千五百八十一兩三錢

企業費

- 内 詳
- 一、元木代金 之を要せず
  - 二、人夫頭給料三人分 二百十兩但し一人に付七十兩
  - 三、同上臨時雇入同一人分 三十五兩但し賃乘人夫頭として雇入れ火東海邊の貸金
  - 四、人夫給料十五人分 六百七十五兩 但し一人平均一ヶ月四兩半とし九月より尙ふ十ヶ月分
  - 五、同上臨時雇入同五人分 百兩但し第三項に同じ一人に付二十兩
  - 六、食料費十八人分 二百七十兩但し一人一ヶ月二兩半として十ヶ月分
  - 七、同上臨時雇入六人分 二十七兩但し一人一ヶ月二兩半とし三ヶ月分
  - 八、饗應費 三十九兩六錢但し一ヶ月二回にて一人分二錢
  - 九、器具代 四十七兩七錢 但し斧五個六兩、鋸四挺八兩文、鋸子五挺十兩文、抱約五個七兩五兩文、鉄環釘十八個十八兩文、麻四百斤二十八兩
  - 十、借牛料 八十四兩但し丸太材案出の爲め三ヶ月六頭借入れ一頭一ヶ月十四兩づゝ
  - 十一、雜費 百兩但し一人に付一ヶ月約五錢の割

(第二)收入總計金貳千八百八十兩

材木賣揚金

但し四箇賣却代金にして料板十一本に付三十二兩の相場にて賣却せり

(第三)差引金壹千貳百九十八兩八錢

純益金

(第四)如上收入支出純益の平均額は左の如し

一 役に付	支 出	七 百 二 十 兩 〇 〇 〇	純 益	三 百 二 十 四 兩 七 〇 〇
一 本に付		一 兩 五 九 五		一 兩 三 二 二

最も此内には資本に對する利子を含まざれども、兎に角一役に付三百九十五兩を投ずれば、三百二十二兩の益金を得、即ち資本金に對し八割二分強の利益を勘定するが、豈に莫大の率にあらざるや。

### 第三 鳳凰城 (滿要街道の用區)

(一)南滿洲の要鎮 鳳凰城は支那本部より滿洲を経て朝鮮義州に行かんとするに當り、甚だ要衝の地位を占むるを以て、古來より清韓の國際上重要視せられ居り、城は草河の岸にありて、鳳凰山を前にし、平野開潤、市街は支那市街中珍らしき程清潔なり、此地より湯山城まで六里、安東縣まで十二里、北東は寨馬集に至るべく、南西は大孤山、北西は遼陽に至り、東は義州に通じ、四通八達之地なり、戸數千七百戸、人口一萬九千、日本人は約三百餘名在留し、日本人會を組織す。

(二)附近の鑛產物 鳳凰城附近に産出する鑛物は、砂金、鐵、石炭の三種なり、砂金

鑛床としては岔路子、弟兄山、四棵楊樹、朱家溝、高官嶺、岳山、香爐溝、また鐵鑛床は、廟溝、弟兄山、炭層は寨馬集、紅旗街等にあり、然れども砂金事業は微々として振はず、主として農事の餘暇に於ける閑事業に屬し、其中稍々見るべきものは朱家溝であるのみ。次に廟溝及び弟兄山ともに磁鐵鑛を産し、前者は今を去る十年前まで、之を本溪湖に送致し、盛に製煉を營みたり、弟兄山鐵鑛は、現に其製煉所を寨馬集及び其附近に有し、銑鐵を溶製して農具を鑄造しつゝ、あり、寨馬集の炭層は、同地の北西方より東方に亘れる山中に約三里の間布行し、其中央部なる平頂山に於て其數最も多く五層を算す。此地日露開戦前までは採掘を營めるも、爾後は休業せり。

### 第四部 松花江及び嫩江 流域地方

松花江は滿洲全域の三分の二を灌溉する巨流にして、其流域は古來より滿洲の倉廩として呼ばる、蓋し地味豊沃にして農作物能く穫るを以てなり、源は長白山に發し、其南なるは落ちて鴨綠江と爲り、北なるは即ち松花江と爲つて吉林府に入る。

伯都訥の北西に於て松花江の受くる嫩江の流れは、伊勒呼里山より來たる大河にして、兩々相俟つて滿洲の中央及び北部の繁榮を資く。滿洲中部及び北部に於ける大都會たる吉林、哈爾濱、長春、齊々哈爾、伯都訥、寧古塔等は孰れも松花江若くは嫩江の本支流に臨んで立つ。

## 第一 吉林 (滿洲の代表的市府)

(一) 吉林省の首府 吉林府は吉林省の首府にして、松花江の左岸にあり、本名を吉林烏拉と稱す。土語吉林は沿ふ烏拉は江の意にして、軍民沿江の一帯に住居するを以て此名あり。土人は又船廠と云ふ。蓋し順治十五年露國の侵略を防がん爲め大に戰船を此處に造りしに由りて名づく。府は遠く長白山を仰ぎ近く松花江を繞ららず。流れに順うて北すれば伯都訥に至るべく、是れより東の方本流を下れば哈爾濱、三姓に達すべく、北の方嫩江を溯れば齊々哈爾、墨爾根に至るべし。道を東に取りて老爺嶺及び長材嶺中の險を越ゆれば、寧古塔、琿春に至るべく、西南は開原、奉天を経て遙に北京に通すべし。清人が稱して三省の要衝を扼し、兩京の屏障を爲すと云

ふもの即ち是れなり。市街頗る華美にして、市價各商賈を通じて殆んど公平を保ち日用必須の器具より奢侈愛翫の末に至るまで悉く辨せざるは無し。木彫彫刻物の奇巧なる種々なる模様を染め出したる製皮や熊羆の皮や、東方山林中より出づる虎豹の皮や、古代模様を織り成せる綿織や、凡そ東方亞細亞人の嗜好すべき物は皆備はれり。就中染皮商店及び家具舗の商店は尤も吾人の視線を惹く。若し夫れ行客一たび市街を訪はば、江上連櫓林の如く、大艇小舸水面を覆ひ正に功を竣りて近く江に泛べられんとする船舶や、將に据付けられんとする龍骨の陸上に算を亂し或は老廢せるジャンクの散在せるを見れば、坐ろに船廠の名に背かざるを覺ゆべし。願ふに吉林は四周佳木異獸を以て充滿せる大森林に圍繞せられ、而して十五萬の府民の大部分が之に資りて自然を利用し、厚生之道を開きつゝあるは、他の滿洲市府が多く單に貨物の集散を以て任ずると異り、其繁榮は徒に農作物を吞吐するに由りて來るものに非ず、亦製造及工業の中心として數百年の歴史を有し、將來大に颺目すべき價値あり。一言以て之を蔽へば吉林は滿洲の代表的市府なり、滿洲特殊の氣象は總て此處に於て發揮せられて餘蘊なし。

（二）日本品の消費情態

輸入貨物は綿絲綿布雜貨等最も有力のものにして、日本製絨布は價格低廉なるを以て賣行き良く、石油は露國産の占むる所なれども、洋傘は皆我製品の占むる所、賣行は原價打に付五圓乃至八圓の安物最も良し、置時計掛時計は日獨品の競争なれども、品質の堅牢なる點に於て、獨逸製は我より優る、陶器類は茶碗、皿、寫真畫の焼付、ある湯呑等の輸入あれども未だ微々たるもの、如し、又煙草、化粧道具、錢入れ、西洋手拭等の景况も甚だ良好なり、此地は附近諸市邑と交通の便多きを以て、荷捌けの甚だ善きに加へて、城内には諸官衙相集り、吏員も亦た少なからざる故に花瓶、其他の裝飾品も長春鐵嶺に比し、非常に賣行多しと云ふ。

（三）名産の麻と煙草

麻は吉林省の一大物産にして、其種類數多ありと雖も、大別して紅柵線麻、二架道子、繩麻、青麻の四種とす、紅柵線麻は東山里より、二架道子は南山里より産出するものにして、繩麻及び青麻は吉林一帯の地に産す、一柵の重量約八九十斤にして、一箇年の産額九百萬斤に上ると云ふ、輸出期節は毎年陰曆八月より十月上旬に至り、此期間取引繁劇を加へ價格の如きも割高なれど、十月末より十一月に至るの間は商勢閑退し、價格亦た低落するを常とす、是故に固より確定せ

滿 韓 の 富 源

る價格を擧げ難しと、雖も、先づ左の如きものなり。

種 類	單 位	平 年	騰 貴 の 時
紅柵線麻	百 斤	二十三吊文	三十七吊八吊文
二架道子	同	十七吊八吊文	二十七吊八吊文
繩 麻	同	六 七 吊 文	十八吊九吊文
青 麻	同	三 四 吊 文	九 吊 文

烟草は滿洲に於ける一大産物なれども、殊に著名なるを吉林産とす、是れ産額の多量にて品質の優等なるに基く、吉林の産烟を南山菸若くは廠菸と稱して、奉天産の東山菸と區別す、又寧古塔附近に産するものは寧古塔烟と唱ふ、吉林産のものは茶褐色を帯び香味最も強く、奉天産の到底及ぶ所にあらず、毎年の輸出額は數拾萬元に上り、各市の商賈買収に従事するもの少からず、輸出先は營口を最とし、奉天之に次ぐ、菸草は五月に植付け十月に收穫す、菸草の栽培は豆及び高粱を植ゆるに比し非常に多くの注意と勢力を費するも収入は豆、高粱の二倍に及ぶ由、而して葉煙草は製法に依り、片子菸及ぶ柳子菸の二種に區別す、前者は葉の完全なるものを、日に晒し、糸を以て穿串して庭に懸け一週間程夜露に沾はしめ、然る後ち數十枚を一把

滿 韓 の 富 源

として賣るもの、後者は葉の破碎せるもの晒乾せざるもの等の混交せるものなり、荷造法は百三四十斤乃至百七十八斤づゝを高粱稈にて編みたる籬内に入れ、麻繩を以て之を縛し、營口に送る。營口にて賣買するには正味の重量を二割掛にて秤るを例とす、例せば百二十斤のものは百斤となるが如し、之れ内地より送り來るものは第一濕氣を含み居ると、雜物の混合及び運搬中の損傷あるを以て、營口より輸出する時は必らず原荷造を解き、右の混合物及び破屑物を除き、改めて蘆製の蓆に包み、二百斤乃至三百斤を以て一包と爲さるべからざるに依る、而して産地より營口に葉煙草を送るは、多く冬期なりとす。

(四)穀物及び藍の産況 農業に於ては滿洲三省中、吉林省を以て泰斗とするが故に、其名産物としては、麻、煙草の外、滿洲全般に於て培養する大豆其他の穀類も、吉林産のもの評判最も良なり。

(一)大豆 其色に依り種々に分つこと滿洲を通じて同じ。

▲黄豆 之を又白眉、金眉、黒肚の三種に區別す。是等の豆は搾油の原料として最も良く、又白眉、金眉の二種は豆腐を製するに恰適す。

▲青豆 は黄豆よりも品質稍劣等にして、多く製油の原料に使用せらる。

▲烏豆 は油を採る外、黍若くは米と混ぜて熟煮し、食料に供せらるゝを常とす。烏豆は又黒豆とも云ふ。又同じ烏豆中にては小烏豆、扁烏豆と稱せらるゝものありて、之は搾油料の外、家畜の養料に用ゆ。

▲其他 は赤小豆、綠豆、芸豆、虹豆、毛豆、扁豆、蠟豆等にして、麥麵の原料焼酎製造用の麹等に使用す。

(二)穀類 の重なるものは、高粱、稷、麥、玉蜀黍、燕麥等なりとす。

▲高粱 に四種あり専ら色澤に依つて區別す。高粱の需用は最も廣くして、收穫法は先づ之を整底より刈りて束と爲し、之を石碾に上せ石槌を以て外皮を剥ぎ、壓殻及び殻皮を分ち去り、其種先は篩又は篩と爲す。家畜の飼養料としては之にて可なれども、食料と爲すには厄に春きて之を絞揚し、其皮糠を去りて冷水にて洗淨し、後釜に投じて約一時間煮熟して飯と爲す。

▲黄米 我國の稷を黄米と稱し、煮熟して飯と爲すの外之を磨きて粉と爲し、又蒸餅として用ふ。

▲麥類 大麥小麥とも多量に産し、殊に吉林省産小麥は品質佳良なるを以て、製粉として廣く販賣せらる。大麥は春て皮糠を去り粉に磨きて菓子を作るに用ひ、又豆と交ぜて酒母を作り、高粱を以て焼酒を製造するに用ふる醸酵料と爲す。

▲玉蜀黍 は我國のものと同じ。

▲燕麥 は粉と爲し燕麥麵を製し又菓子を作る。

(三)藍 藍は我國と同じ、滿洲の藍は乾藍と爲し又は泥藍として販賣す。産地の最も良きは

矢張り吉林省にして、殊に松花江附近のものを第一とす、之が製法は藍草成熱して將さに花を開かんとするの季を待ちて之を根元より刈取り、石灰にて塗りたる密樽に投じて水に浸漬し、又石を以て壓し之を醗酵せしむること約六週日、此日數を過れば藍草を取り出し、則ち密樽中に存する綠色液を汲みて、又他の紅に移し、又他の紅に泥状石灰を製して之に藍汁を投じて攪拌し、綠色液と爲し後ち大なる木甕を以て攪衝すれば、綠色液は漸く變じて濃藍色と爲り終に沈澱物を生ず、乃ち木甕を用ひ之を床上に設置せる巨樽に入れ、澱滓を沈降せしむ。而して藍色の澱滓沈降すれば上澄の液を去り澱滓を集め乾燥して塊状に作る、之を乾藍と云ふ。之を又干きすして其儘防水質の紙にて貼りたる筒に入れて販賣す之れを水藍若くは泥藍と云ふ。

其他の産物には人參は三四斤を、毛鹿紙若くは高麗紙にて包みて雨濕の浸入を防ぎ、之を一小木箱に裝して輸出す、價格は朝鮮産より低廉なるを以て、毎年廣東香港地方にて消費せらるゝもの少なからず、烏拉草は吉林省到る處の山中に産し、外見我國の茅に類似するも、其質極めて柔軟なるが故に、冬日靴の内に入れて凍傷を防ぐ、皮類は三姓、寧古塔、阿什哈、より來集し、城内に皮店數十戸あり。

**(五)金融及び通貨** 金融機關は錢舖當舖ありて之に當り、錢舖は主として爲替及び兩替に従事し、貸金を爲すものは少く間々之あるも、貸附期限は極めて短少に

して二三ヶ月に過ぎず、錢舖の決算期は一ヶ月中初四日、十四日、廿四日の三回にして最も確實に決算す、吉林の爲替相場は吉林元寶銀を以て標準とす、通貨は馬蹄の元寶銀、銀貨、銅錢、錢票にして、元寶銀の重量は五十三兩五匁を以て標準と爲せども實際は甚しく輕重ありて、小は五十三兩、大は五十三兩九錢に至るものあり、貨物の相場は銅錢にて建て、市場に通用する所の貨幣も重に錢票にして、元寶銀、一元銀貨等の流通は極めて少し、銅錢は中錢老錢の二種あり、中錢又京錢とも稱し、一個を二文として勘定し、老錢は一個を一文とす、即ち中錢一吊文は五百個、一百文は五十個、老錢一吊文は一千個、五百文は五百個、一百文は一百個とす、錢票は奉天鐵嶺等の地方と異なり、錢舖の發行したるものはなく、市場に流通するものは、吉林省に設けある永衡官錢局の錢票なりとす、其額面の金高は、小は一吊文より大は數百吊文に至るありて等しからず。

**(六)取引習慣** 現金の賣買極めて少くして信用取引盛に行はる、貨物の賣買は總て銅錢を以てし、現錢は一箇月四日、十四日、廿四日の三期に分ち、錢舖を経て漸次受取り得るものにして、第一期には取引高の二割を、第二期には又二割を、第三期に

滿 韓 の 富 源

は其殘高を受領し、斯くして其貸借干係を了るものとす。問屋の手數料は貨物の種類に依り一定せずと雖も、原價買入若くは賣上高の一分乃至三分を收むるを例とす。即ち紡績糸、綿布等の賣却手數料は二分、雜貨は三分、又雜貨を購買する場合の手數料は一分なり。商業繁盛の期は九月より翌年二月迄にして、夏期は滿洲内地降雨多く道路悪くして車運に便ならざるを以て交通殆んど杜絶し、商勢自然減退するも冬期間は之に反し、道途凍合するを以て車運して吉林に輸入する貨物多く市場雜踏す。吉林は松花江の沿岸に濱するも、其實水江甚だ淺くして舟を遣るに難きを以て夏期に於て水運を充分利用する能はざる不便あり。露清銀行は此地に支店を置き爲替及び貸附を爲せり。平時に於ける貸附期限は一ヶ月乃至六ヶ月とし、利子は月一分三四厘の割合なりし。

(七)吉林營口間の交通 吉林と營口間の交通は車運なるに依り、夏期は道路悪しき爲め殆んど中止せられ、冬期道路の凍合するを俟て貨物の運輸に従事するを常とせり。然るに東清鐵道が長春府を通過するに至りてより、同地より汽車便を籍るもの漸く多きを加へ、吉林より營口其他鐵道附近の要市に輸送する貨物は、一先

滿 韓 の 富 源

づ之を長春に送出し同地に於て汽車に轉載するを常とす。吉林と長春間の運賃は百斤に付一吊乃至七百文にして直接吉林より營口に至るものは、百斤に付六吊文乃至四吊文とす。吉林の運輸漸く鐵道に頼るに至り、殆んど從來の車運を廢止する傾向ある所以のものは、蓋し汽車の馬車に比し速達を得らるゝと、又一には馬賊の危害を避け得らるべきことも、主要原因となるものなり。

(八)度量衡 衡は平秤、錢の三種に大別せらる。平は主に金銀を衡るに用ひらるるものにして、吉林銀百兩を各地と比較すれば

長春平	九十九兩九錢	奉天平	九十九兩六錢
營口平	九十九兩三錢	海城平	九十八兩六錢
鐵嶺平	九十八兩五錢	遼陽平	九十七兩六錢

秤は一般の貨物を計るに用ひられ、最大限五百斤掛にして、十分を一錢、十錢を一兩、十六兩を一斤とす。吉林百斤は營口の九十八斤に該當す。錢は藥材其他少量のもの

營口斗	八升九合	長春斗	八升二合
奉天斗	一斗六合	鐵嶺斗	一斗一合

尺度は長春鐵嶺等と同じく、洋尺、裁尺、木尺、大尺、絲尺の別あり、其大さ同地方と差違なきを以て之を略す。

### 第二 長春（滿蒙貿易の中心）

(一)我滿洲鐵道の終點　長春は松花江に注ぐ伊通河に沿ふ、又一に寬城子と云ふ此地今や我滿洲鐵道の北方終點たり、市は滿洲蒙古兩分界の長棚伊通門以外なる蒙古地區に位置し、土地の所有權は蒙古會長の手にあるも、市民は永代借地權を得て居住するを以て、借地養民の俗諺あり、住民は年と共に増加し、千八百九十六年には人口十二萬と稱せられしに、鐵道の工事は年々強健なる直隸及び山東の勞働者を吸集し、彼等は寧ろ此地の愛すべきを思つて土着し、それと同時に消費力は増大し、寬城子の繁昌は著るしく、人口繁殖の急激なること又之に伴へり、其市區の廣延と街頭の雜踏より察せば、支那人が此地の人口を以て二十五萬と爲すも強ち過張にあらざるべし、而して吉林、黑龍江兩省の物産は此處に聚積して諸方に頒配せ

られ、營口とは密接の干係あるを以て營口商人にして此地に出張所代理店を設くるもの極めて多し。

(二)重要輸出入品　輸入貨物の重なるものは紡績絲、綿布、鐵類、石油、雜貨とし、輸

出貨物は豆類、皮類、雜穀、豆油、人參、麻、烟草、燒酒、蘇油等なり、又近年器械油としてカストル油の製造に従ふ者あり、カストル油は草麻の實より製するものにして、搾取法は豆餅の製造方法と大同小異なり、豆油は滿洲に於ける第一に位する産出地にして、毎年の産額二千餘萬斤に達し、車運して鐵嶺に至り、更に船運に隨ひて營口に出で、廣東、福州、寧波、日本等に送られ、點燈用並に食料に供せられ、其銷售極めて浩大なり、豆油はカストル油と同じく木箱若くは篋に入れて輸出せらるゝものにして、一篋の容量四百六十斤乃至五百二十斤とす、又皮類は三姓、阿什哈及び蒙古地方より來集し、細貨は灰鼠、銀鼠、獺、貂、栗鼠等にして、疎貨は山羊、牛、馬、犬、狐、狸等を多しとす。

(三)罌粟の名産地　鴉片を製する原料として罌粟を培養するもの漸次増加し、今や全滿洲到る處として之をわらざるはなきが、就中長春附近の園地に於て産出するものを良品とす、罌粟は他の農産物に比し收利頗る多きのみならず、秋收七月な



るを以て之を終り、再び他の蔬菜類を植付け、一年中に再度の収入を獲るあり、之れ故に罌粟畑は逐年増加する一方なり。然れども鴉片採取の方法は甚だ幼稚にして先づ罌粟の圓頭に黄色の種子満ちて充分の高さに成長したる時に至り、一種の小刀を以て圓頭に横線を截傷し、指頭にて直ちに疵痕より湧出する乳状の汁液を壓し取りて小器に收む。畑圃を巡りつゝ、斯の如く爲して器の底に充分に白き流動物を溜集し得れば之を乾燥す。又次日には截痕枯凋するに由り、圓頭を縦に截傷して液汁を採取す。斯くなせば終に圓頭の側面枯るゝを以て、圓頭を其儘に放置して種子の出るを待つことあり。又圓頭を摘み採りて小白に投じて搗き碎き、之に由りて生ずる黄色の液汁を濾過して乾燥することあり。此截痕より湧出する液汁を集めて乾燥せる鴉片を上等品とし、圓頭を碎きて採集せるものを下等品と爲す。鴉片製造に關係ある事業は嚴重なる法令の下に取締らるゝと雖も、實際は取締法なきも同然寧ろ官吏の私囊を肥するに過ぎず。

**(四) 金融及び商業** 金融の業務を營むものは錢舖及び當舖の二種にして、錢舖は貸出爲替兩替に従事す。貸出金利は月を案し一ヶ月一分乃至一分三四厘期限は

長きは一年、短きは一二月にして、信用あれば長期貸附を承諾す。當舖は純然たる質業の外に雜業をも兼ね營む。貸出金利は月二分乃至三分にして廿四箇月を一期とするも、借主の事情如何に依り更に證書を書き替へて延期することを得。而して長春に於ける商業繁劇の時期は、毎年十月末より翌年二月末とす。交通は總て車運に頼り船運の便を缺くを以て、冬期道路の凍合する頃は、長春の繁盛なる時にして市場熱鬧を極むと雖も、夏期は降雨多く道途車を遣るに便ならざるが故に、内地との交通衰退し、取引の如きも自然閑散となる。取引習慣は現金の取引極めて少く、貨物の賣買は總て銅錢を以てし。一箇月を現金受授の定限と爲し、之を三日、六日、九日、十三日、十六日、十九日、廿三日、廿六日、廿九日の九回に分ち其授受を終るものにして、其方法殆んど營口に於ける過爐銀の運用に同じ。

**(五) 所謂長吉鐵道** 此地に東清鐵道の停車場を設置せられて以來、更に長足の進歩を爲し、同鐵道幹線の各驛中に於て清國商賈の之を利用するものは長春を以て最も多數と爲す程なるのみならず、長春は滿洲内地の中央に據り、滿蒙貿易の中心地なるを以て、自然に之を放任し置くも猶ほ將來發達すべき運命を持てるに、今

又長春より吉林に至る鐵道の基點たらんとす。其前途多望の都市たるや、敢て多言を要せざるべし。長春吉林間は日本里數にて四十里三十丁ありて、其間には觀音口、大橋、放牛溝、石匠窩棚、黑山嘴子、波泥河子、馬興地、福興屯、官家窪子、蘇同堡、西嶺、楊家店、大水舖等の各驛あり、道路は概して平坦にして、一帶の地は沃饒の隨地なり、而して吉林に入れば松花江の沿岸にして滿洲第一の沃野、人は此地力を指して東洋の穀倉と云ふ、煙草、小麥、豆等は最も優等のものを産し、且つ沿岸各地には砂金、曹達を産出す、又豆粕、豆油、磁器、岫巖石の製造所ありて生産物少なからず、賣買取引の中心に位置す。夫より長白山に進めば、砂金、鑛石、炭、銀等の鑛物及び人參の採取、兔、狐、狼、熊、野猪、麝等の狩獵多く、殊に榲松、榆、胡桃、樺、樅、赤松、黃松等の木材は殆んど無盡藏と思はるゝほど繁茂して人の伐るに任せり。

### 第三 哈爾濱 露國の理想的市府

(一)亞細亞の莫斯科 哈爾濱は露國が滿洲經營の策源地として今より凡そ八年前、新に露西亞式に依りて創建したる大都會にして、世界に於ける都市經營の最

も廣大なるものなり、露國は浦潮斯德及び旅順口の二港は、太平洋に於ける軍事上の威力を示さんが爲め經營したれども、哈爾濱は平和的産業的理想の大都市を實現せしめんと力を盡したる所にして露國民自ら呼ぶに「亞細亞に於ける莫斯科なる名稱を以てす、而して哈爾濱の所在地は滿洲の穀倉と呼ぶる、松花江流域の中央に位し、四面茫漠たる沃野を控へて、其生産力に富めること殆んど無盡藏なりと傳へらる。又交通の利に於ては實に完全無缺と云ふべく、即ち東清鐵道は三方に分派し、南すれば旅順大連に達すべく、東すれば浦潮に出づべく、北西すれば西伯利亞鐵道に接続して直に歐露に行がるべく、又水路に取らば吉林、伯都訥、白彥蘇々、三姓、愛暉、ブラゴエチンスク、ハソロフク、ニコライスク、齊々哈爾を始めとして松花江、嫩江、黑龍江、各沿岸の巨邑大市は、汽船又はジャンクを以て航通し、殊に其附近の平野には、東十二里にして人口六萬を有する阿勒楚哈あり、東南十五里人口一萬五千の賓洲あり、南廿五里人口一萬の拉林城あり、西廿里人口三萬六千の双城堡あり、北十里に呼蘭、更に十里北園林子ありて各人口三萬を有す、是等の市場を前後左右に控へたる哈爾濱の幸福實に思ひ遣るべきなり。

二三 哈爾濱の三大區劃 哈爾濱は始め鐵道技師が其本據地として撰定したる處にして、從來は阿勒楚哈より呼蘭に通ずる一寒村落なり、現今の哈爾濱は都合三個の市街より成立し其名稱を舊哈爾濱區、新哈爾濱區、松花江沿岸區と呼ぶ、舊哈爾濱區は松花江を距ること約二里の南方にありて、露國の最初に都會を建設すべく着手したる所なり、東西約一里半、南北一里の地域を有す、更に其西北約一里を隔ててある市街は即ち新哈爾濱區にして、東清鐵道の交叉點に當る、又之より西北約二十町を隔て、松花江の南岸に沿へる市街を松花江沿岸區とす、新市街は露清銀行鐵道守備隊本部、郵便電信局、裁判所、鐵道工場、鐵道會社附屬病院、寺院、警察署、學校等の重要な官衙兵營公共機關の所在地にして、市街の壯麗なる全市に冠絶す、然れども此區に住する者は露國人のみにして一切他國人の住むを許さず、舊哈爾濱區は始め一大都會たらしめんと計畫せし所なるを以て、又高樓大廈の軒を並ぶるありて相應に立派なる市街なれども、商業は餘り繁昌ならず、此區には、寺院、兵營、劇場、俱樂部、官吏會社員、の住宅あり、松花江沿岸區は三區中最も繁華の場所にして、工業地と爲り商業地となるものなり、汽船發着場、停車場及び有力なる商店、製造工場は

皆此處に集中し、人口も最も多く物資の集散亦た頻繁なり、此區にあるバザルと稱する大市場は、日常の消費品を販賣する所にして、甚だ般賑なり、日露清人を始め諸外國人は此區に雜居す、哈爾濱に於て土地を所有し、家屋を建築し、又永久企業に従事するものは、露國人及び清國人の外は斷じて許可せず、唯外國人の居住するは單に之を默許せるに過ぎずして他に何等の權利を與へず、人口は明治卅四年には一萬二千人なりしが、卅六年末には軍隊を除き六萬人に達せり。

三 集散の重要商品 市街未だ整頓せず加ふるに東清鐵道完通せりと雖ども、之にて運輸機關盡く具備せりと云ふ能はず、隨て商業の如きも單に哈爾濱及び其附近村落に供給するのみなれば、卸賣は殆んど行はれず、皆小賣商のみなり、輸入貨物の重なるものは、石炭、枕木、セメント、鐵類、麥粉、砂糖等を最多なるものとし、茶、酒類、食料品、羅紗、更紗、陶器、布疋類、其他の雜貨之に亞ぐ、輸入品の生産地は露獨兩國品多額を占むるも、陶器、漆器、フランチル、麥酒、裝飾品、シャツ類、毛布類の本邦品も亦た少なからず、併しながら其品物は多く露人向きにして、清國人を華客とする目的のは僅少なりし、今、市中に販賣せる商品に就て些か個々の觀察を下せば

- ▲木棉織物 本品の内には露國製更紗、紀州綿子、英國製金巾、同上色物の類最も多し。
- ▲鐵製品 重に家屋建築材料にして主として獨逸の輸入する所なり。
- ▲麥酒 米國製品最も多く次ぎは獨逸及び日本製品とす。
- ▲礦水 同市に産する礦水なきにあらざるも品質至て粗悪なるを以て日本産炭酸水非常に歡迎せられたり。
- ▲捲煙草 は日露兩國製品殆んど並行の有様にして生活の餘裕あるものは高價なる露國品を用ひ其他は多くは廉價なる日本製品を使用す。
- ▲燭寸 は其消費高極めて多く而かも悉く本邦産のみを専用し露國及び其他諸國産のものを見ず。
- ▲雜貨 陶磁器、漆器、小箱類、紙、刷毛、帽子類は主として日本産を受用し、靴、金屬小器の類は露國産多く支那本邦産は煙具又は室内小器に止まり之とても滿漢人が購入するのみ。
- ▲米 は南滿洲及び朝鮮産多く日本米は稀れに見るも價格甚だ貴し。
- ▲麥類 は滿洲産のものを外國より輸入するものなし。
- ▲木材 は吉林地方の長白山脈より伐採し松花江を下し來るもの若くは浦港方面の鐵道線路に沿へる樺道河子磨力石地方より運搬し來たる。

尙ほ此外豆油、胡麻油、大豆、蔬菜類は何れも附近の各村邑より供給せられて、甚だ豊富なり。

四、露人成功の第一工業 哈爾濱市の創設は未だ淺きを以て、工業は充分の發達を呈せるもの之なしと雖も、製粉業、煉瓦製造業、火酒釀造業、麥酒釀造業、肉類の製

造及び包裝業、豆油製造所、木挽業等は大に注目すべき價值あり、就中哈爾濱に於ける麥粉の製造の如きは露國人の成功せる最大なる工業として知らる。麥粉は米及び高粱と共に滿洲人の主食物にして、極めて多様なる炊事法に依て常食に供せらる。外、又滿洲及び西伯利亞地方に在住する露西亞人の常食なるを以て、其需要の廣大無邊なるは勿論なるのみならず、松花江沿岸は滿洲の穀倉と呼ばる。程なれば、麥麵の産出頗る豊饒なるを以て、原料の供給には些の不便あるなし。加之從來清國人側の麥粉製造業を見るに、奉天府に六百組、鐵嶺に四百組、營口に三百組、其他遼陽、吉林、長春等到る處に多きは百組、少きも二三十組の麥粉製造所即ち磨坊ありと雖も、何れも皆其製法舊式にして、人力若くは驢馬の力を藉るに過ぎざる次第なるを以て、此點に着目したる露國人は、先づ滿洲第一製粉會社を哈爾濱に起したるを始めとして、陸續同業會社起り、資本の總額約二百萬圓に達し、工場には米國製若くは歐羅巴式新機械を運轉し、一日の製粉高實に百五十萬封度以上に達せり。斯の如く巨額の産額あるに拘はらず、滿洲及び西伯利亞の需要には到底應じ切れざるを以て、營口輸入の麥粉は最近六箇年間に五百餘擔より三萬七千擔に激増したるが

如く、麥粉製造の業務は甚だ有望なるが故に、哈爾濱に於ける露國人の製粉場の如きは、毎期三割乃至五割の利益配當を爲す有様にて、滿洲に於ける露人の成功せる實業は之を以て第一とす。

(五)所謂滿洲の穀廩 松花江流域は土地肥沃にして禾穀能く穫り、滿洲の穀倉と呼ばれる、地にして、哈爾濱は此中央に建設せらるゝものなるを以て、農作物の豊饒なるは全滿洲に冠絶す。高粱、大麥、小麥、豆、苧麻、煙草、藍等の作物は無盡に生育し、又牧場としては好箇の草原多し。夫の製粉業が非常に發達したる所以は、原料が何れも附近より得られ、高價なる運賃始め諸係りを費ひやすことなしに得らるゝが爲めなり。各農作物の收穫量の多額なるは實に驚くべき程にて、其種子に對する比例は、粟は百倍乃至五百倍、豆類は二十倍乃至六十倍、小麥は十五倍乃至五十倍に上り、一農夫にして二三町を耕作し、優に家族十數名を養ふと云ふ。又耕作は肥料を施して其收穫高の豊多を計るのみならず、耕地を數區に分ち、毎年禾穀蔬菜の種類を交換播種する、所謂耕地輪換の方法もよく行はる。實に哈爾濱は將來大都會たるの總ての自然的要素を備ふるに於ては、遺憾あるを見ざるなり。

(六)家畜並に精肉の供給

肉類を常食とする白人に在ては、家畜貿易は恰かも我國に於ける米穀取引と同一の關係ある重要事項なり。哈爾濱に輸入せらるゝ食用家畜は生牛、小牛及び羊の三種最も多く、生牛は寬城子、阿什河、海拉爾、齊々哈爾呼蘭、興安、鐵嶺等よりの供給を受け、就中寬城子、海拉爾、齊々哈爾より來るもの多し。價格は戰前に於て屠殺後の量目十七布度の牝牛一頭八十留内外、七布度のものは一頭二十五留内外なり。一頭平均の市價は五十留内外にして、家畜は概して中等の滋養分を有せりと云ふ。哈爾濱に於ける露人の肉商買は、各方面より集來する清國仲買人より、口錢一頭に付一留五十哥づゝを支拂ひ、同地にて買集むるものなるが故に、精肉の販賣より生ずる利益の大部分は、精肉市場を獨占する清國人の所得に歸するものとす。東清鐵道は家畜の哈爾濱輸入を獎勵せんが爲め、特別低價なる運賃を定め、野牛、牝牛、去勢牛、牝牛は一貨車一露里に付、露貨二十哥宛にて運搬せり。小牛、家豚も亦此の率なり。此運賃率により各地より哈爾濱に至る一貨車の運賃を計算するときは、海拉爾よりは百四十留五十哥、齊々哈爾よりは五十五留、寬城子よりは四十五留と爲る勘定なるが、猶此運賃にて積載する時は、一貨車に收容する家畜

の頭数は、野牛、牡牛、牝牛、去勢牛は八頭、小牛は三十頭、羊は六十頭、豚は四十頭に制限するを以て、家畜の各驛より哈爾濱に至る賃金は、海拉爾よりすれば生牛十八留十三哥、小牛四留八十六哥、豚三留六十二哥、羊二留卅八哥、齊々哈爾濱よりは生牛六留十八哥、小牛一留八十四哥、豚一留二十八哥、羊九十一哥、寬城子よりは生牛五留六十三哥、小牛一留四十哥、豚一留十三哥、羊七十四哥と爲り、家畜の飲料水は無料にて鐵道會社より供給す。

(七) 金融と露清銀行  
 哈爾濱の金融は主として露清銀行に依て調理せらる。銀行と稱するものは唯一の露清銀行あるのみにして、戦前に於ける貸出金利は一月一分乃至一分二三厘、三四ヶ月を以て定期と爲せども、事情の如何によりて延期するものも少なからず、定期預金は年六分、當座預金は年三分の割合なりとす。日々の取引高は鐵道其他の政府勘定を除き四拾萬留に達し、不動産に對しては貸附を爲さざるも、確實なる取引には當座の融通として、常に資本金の三分一乃至二分一を貸附けり、而して清國商人との信用取引善く行はれ、彼等は資金を該銀行に仰ぎ、露國の物産を購買して之を滿洲に賣却するものなり、或る場合には唯だ一片の信

用狀に對して、實に貳拾萬留も清國商人に貸附けたることあり、其成績は良好にして、殊に露國棉布購入の如き、此法によりて能く行はれ、又他の確實なる商業も新興せり、前にも述べたる如く、賣買の大部分は零碎貨物の小賣に過ぎざれば、自然現金取引のみ多く行はれ、彼の奉天、寬城子に於けるが如く、信用取引を媒介する票莊、銀號、錢舖等の清國人經營の金融機關未だ之なし、流通貨幣は凡て露貨にして、清貨は僅少の吉林銀貨の通用するを見るのみ、露國の金銀貨及び紙幣は同價に通用し居るも、吉林銀貨の露貨に對する相場は時々變更し一定せず、哈爾濱は吉林省内にある地區なるに拘はらず、此地に於ての吉林銀貨は、百二十五元乃至百五十元を出されれば、露國の百留を得られざる有様なるを以て、他省の製錢に係る銀貨の如きは、殆んど半額にも兩替するを肯ずるものなく、實に不便極まる次第なり。

(八) 戦前の日本商民  
 日露戦争前に於ける日本人の哈爾濱にありたるものは約五百餘名なりしが、其六七割は埠頭區に住し、他は舊市區に居れり、正業に従事したるものは雜貨店、ラム子製造所、銀細工商、寫眞館、理髮店、洗濯店等にして、是等の同胞は重に浦鹽斯德より轉住せしものなり、日本商民の雜貨店にて取扱ふ商品は殆

んと本邦品のみにして、露人を第一の華客とす。清國人向きに販賣せられたる者は、名古屋産綿毛布其他零碎の雜貨類あるのみ。商品仕入地は主に長崎なるも、又旅順に於て清國商人より仕入るゝものも少なからず。哈爾濱に於ける借地料并に營業税は、旅順口に於て課したるものと大同小異なり。借地料は一二等に分ち、各一サーン四方即ち我七尺五分四方に付き、一箇月一等地は商店及び事務所敷地二留、住宅敷地一留、空地五十哥、二等地は商店及び事務所敷地一留、住宅敷地五十哥、空地二十哥、支那造り平家建坪は七留乃至十留なり。營業税は一等商店一年の賣上高三萬留以上の年税三百六十留、二等商店同一萬留以上、百二十留、三等商店同三千留以上、六十留、四等商店同千留以上、三十留、五等商店同千留以下、十留なり。露清人にして哈爾濱に於て新に土地を購はんとするも、主要なる場所は悉く投機師の爲めに買占められ居るを以て、拂下價格の五倍乃至十倍を支拂はざるべからず。

(九) 松花江と水運 哈爾濱に於ける絶大の利便たる松花江は、滿洲全部の三分二を灌溉する巨流にして、滿洲の中部及び北部は其之あるが爲め、富源の多きを致せるなり。松花江は滿洲名を松花鳥喇ソングリヤウラと呼ぶ。上流に二あり、一は嫩江と稱し、他を本

流とす。本流は長白山の北方に發し、嫩江は伊勒呼里山の西南より起り、伯都訥を距る六七里の邊に於て松花江に會流す。松花江は其の河口より哈爾濱を経て吉林府まで汽船を航行せしめ、嫩江は齊々哈爾濱まで大形支那船を行かしむ。松花江を航行する汽船は何れも露國旗を掲揚するものにして、初め黒龍江、烏蘇里河の航行に従事したるものが、滿洲内地の發達に伴ひ、更に其航路を松花江に延長したるものなり。現今松花江の航業に従事する重なる會社は、東清鐵道會社汽船部、黒龍江貿易會社、黒龍江汽船會社、クルパートクルパート商會等にて、哈爾濱より黒龍江までは、毎年四月より十月まで航行するを得。船室は一二三等に分たれ、各々好く整頓し居りて乗客を常に滿載す。荷物も亦た同時に運搬するも、通常曳船を以て之れに充てり。哈爾濱より黒龍江口に至たる海上汽船迄の貨物運賃は一布度、十四哥即ち一噸につき八留なり。汽船の形體は米國西部諸河に見る如く、大抵後方輪船式にして、燃料は木材を使用す。哈爾濱より黒龍江を下り、烏蘇里江口に於けるハッロフスクハッロフスクに到る日數は、凡そ五日を要し、茲に於て浦鹽斯德プサルステッドへ向ふ烏蘇里鐵道と連絡す。

(十) 東清鐵道の中心 東清鐵道は哈爾濱を中心として丁字形に敷設せられた

るものなり、始め東清鐵道及び之に連絡すべき支線の經過地は、實地踏査に従ひ、屢變更せられたるが、明治卅一年旅順大連の租借成りて、遼東半島の鐵道敷設權を併せ得たる結果として、此處に愈々中心を哈爾濱に築き、一は貝加爾湖方面に於て西伯利亞鐵道に接続せしめ、一は滿洲の極東地より烏蘇里鐵道と連絡を取つて浦鹽斯德に出でしめ、一は南下して旅順大連に達せしむべく決定せり、浦港線は五百三十七露里、五十餘時間にて達し、貝加爾湖方面より西伯利亞鐵道に接するものは、滿洲及び西伯利亞の境驛なる滿洲里まで八百八十六露里、都合十八日間にて首府彼得堡に到るべく、大連には八百八十一露里、是亦た三晝夜を要せずして着するを得べし、斯の如く哈爾濱は陸上に於ても水上に於ても交通の便利は遺憾なく占得し、加之豐饒なる四周の廣野には盛邑大市遊星の如く圍繞す。

#### 第四 伯都訥 (沃野中の要市)

(一) 松花江、嫩江の會流點 伯都訥は一名新城と稱し、吉林省中、內蒙古に近接せる大市街なり、滿洲の中部及び北部を灌溉して、滿洲の母とも言はるべき松花江及

び嫩江は市街を距る北西六七里の所に於て會流す、市街は松花江の右岸に位置し、同江の流沙より形成す、四方は茫々たる平野にして、地味亦た肥沃なり、人口約四萬二三千にして、城廓あり、其中央にある牌樓より南門に至る間は、最も繁華熱鬧の巷にして、大買巨商の店頭聯列し、内外の商品を鬻賣す、交通は甚だ便利にして、松花江を上下して吉林府、哈爾濱、呼蘭、三姓等に來往する舟楫繼るが如し。

(二) 製造業の盛大 此地は製造業のなか／＼盛大なる所にして、製品は獨り此地方の需要を補ふのみならず、豆粕は吉林及び營口に送り、豆油は齊々哈爾濱に輸し、北方の諸地へは嫩江、松花江を利用して米及び小麥を供給し、黑龍江省には燒酒を送る、營口に輸送する貨物のみにても、毎年二百萬貫に達すと云ふ、今此地製造業の種類を大別する時は、

麥粉製造所	百五十箇所	柴繩製造所	四十箇所
豆油製造所	二十箇所	毛氈製造所	二十箇所
金物製造所	十五箇所	燒酒製造所	十箇所
敷物製造所	七箇所	製紙所	五箇所
製革所	三箇所		

斯の如く毛氈及び敷物の製造盛なるに伴ひて、此地は海拉爾以東に於ける第一



の羊毛集輻地なり、但し目下は單に此地製造業の原料に需要するに留まれど、伯都訥は松花江の流に沿ふて運搬上至大の便利を有するを以て、將來は有力なる獸毛皮市場となるや測られず。

### 第五 齊々哈爾 (北滿洲の要市)

(一)黑龍江省の首府 齊々哈爾は又ト魁と呼び、黑龍江省の首府なり、市街は松花江に注ぐ嫩江流域の沙原中に位置するを以て、四望平坦なり、人口は八萬と稱し、黑龍江省中第一の繁華なる市街にして、黑龍江將軍此處に駐劄して行政を掌理す。住民は甚だ雜種にして、滿人、漢人を始め蒙古人、達瑚爾人、鄂魯春人、索倫人等雜居す。東清鐵道は南方六里餘の所に停車場を設置し、ホウルホウラ驛と名づく。

(二)商品の集散 黑龍江省中に配頒せらるべき貨物、及び南方各地より露領ブラゴエチエンスク府近傍に至る貨物は、皆此地を経由するものにして、冬季道路結氷の頃には、車運最も頻繁なり、毎年九月十日には、歲市を開催するが、此時は商況最も活潑にして、茶、織物、大豆、雜貨、獸皮、乾酪、粟、豆油、燒酒、馬、羊、豚、及び此地の特産物たる

煙管具、馬鞍等の集散宏大なり、其取引區域は、呼蘭、白彥蘇々、海拉爾、墨爾根及び蒙古西伯利亞等にして、蒙古の馬匹は主として此地より東三省に頒配せらる。又露領より沙金を輸入す。此歲市に於ける取引金額は一回にて五六百萬圓に上ることあり、又齊々哈爾より營口に輸送する貨物は、毎年百萬貫以上に達す。

### 第六 寧古塔 (東滿洲の要市)

(一)沿海洲との關係 寧古塔は松花江と三姓に於て合流する牡丹江の上流に位置し、人口三萬ありて、旗人多く住す。東清鐵道は市街を距る南方六里餘なる海林驛に停車場を設置するも、此間道路頗る險惡なるを以て、充分の利便を與へずと雖も、寧古塔は吉林省中吉林府に亞で、要衝の地なるを以て、道路は四方に分岐し、就中東は三岔により露領ニコリンスク市及び興凱湖一帯に通じ、南は松岑子、琿春を経て露領ボセツト灣、浦沙斯德港、朝鮮の慶源府に行くべきを以て、滿洲最東に於て甚だ必要なる市街とす。

(二)吉林浦港の中繼地

此地商業の重なるものは、吉林府より浦沙斯德に送る

貨物の取次ぎを爲し併せて地方産物たる、豆粕、黍、大豆、玉蜀黍、毛皮類を浦港若くは吉林に送る。工業は微々たるものにして、僅かに郊外に小規模なる麥粉、燒酒、皮革等の製造所數箇所あるに過ぎず。外國よりの輸入品は、浦沙斯德よりする露國品あるのみにて、夫れも價格の廉低なる品に限る姿なり。我國を始め諸外國品は市場に上るもの甚だ僅少なり。

## 第五部 黑龍江流域地方

黑龍江は清露の境界を形成するものにして、河身廣大亦た舟航の便多きも、滿洲にとりては其餘りに北隅に僻在すると、且つは對岸西伯利亞の發達未だ盛ならざるを以て、此流域に於て注目すべき大都市少なし。

### 第一 愛 琿 (黑龍江畔第一の盛邑)

(一)對露貿易の市場 黑龍江流域にありて、對露貿易上必要なる都會は先づ愛琿なれども、此地千九百年の兵亂に罹りて大損害を受け、市場大に衰退し又往時の

面影なし、愛琿を北に距ると十里なる薩哈連烏拉は、露領ブラゴエチンスク府の對岸にあるを以て、從來愛琿の占めたる勢力は此所に移遷しつゝあるが如し。人口は愛琿五千、薩哈連烏拉三千なり。斯の如く現時に於ては未だ微々たる都會なりと雖も、黑龍江沿岸の對露貿易場としては、此何れか一に頼らざるべからず。

(二)商業状態 商人は山東山西等の漢人多く、何れも滿洲の物産を露領に輸出するを以て業とす。最近の統計に依れば、愛琿よりブラゴエチンスク府に輸出したる貨物は百七八十萬圓にして、其内最も多き商品は家畜の百三十萬圓、穀物の十八萬圓、其他は獸毛皮、豆油、雜貨等なり。又露領にて採收せられたる砂金を此地より滿洲に輸入する額も少からず。

### 第二 海拉爾 (露國勢力圏内の一要市)

(一)天惠の好牧場地 海拉爾の本名は呼倫貝爾なり。黑龍江の上流、海拉爾河の廣漠たる溪谷中にあり、黑龍江省中齊々哈爾に次ぐ大市にして、東清鐵道の停車場あり、人口壹萬と號す。又此市と停車場との間に露人の建築せる一小市あり、て之は

滿 韓 の 畜 産 源

露國式海拉爾を新に作らんと計畫せし所なり。海拉爾の西方三拾餘里の地にガン  
 ジェールと稱する村落あり。毎年八月を期し盛なる歳市を開き、滿蒙及び西伯利亞  
 の土民群集して交易を爲す。此地の商業は總て齊々哈爾商人の握有する所なり。海  
 拉爾の廣漠たる高原には牧畜盛なり。此平原は鹽澤地にして農業には不適當なれ  
 ども、好良なる牧草多きと、水の供給充分なるより、天惠の好牧場として知らる。家畜  
 は鹽分ある牧草と同じ水に馴れて生長する故に、體形肥大にして、味亦た美なり。  
 (三) 獸毛皮の大市場 海拉爾は斯の如く滿蒙露貿易の中樞點たるが、此中に於  
 て毛皮の集散は最も盛大を極め、滿洲毛皮の中央市場たるなり。獸毛は羊毛、駱駝毛  
 及び豚毛、馬毛の謂にして前者の大産地は蒙古、後者の主産地は滿洲なり。毛皮の此  
 地に集輻する期節は此地の歳市ヤムカク即ち露曆八月一日より同月十五日に至る間及び  
 春季四五月の候にして、滿蒙及び西伯利亞より住民群を爲して來集す。而して羊毛  
 及び駱駝毛の各季節に於ける價格は左の如し。

種 類	歲 市	春 季	其他の季節
羊 毛(百斤)	五 留	五留内外	十 留
駱駝毛(同上)	一 留	十五留乃至二十留	四十三四留

滿 韓 の 畜 産 源

豚毛の平均相場は百斤に付夏季百四五十留、冬季百十留乃至百二十留にして最  
 上等品には二百留のものあり。次に馬尾は百斤六十留、馬鬣は百斤四十留位にして  
 海拉爾の外壁城堡、長春、吉林に於ても集散頻繁なり。次に獸毛皮は其種類甚だ多し。  
 左に示す價格は外套裏一領としての計算にして、此種の用に供するものは、一頭の  
 毛皮を全形にて悉く使用するにあらずして、同種の獸毛皮に就て或一定の場所例  
 へば脊皮、頭部、蹠のみを縫合して外套裏に作るものなり。

黑貂脊皮	二百五十留より二千留	貂鼠脊皮	百七十五留より二百七十五留
狐頸部淡黑色皮	五十留より七百留	香鼠黑色皮	三十五留より百五十留
浣熊皮毛皮	九十留より四百留	栗鼠	五留より百留
袋鼠脊毛皮	十留より五十留	家兔毛皮	十二留より二十留
野猫毛皮	六留より三十留	海猫毛皮	六十留より百二十留

右の如く價格に非常の懸隔あるは、其産地に依て品質に善惡を生ずるに基因す  
 るなり。

### 第三篇 韓國

極東新興國の國民が戰捷の光榮を擔ふて、將に大活動を試みんとする韓半島の富源や如何、今や我國民の活動に便ならしめんが爲めの韓國縱貫鐵道たる京釜及び京義の兩大線は竣成を告げたり、日韓兩國貨幣の共通は實行せられたり、通信機關の全部は舉げて、我政府に委託せられたり、我有する朝鮮沿海の漁業權は從來京畿全羅、慶尙、江原、咸鏡の五道なりしに、是亦た残れる忠清、黃海、平安の三道を新に收めて、全沿海の漁業權を完全に獲得したり、斯の如く四周の形勢は着々として進行成功し、我國民の爲め活動を容易ならしめんとす、此時に當て我有爲の國民たるもの如何ぞ奮勵努力、韓國の開發に従はずして可ならんや。

#### 第一部 韓國南部地方

韓國南部地方とは慶尙全羅忠清三道を云ふ。由來韓人が自國の富を誇るに三南を以てするは、即ち此三道なり。此地方は韓半島中人文最も開け、地味豊沃にして産

業能く發達す、我國民の活動舞臺としては、韓國中蓋し此地方を第一に推さるべからず。

#### 第一 釜山港（京釜鐵道の起點）

(一)日本國釜山の觀 三南中其最も有名なる地は即ち釜山なり。釜山港は港内開洞にして、港の口に絶影島あり、周圍七里、港内を遮蔽す。船舶の出入口は、此島の東西にあり、氣候は韓國各開港場中の最良を以て稱せらるゝも、之を同緯度なる我京都横須賀の邊に比較するときは、寒暑の度稍々劣れるを見る。此地今や我帝國と歐亞大陸とを連絡する京釜鐵道の起點と爲り、我對韓政治上實業上一層緊要の所となれり、故に將來斯地が如何に大なる發達を爲すべきか、想像に難からず。長崎山口地方の我國民が釜山在住の親戚知友に書狀を差出すに當て、日本國釜山なる肩書に附する者あり、これ素より差出人の文旨にして事情に通せざる農夫漁民の仕業なりと雖も、足一たび釜山に上陸すれば、宛然たる日本の都會に到りたるの心地す。其形勝の地域は總て日本居留民を以て占められ、實に日本居留地ありて、釜山あり。

一五二

と言ふも過稱ならず、我居留地は北に峰臺山を負ひ、東南は海に面し、前洋の一島絶影島を以て外海の激浪を遮る、廣袤拾萬餘坪、中央に龍頭山あり、滿山皆鬱蒼たる老松を以て蔽はれ風景特に佳なり、其脈岐して東北隅に突起するもの之を龍尾山と云ふ、市街は總て此二丘を包圍して成る、現今の居留地は寛文十二年對馬宗家の家臣津江兵庫が朝鮮政府と談判して定めたる所にして、當時は周圍僅に二千四百餘間名けて倭館と稱へたる所なり、居留地には本町、北濱町、常磐町、琴平町、辨天町、入江町、幸町、南濱町、西山下町、西町、桶屋町、鍛冶屋町及び居留地外の大廳町、寶水町、富平町を加へ戸數二千二百、人口約二萬、滿街舉て日本風の建築にて區劃井然連擔櫛比し、身の外國に在るを覺えざらしむ、此地には日本理事廳、日本警察署、郵便電信局、電話交換局、税關、居留地役所、居留民會、日本人商業會議所、商品陳列館、尋常高等小學校、幼稚園、圖書館、公立病院、避病院、兩本願寺別院、新聞社の外、我銀行會社の本支店等數多ありて、全く我内地の都會と少しも異ならず、居留地は明治九年帝國政府が韓國より租借せる專管居留地にして、其使用權は帝國政府之を掌握し、駐在理事之を管理す、而して其地所貸渡規則の大要を擧ぐれば、(一)居留地は我國民に限り借用すると

を得、(二)拜借人は其拜借地を我國民に限り讓與若くは貸與することを得、(三)地所拜借人は居留地公共費を負擔する義務あり、(四)拜借地は一家一名一宅地に限るも商業上の都合に依り添地をも許可せらるなり、釜山現今の地積は逐日増進すべき幾多の居留民を包容すること能はず、依て現在釜山埋築會社なるもの起りて、居留地の海岸四萬百九十一坪の埋築に従事中なり、而して第一期計畫に屬する三萬千六百餘坪は既に竣工し、其豫定賣却地價は一等地一坪六拾圓、二等地同五拾五圓、三等地同四拾五圓なり。

(三)日●本●人●の●商●業●

釜山港内碇泊の大小船舶は、十中八九悉く日章旗を翻へすに徴するも、貿易上に於ける我勢力の偉大なるを想見するに足る、慶尙道の全部及び忠清江原の部分に向ふ貨物は釜山を經由し、又洛東江の流域に産出する米穀及び獸皮の如き輸出品も亦た擧げて釜山に集注するが故に、釜山は韓國諸開港場中最も古き歴史を有するのみならず、貿易高も主位を占め、其金額も年々に増進す、貿易商品中の重要なるものを擧ぐれば輸入品にありては木綿、金巾、石油、セメント、鹽、陶器、木器、繩、吹、諸金屬、金屬製品、燐寸、煙草、酒、醬油、雜貨等にして輸出品は、米、大豆、干魚、

布海苔、天草、銀杏草、鮑、海鼠、鱈、生牛、牛皮、牛骨、砂金等なり。輸入品の賣買は本邦人間にては小賣に過ぎざれども、輸出品に對しては韓商より買入れ船積する迄即ち該商品が居留地に停滯するの期間に於て、本邦商買間に賣買の行はるゝこと盛なり。又貨物賣買媒介者ありて、其需供を圓滑にす。今普通其委託賣買手数料を示せば、

一五四

一 米、大豆、荏子、石油	雜價の二分
一 線花、金巾、木綿、海産物、牛皮、牛骨、油粕、砂糖、木材、板、竹、紫麩、五倍子、棉花、種、燻草、疊、器具、磁、瓦、	同 三分
一 和洋酒	同 四分
一 漬物、味噌、醬油、繩及び叭小賣、木材及び竹小賣、陶	同 五分
一 器、石灰、木炭、石粉、雜貨	同 一分
一 鹽魚、生魚	同 五分
一 運賃、積荷(輸出入共)	同 五分

斯る定めはあれども弊害多きを以て、釜山商業會議所は仲立人規則を設け、仲立人手數料を左の如く定む。

品名	建	現賣買	品名	建	現賣買
韓錢及韓錢手形	百貫文	四十錢	板	一石	一錢二厘
米、大豆、小豆	一石	二錢四厘	糠	百斤	一錢二厘
小麥、大麥	百斤	六錢	五倍子、鱈鱈	百斤	十二錢

而して日韓人間の取引は從來總て居留地に於て行ひしが、方今は商買に依りては韓國内地に店員を派し直接取引するもの漸次増加の傾向あり。又韓商の各地方より釜山に來集し米穀牛皮等の輸出品を放賣し、輸入品即ち金巾諸雜貨類を仕入るものは、直接日本商人と賣買を爲さずして大抵は韓人問屋(客主)の斡旋に依るを例とす。居留地附近の韓商の多くは此問屋營業にして、其内には相當資産家もあれば、又無資産にて只單に口次ぎを爲す所謂才取りの如きもあり。釜山より慶尙道内地の各市に通ずる洛東江には數箇所に徵稅所ありて、内地に行商する本邦商買の如きは、條約上徵稅する能はざるに拘はらず、屢次韓人所有貨物と混視せられて通過稅を課せんとするより、我國は特に警察官を派して其不法徵稅を取締り居れども、本邦商買にして自己の貨物を韓船に積載し、洛東江を上下せんとせば、其品名個數仕向地等を記載したる貨物證明願を理事廳に差出す時は、理事より一の憑單を

下附し異なるを以て、若し途次徴税に逢はんとすれば、此憑單を示して不法徴税を免がるゝなり。

三 韓 人 間 の 商 業

韓人間の商業は日本人とは其趣きを異にし、都鄙一般に卸賣商あれども小賣商は稀れなり、適々之あれば店頭僅かに數葉の葉煙草數本の巻煙草、數足の草鞋ある位に過ぎず。戸々日用の必需品は總て一定したる市日に購入するを慣習とす。市場の位置は都邑の一市街若くは町村にて、往來交通の便利なる場所を選び、米麥等の穀物類より、蔬菜、木綿、金巾、紡績石油、飲食物、小間物等大小一切の日用品は總て此市場に集まる。當日此市場に集まる數千の商人は純粹の商人もあれば、又自己の生産物を賣却して必需品を買入れんが爲め集市する商人あり、斯る状態なれば、韓國の普通商人と稱せらるゝ者は、本邦の如く平常一定の地に開店して顧客を待つものにあらずして、市場の開市を追ふて巡商するものなり。而して釜山港並に慶尙道に於ける商習慣の重なるものは、(一)韓人間には市場の賣買を以て商取引を結了し、(二)延取引あること、(三)十中の八九は問屋の手を経て外商と取引し、(四)手形を授受すること等なり。又日韓人間の取引は、韓人に對する重立ちたる商

品は大抵貸賣にして、其期日は五日乃至十日とす。去れど我に借受を爲すが如きは極めて少なし。日本商人間の取引は、多くは一箇月若くは卅五日の懸賣とす。此懸賣は商人の迷惑一方ならざるも、慣習の久しき容易に該習慣を打破矯正すること能はず。従て商人は常に金利と延取引より生ずる資金の損失とを、商品に賦加して賣價を高からしむるを以て、直取引即ち現金にて商品を購求せんとするものは、勢ひ高價なる貨物を購求せざるべからず。

四 農 業 と 土 地 賣 買

韓國にては堤防及び洪水を豫防すべき排水路の設備殆んど皆無なれば、隨て河川は容易に氾濫し、少しく人工を加ふれば美田美圃と變ずべき良地も、空しく放棄せられある状態なり。釜山地方の小作法は收穫物を以て地主に收むる習慣にして、其方法に賭地法と打作法との二種あり。賭地法は豫め小作料を協定し置き、年の豊凶に依て小作料を増減せず。打作法は毎年收穫高を検し、之を地主と小作人と協定せる率に従て分割する法なり。畑地は賭地法に依るもの多く、田地は打作法に依るを普通とす。而して畑地に在りては種子及び地租は地主之を負擔し、田地は地主の負擔とす。水害其他の事由にて田畑に損害を受け修繕を要

する時は、被害大なれば地主若くは地主と小作人と共同して修繕し、被害小なれば小作人の負擔にて引受く。又收穫物中稲作は韓國第一位の産業にして殊に南部地方のもの良し、稻種には梗糯の二種あり、又早中晩の區別あるも、概ね有芒種に屬す。播種期は五月初旬にして、插秧期は五月下旬より七月に至る、本期の斯く長日に互るは主として灌漑水の不自由にして、或は降雨を待て插秧するが爲めなり。收穫期は通例十月下旬頃とす、麥は重に畑地に作り、又稻田の裏作とす。播種量は一段歩に付き約五升乃至八升を播き、其收穫は一石乃至二石、小麥は六斗乃至一石なり。大麥は食用及び餵製造用に供し、小麥は製粉して各種の用途に供する外、酒類醸造の原料とす。豆類中産額の最も多きは大豆にして、米に混じて食用に供し、又は豆腐味噌醬油等の製造に用ゆ。洛東江流域の豆栽培は甚だ盛大なり。雜作物は麥、藍、苧麻、棉、楮、荏、蓖麻、煙草等なれども、多くは副産物として作るものにして、他道の如く多産ならず。従て其名の聞ゆる者なし。而して韓國の田畑には我國の往時の如き地券なるものなく、其人民に所謂土地所有權なるものを與へずして、單に地上權の獲得を許容したるに過ぎず。故に土地賣買と云ふも其實土地使用權の讓與なり。人民は決して

土地所有公認證なるものは所有せざれども、慣習上各土地に屬する文記と稱するものあり。文記には新舊兩様ありて、古文記は其土地の開拓者以後連絡したる賣渡證書にして、新文記は最新の賣渡證なり。文記には田畑の所在地、田畑の名稱、斗落、税額、賣買價格等を記載せられ、執筆者若くは保證人の連署あるを例とし、現在の土地所有者が前所有者より領收せるものに係る。故に土地の賣買を爲さんと欲せば、必ず此文記なかるべからず。而して内地に於て土地を購入せんとするには、先づ土地周旋人に依頼す。賣買の方式は不完全至極にして、賣買兩者間に交渉纏まれば、文記を受取り代金を支拂へば、別に官衙には何等の届出を要せずして已に賣買は成立す。普通土地の賣買は一斗落を以て單位とす。一斗落とは韓樹一斗の種子を蒔付る土地の謂ひにして、其面積は或は三畝歩、七畝歩等ありて、區々一定せず。一斗落の地價は上田三拾圓乃至廿五圓、中田拾五圓乃至八圓、下田五圓乃至三圓位にて、我國に比すれば賣買登記料位にて購求し得らる。

(五)其他の産業　農業を除きて其他の産業には、牧畜及び釜山近海の漁業あり、工業は未だ記すべきもの無し。牛馬は到る處飼養せられ、釜山港の前面絶影島の如



きは、其以前は有名なる牧場なりしを以て、今日猶ほ牧の島の俗稱あり、牛は體軀良く發育し性質温良最も力役に適す、飼養法は概ね暖氣には原野に放牧し、夜間は牛舎に入れ、冬季は舍飼とし大豆、大豆莖、稗稈、粟稈等を煮て與ふるものとす、而して牧場と稱すべきものなく、唯だ便宜に従ひて河邊山麓沼澤附近の草生地を用ゆるのみ、繁殖法に就ては古來より特種の方法行はる、即ち牛主なるものありて價格十五六貫文位の母牛を、一年其價格の一割位の賃料にて農夫に貸渡し、其牛が犢牛を分娩したる時は、其犢牛は母牛を離るる際、牛主に回收せらるゝを常規とし、牛主は又此犢牛を他に貸與して年々収入を得るものとす、其貸渡したる犢牛に對しては最初牛主は、其賃料を徴收せざる代り、二箇年間は借主之を飼養する義務あり、而して二箇年を経過したる後は、牛主は借主に禮として犢牛一頭を贈與す、尤も近來牛主は益々其繁殖を圖りて、犢牛の代りに一頭に付三四貫文位の金銭を贈る風行はる、牛の用途は力役及び食用の二種にして、又生牛、牛皮、牛骨は韓國の重要貿易品たり、次ぎに馬は體軀甚だ矮少にして其丈け通常三尺六七寸なれども、蹄質堅硬にして其性柔順、能く十數貫の重荷を負ひ、七八里乃至拾餘里の峻阪險路を連日續行する

に堪ゆ、騾は體軀矮少にして其丈け三尺二三寸、性質強健にして乗用に供せらる、豚も飼養せらるゝも、其種類劣等なり、次ぎに又漁業に就て述べれば、本邦漁民の出漁する者は逐年増加しつゝあるが、出漁者の多くは一旦釜山に航し、通漁免許狀下附願書を釜山居留地役所に差出し、更に理事の證明を受けて釜山海關長へ出せば免許證を附與せらる、免許證有効期限は滿一箇年なるを以て、滿期に至り猶ほ漁業を營さんとせば、免許引換願を爲すなり、釜山港は二萬人の居留民と附近には韓人部落の多きを扣へ、又本邦と最近距離の地にあるを以て、漁獲物の販路廣く、魚價も他に比し高貴に販賣し得らるゝのみならず、日用品の供給にも便利なり、卅六年に釜山理事廳にて證明せし漁船數は九百三十八隻、漁夫數四千二百四十三人なれども、多き年は千六百隻、七千餘人に及ぶことあり、漁獲物は、鯛は年中漁獲せられ、冬季には鱈、鰈、鱈、鱈等多く、五六月頃は鯖魚最も盛にして、七八月には鱈あり、九十月の候は鱈、鰈、鰈、鰈の類は多く韓人の漁獲する所にして、其他の雜魚、鮑、海鼠の如きは周年多量にして、魚類の富饒は釜山港の異彩と稱せらる、又此近傍即ち洛東江以東の地には、目下産出しつゝあるものとしては、有望の礦物なし、但し彥陽及

び密陽の兩郡よりは、以前多少の鑛金を産し、蔚山には未だ採掘せられざる品質下等の石炭あり。

(六)金融事情

釜山に於ての通貨は韓錢銅貨本位金銀貨幣の外、尙ほ韓錢手形なるものあり、韓錢は又葉錢と稱し、韓國内一般に通用す、我國の一文錢なり、韓人の取引は多く此韓錢建とす、計算法は地方により差あるも、釜山、木浦等にありては、葉錢を總て一枚一文として通算するが故に、葉錢一貫文は千枚に該當す、而して其稱呼は葉錢百枚を一兩と稱し、以上十百千萬と呼び、百枚以下は十文を一錢、二十文を二錢と唱ふるを正式とするも、尙何拾何文と俗稱すること多し、銀貨は五兩一兩の二種、白銅貨三錢五分の一種、銅貨五分の一種、黃銅貨一分の一種あり、是れ明治廿八年新に制定發行せるも、釜山附近には流通するに至らず、唯京城附近にのみ流通せり、金貨には貳拾圓、拾圓、五圓の三種を發行する筈なりしも、未だ其運びに至らず、白銅貨は濫鑄私鑄等弊害百出して少しも信用なき貨幣なるが之は今回回收引上げたり、次ぎに日本貨幣は韓全國を通じて韓貨幣と同一に授受せらるゝこととなりしが、從來にても釜山否韓國に流通する外國貨幣は全く本邦貨幣と稱するを得て

其内紙幣は概ね日本銀行兌換券なれども、卅五年五月より第一銀行に於て發行したる一圓五圓十圓の一覽柳券漸次信用を博し授受せらる、其他小銀貨たる五十錢二錢十錢及び五錢白銅貨、一錢銅貨は開港場にのみ通用せられ、未だ内地の韓人間には流通するに至らず、又各開港場中釜山、木浦、群山、元山にては其地方に限り使用する特種の手形あり、即ち韓錢手形と稱するものにして、斯は合法上の手形にあらざるは勿論、唯慣習に依て流通するなり、此手形は本邦商賣は豫め韓錢を買入れ、貨物賣買上必要の場合には、直に賣主を名宛として自己を振出人としたる手形を發行し、之を賣主に交附し、其手形の所持人も直に現錢の取付を爲さず、良し取付けずるも取引高巨額なる場合には、現錢を授受するは相互に不便甚しきのみならず、實際手形面に記載せる丈の韓錢を一時に市場に於て取纏めることは、頗る至難に屬するを以て、其手形所持人も該手形を現錢と見做し、他に支拂ふの習慣を生じたるなり、而して釜山港の金融は米穀の輸出殷賑なる時は活潑を呈すること、他の開港場と異ならず、蓋し韓國は農産國なるを以て、農作物の豊凶如何によりて、金融界に激烈の影響を及ぼすなり、金融機關は我銀行の經營に屬し、韓人も甚だ信用して

預金等を爲す。本邦人間の普通貸借金利は有擔保千圓に付二歩乃至二歩五厘無擔保二歩五厘乃至三歩なるが、高利貸利子は論外なり。又本邦人より韓人への貸附利子は有抵當拾貫文以下一ヶ月一割、拾貫文乃至五拾貫文一ヶ月七分、無抵當に至つては之より五分乃至一割高し。

(七) 度量衡の種類

普通韓人間に使用せらるる、衡器は其構造及び定量の名稱等毫も本邦舊時のものと異ならず、尺度も其構造及び使用法共に本邦品と異ならず、只定尺上に、多少の長短あるのみ。量器中、斛は普通市場に行はるるものに一斗、一升、一合、五合、一升、五合、一斗、一升、五合に當る、更に其詳細を左に掲げむ。

度尺用匠工

名稱	算 法	日本換算
尺の百分の一	尺の百分の一	一毫
尺の百分の一	尺の百分の一	一厘
尺の十分の一	尺の十分の一	一分
尺	尺	一尺
十尺	十尺	一丈
千三百八十六尺	千三百八十六尺	二百卅一間

度尺用帛布

名稱	算 法	日本換算
尺の百分の一	尺の百分の一	一分三厘
尺の十分の一	尺の十分の一	一分三厘三毫
尺	尺	一尺三寸三分
十尺	十尺	一丈三尺三寸

此地積を計るものを量田尺と云ふ。即ち一結は周尺一萬尺平方に當り、又田圃の良否に依て一萬尺平方一結を基本率と爲し、一等田は一萬尺平方面積を一結、二等田は同面積を八十五負、三等田は同じく七十負、四等田は同じく四十五負、五等田は同じく四十負、六等田は同じく二十五負に區別し、徵稅の標準とし、賣買讓與も亦た

度尺用離距

名稱	算 法	日本換算
周尺百分の一	周尺百分の一	六厘六毫
周尺十分の一	周尺十分の一	六分六厘
周尺	周尺	六寸六分
六周尺	六周尺	三尺九寸六分
十周尺	十周尺	一丈六寸
十間	十間	一丈六寸
二十一結	二十一結	三町五十一間

量 衡

名稱	算 法	日本換算
錢の百分の一	錢の百分の一	一毫
錢の十分の一	錢の十分の一	一分
錢	錢	一分
十錢	十錢	一匁
十六兩	十六兩	一斤

斗 量

名稱	算 法	日本換算
升の百分の一	升の百分の一	三勺三三
升の十分の一	升の十分の一	三合三勺
升	升	三升三合三勺
十升	十升	四斗九升九合五勺
十五斗	十五斗	六斗六升六合
二十斗	二十斗	四斗六升六合

地 積

名稱	算 法	日本換算
把の百分の一	把の百分の一	坪、三〇二五
把の十分の一	把の十分の一	三〇、二五
把	把	三〇、二五
十把	十把	三〇、二五
十束	十束	三〇、二五
百負	百負	三〇、二五

之に従ふ、今此各等に於ける一結の面積を、我反別に換算する時は左の如し。

- 一等地一結 我八反七畝一步餘
- 二等地一結 我一町二畝十一歩餘
- 三等地一結 我一町二反五畝九歩
- 四等地一結 我一町五反八畝
- 五等地一結 我二町一反七畝十六歩
- 六等地一結 我三町四反八畝二歩

又通常民間に於ては田地の面積を呼ぶに斗落を以て數ふ。斗落とは單に一斗の種子を落すに足るべき面積の義にして、其大さは一斗落の田地面積は一等田の四負乃至五負、四五等田の一負乃至二負位に當る。但し畑地の面積は田地面積の約半ばに相當するなり。

(八)海上の運輸機關 釜山に出入する汽船は殆んど我國の獨占にて、其重なる

汽船會社の航路を擧ぐれば

- 日本郵船 同 名 線 神戶より門司長崎釜山仁川大連旅順大沽を経て芝罘に至る
- 神戶浦港線 神戶より門司長崎釜山元山城津を経て浦港に至る
- 神戶仁川線 神戶より門司に寄港し釜山仁川に至る
- 大阪新設州線 往復とも釜山仁川に寄港す
- 大阪群山線 往復とも釜山馬山木浦に寄港す
- 大阪城津線 往復とも釜山元山に寄港す
- 大家汽船 甲 浦港より城津元山釜山港を経て下の關に着す
- 乙 下の關より釜山元山城津を経て浦港より北海道に往く(本線は今同大阪商船に買収せらる)

其他汽船

山唐津間を聯絡する大川運輸汽船、釜山馬山を航する八頭前組の汽船、柳久回漕店の汽船、藤野汽船、尼崎汽船、東津賀島汽船、宮崎汽船、宇田汽船の外、山陽京釜兩鐵道聯絡汽船あり

斯の如く何會社を問はず、孰れも釜山に寄港するを以て、海上の便は充分なると共に、又我汽船の勢力隆々たること偶然ならざるを知るに足るべし。次ぎに釜山港とは最も關緊深き洛東江は、其源を遠く小白山の東、大白山の南より發し、慶尙道の都邑にして殆んど此江畔に臨まざるものなく、旅客をして一たび此江に至れば村邑相連なり、楊樹の下、松丘の腹、瓦屋櫛比し産業商業皆此江畔に行はれ、商貨買米皆此江水に依りて輸送せられざる者なきを知るべし。河幅一町乃至三町にして、釜山より約十二里なる三浪津までは干満の差約一尺、水深は五六丈の所もあれども、水量概して少なく、漸く百石乃至二百石積の船舶が龜浦を経て三浪津附近に上下するに過ぎず。之より上流尙州に遡航するものは十石内外の平底韓船に限れり。汽船の如きは如何に平底なるものと雖も、其航行は困難の特に甚しきものとす。江畔著名の寄泊地を擧ぐれば尙州の洛東津、大邱の沙門津、玄風の城津、高靈の開山津、梁山の三浪津及び龜浦等にして、船舶の碇泊多きは百餘隻、少きも數十隻を下らず。

(九)京釜鐵道 京釜鐵道は我國民が海外に敷設したる鐵道の嚆矢にして、遠く